

---

# 人間万華鏡

カトラス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人間万華鏡

### 【Nコード】

N5349G

### 【作者名】

カトラス

### 【あらすじ】

盗みに入った民家の蔵で、男は偶然に高価な万華鏡を手にする。しかし、それを手にするために男はしてはいけない行為を犯してしまった。そして、万華鏡の中を見た男の運命は……アルファポリスのホラー大賞エントリー作品です。短編オムニバスホラーになっています。

## プロローグ

そろそろ本格的に夏が始まろうかとしての陽射しの強い昼下がり  
に、男は仕事をするために民家に人目を憚って忍びこんでいた。男  
が民家に侵入した目的は金品を拝借するためであり、土足で室内に  
上がり込んでいることから明白であった。

男にとって、その民家は前々から目をつけていた物件であり、日  
中は家の者がいないことも重々に承知しての犯行である。そう、男  
はちんけなコソ泥を生業としているのだった。

民家は、田んぼが広がる場所に建てられてる日本家屋であり、平  
屋創りであるものの昔の豪農を思わせるように蔵が隣接して建てら  
れている。

職業柄上、男はこのような民家にしばしばお宝が隠されているこ  
とを知っていた。

しかし、男の予想とは違い民家の室内を物色してもめばしい物は  
見つからなかった。

盗めたものといえば、千円にもならない小銭だけである。汗をか  
いた割には見入りが少なすぎるのだ

これでは、いくらコソ泥といっても日当にすらならないので、男  
は隣接してる蔵にも忍びこむことにしたのだった。

男は最初から蔵に入ろうかと思っていたのだが、なぜだが蔵には  
ただならぬ、言い知れぬ物を感じていたので忍び込むのを躊躇して  
いたのである。

それでも、小銭だけ盗んで帰っては男のプライドが許さないので、  
男は蔵の正面に立つと錠前を開けるための七つ道具を手にしていた。  
錠前は長い間、開かれていない為に道具がなかなか穴にじっくり  
入らずに苦労したが、そこは長年の経験から男はそれほど時間をか  
けずに錠前を外すことに成功したのだった。

男は、ゆっくりと蔵の扉を横にずらすと、人が入れるぐらいのス

ペースをつくった。

蔵の中からは、昼間だというのに冷やりとした空気が外に向って流れだしており、外から垣間見える真つ暗な蔵の内部も手伝って男は身震いを覚えてしまう。

そういったことから、男は蔵を開けたものの、いざ中に入るとなるとやはり躊躇してしまうのだった。

いや、いつもの男なら気にせず中に侵入するのだが、この蔵からは負のオーラーみたいなものが出ているような感じにさせ、怖気ずかせてしまうのである。

その感覚は、泥棒として直感で生きてきた男にとっては危険を察知する感受性のようなものなのかも知れない。それでも、男は危険が感じるところにはお宝が眠っていることも充分に知っていたので、意を決して中に入ることにしたのだった。

結果、男にとって取り返しのない事になってしまうのだが……

男は暗闇の中を手にした懐中電灯の明かりだけを頼りにしながら、蔵の中を進んでいった。

左右に明かりを振ってみると、棚が二段設置されており、その上に壺や茶碗などの骨董品らしき物が見て取れる。

しかし、男は骨董に対する目利きをほとんど持ち合わせていないので、それらに対してはさほど感心を示すことなく、蔵の奥に進んでいった。実際問題、壺や茶碗は割れ物なので持ち運びするのには男にとっては不便このうえない。つまり男が欲しいものは、持ち運びがし易い金品なのである。

小判などがあれば、一番いいと考えていたのだった。

そして、男は懐中電灯の明かりを正面にやると、一番奥に進んで行った。

入り口の扉から十メートルほどで蔵の奥に到着することが出来た。そこには、鍵の掛かった箆笥が置いてあり、男はそれを見てにんまりとする。

だが、箆笥に明かりを当てて見ると、蔵に入ること躊躇させていた言い知れぬ不安、負のオーラの源がそこに目に見える形で男の脳裡に警鐘を打ち鳴らしてきたのだった。

その、目に見える形のものとは、箆笥にはお札が何枚もみっしりと貼られていたからである。

お札が何枚も貼られていることから、男は箆笥の中を開けてはいけないと心では思うのだが、手は道具を持って鍵を開けにかかっていたのだった。

カチャと鍵の開ける音が静まり返った蔵に響くと同時に、男は抑え切れない好奇心から引き出しを引っ張り出して中を覗いて見た。すると、中には金色に光輝く丸い筒状のものが置かれてあり、男は、その筒状の物を手にとって観察してみた。

筒状の物は手にずっしりと重みを感じられ、筒全体が金で出来ていた。

しかも、表面には見事な色とりどりの牡丹が描かれていて、その花びらの雌蕊には精巧に貴金属が装飾として埋め込まれていた。正に男にとっては願っていたお宝なのである。

男は、暫しの間、時間を忘れて精巧に作られた筒を懐中電灯の明かり越しに見入ってしまった。

その時であった。

蔵の入り口から、擦れた女性の声が聞こえてきた。

「そこで何してる、それに触ったらいけんよ」

男は、慌てて声の発生源の入り口に向けて明かりを向ける。

明かりの先には、腰の曲がった老婆の姿が見てとれた。

そして、老婆はゆつくと蔵の中に歩を進めて男に近づいてくるのだった。

「万華鏡を元の場所に戻すんじや」

老婆は、暗がりから男の手に持つるものを指さしてそう言った。男は、老婆の声を聞いて、自身が持つるものが万華鏡であることに、その時初めて気がついたのだった。

なるほど、老婆の言うとおり筒の先端には覗けるように窓がついているのを男は確認した。あまりに筒の装飾が見事だったので気がつかなかったのである。

これほど、豪華な装飾がされてる万華鏡なので、男は万華鏡の中の世界もさぞかし素晴らしい細工がされてるに違いないと思った。男は、すぐに中を覗いてみたい衝動にかられたが、蔵の中が暗いので持ち出してから拝見させてもらおうと思うのだった。

そんなことを考えていたら、老婆に男は腕をつかまれていた。

「さあ、早く返すんじや」

男は急に腕を掴まれ驚いてしまい、思わず万華鏡を手から離してしまった。

「何しやがるんだよ、離せよ婆さん」

男は、本能的に老婆を突き飛ばしていた。

老婆は、強く押されたので後ろ向きになりながらしりもちをついている。

それでも、老婆はすぐに立ち上がると、また男に近づいてくるのだった。

「お前さんが、万華鏡を置いて立ち去ってくれたら、それでいいから……誰にも言わないよ」

男は、老婆の言ったことを聞いて、自分のしてる行為を見透かされ同情されてる気分になり怒りがこみ上げてくるのだった。男は、他人から憐みをかけられるのが一番嫌いなことなのだ。

そして、気がつけば、男は老婆の首に手をかけて絞めていた。

「何するんじや、やめてくれ」

老婆は首を絞められながら、必死に抵抗して足をばたつかせ男の腕に爪をたてた。

男は、少し体をよじらせたが、それでも老婆の首から手を離すことはなかったのである。

徐々に老婆の柔らかい首筋に男の指先が食い込んでいき、それに比例するかのように抵抗も弱まっていくのだった。

ほどなくして、老婆の足の動きが止まった。

それと同時に老婆の半開きの口からは血の混じった泡が男の目に映るのである。

それを見て、男は老婆の首から手を離すと自分のしてしまったことに畏怖してしまう。

それは咄嗟のこととはいえ、男は初めて人を殺めてしまったからである。

「ちきしょう、この婆さんがいけないのだよ……」

男は、そう独り言を呟くと、事切れた老婆の横に転がってる万華鏡を手にとると、蔵の外に出た。

そして、蔵の中で起こった事に蓋をするかのように、蔵の扉を閉めたのだった。

自宅であるアパートに戻った男は、万年床に寝転びながら、老婆の命の代償である万華鏡を手にとり眺めていた。万華鏡は明かりのついた部屋で見ると、一段と素晴らしいものだと思っただ。

蔵の中では、万華鏡の中を覗くことは出来なかったが、さきほどから中を覗いて見た男は、その手の込んだ中の世界に驚きを隠せなideいた。なぜなら、中に入ってる模様を作るための物は、普通の万華鏡のようにビーズや色紙の類のものでなく、光の屈折を充分に取り込むことの出来るダイヤモンドが惜しげもなく使われているからであった。しかも、角度を変える事に、男の見たこともない輝きを魅せてくれるのである。

その輝きは、手に入れる経緯である老婆を殺めてしまった後悔の念を忘れさせてしまっしてくるには充分すぎるものであった。

男は、その輝きを堪能しながら、高く売れるに違いないと思わず微笑んでしまうのである。

そして、男は明日になったら、いきつけの質にでも持っていて売る算段を考えると、枕元に万華鏡を置いて眠ることにした。

男は、ほどなくして浅い眠りについたので、突然に胸をしめ付けられるような感触に襲われて目を覚ましてしまった。自分の眠りを妨げる違和感を確かめるために、胸に目をやるとそこには白っぽい手が上から押さえつけていたのだ。その手を見た瞬間、男の顔色は血の気が引き見る見る青ざめていくと得体の知れない怖さから顔がひきつってしまうのだ。

男は胸が息苦しいので手を振り解こうとしたのだが、なぜだか体がピクリとも動かない。そして、目だけが怖いものにも関わらずに自身の体を押さえつけてる手の持ち主を探そうと視線を上に移動させるのである。

そして、男が白い手の持ち主を確認した時、恐怖は絶頂に達したのであった。

それは、昼間に蔵の中で殺めてしまったはずの老婆が男の腹の上に乗っかかり、凄いい形相で睨んでいたからである。

男は「ギャア」と思わず叫んでしまった。

その瞬間に老婆は姿が消えて、男の体は自由を取り戻した。

そして、男は立ち上がると、急いで部屋の電球をつけた。

部屋の周りを見渡してみても、老婆の姿はどこにもない。

男は、きつと悪い夢でも見たのに違いなれないと思い、気分を落ち着かせる為にタバコに火をつける。

そして、タバコを一服吸った。

その時、部屋の電球がチカチカと点いたり消えたりして点灯したかと思うと、突然に明かりが消えた。

部屋の中は、男がつけたタバコの火だけになり、煙がゆらゆらと昇るのが見えるだけである。

いったい何なんだと男は、電球から垂れてるスイッチに繋がってる紐を引っ張ったが、電球はつかなく、その代わりに聞き覚えのある擦れた声が耳に聞こえてくるのだった。

「万華鏡返せ、返せ」

その声は、蔵の中で聞いた老婆の声である。



男は、とりあえずこの場所から逃げ出そうと思い、枕元にある万華鏡を手に取ると、ドアに向って走っていき、ドアノブを廻してドアを開けた。すると、ドアの外には老婆の姿があり、男は外に出れないのである。

男は思わず後ずさりしてしまふ。

老婆も男が一步ずつ下がるたびに、歩調をあわせるかのようににじり寄ってくるのだった。

そして、また「返せ、返せ」と言ってくるのである。

しかし、男はせっかくのお宝を返す気などないので、老婆に向って「これは、俺のものだ！ お前には絶対に返さない」と叫んでいた。

老婆は、男の返答を聞くと、悲しそうな表情をして立ち止った。それから、万華鏡を指差して、うすら笑いを浮かべるのだった。

男は、その様子を見て、寒気が走ると手に持つてる万華鏡を確認した。

すると、あれほど見事な装飾がされた万華鏡が、まるで溶けていくかのように表面が剥がれていき、その剥がれた部分からは、おぞましい人間の顔が浮かびあがってきたのである。

それを見て男は、万華鏡から手を離そうとしたが、引っ付いて離れない。

そればかりか、万華鏡は手に同化しようとしているのだった。

「分かったよ、返すよ。返したらいいのだろう」

男は、発狂するかのような声を出して老婆に向って叫んだ。

しかし、老婆は返さなくていいと言うかのように、首を左右に振ると、手を上に向ってかざしだした。

その老婆の手に呼応するかのように、男の万華鏡を持つ手も上にいく。

男は、手が勝手に上がりだし、なす術もない状態である。

「おい、何するんだよ、返すから止めてくれよ」

男は老婆に哀願するように言ったが、老婆の体は半透明に透けて

いこうとしていた。

そして、消える寸前に老婆は男に言い放った。

「さあ、覗いてごらん……」

その老婆の声が男の耳に入った瞬間に、すっかり男の手に同化してしまった万華鏡は、その覗き窓の先端を男の意思など関係なしにまぶたにつき立てたのである。

そして、男は強制的に万華鏡の中の世界を見せられるのだった。

それは、寝る前に見た幾何学的なダイヤを散りばめた物などではなく、鮮明な人間模様が映像として男の脳裡に直接的に訴えかけてくるものであった。

しかも、その映像は男が万華鏡を盗んだことを後悔させるには、充分すぎるものであったのである……

## アパートの女

三年前の話です。

当時、私は大学生でして、大学の寮に住んでいたのです。

大学の寮に住んでいたのは、私の両親があまり、裕福な方ではなかったたので、親にあまり負担をかけたくないという気持ちもあって寮に住んでいました。でも、寮生活ってのは、思っていたより楽しいものでして、似たような境遇の学生仲間と毎日、酒を飲んだり、麻雀したりして過ごしていたんです。寮生活に慣れだしてきたら、バイトとかにも明け暮れたりしてました。とにかく、毎日が楽しかったですね。

しかし、寮にいと、本業の学業がおろそかになってしまいうのです。そりゃ、バイトやら、仲間の部屋にいつて遊んでいたりしたら、勉強などしてる暇などなくなってしまいう訳です。そして、実際問題として、単位の取得が危なくなってきたして、このままだと留年を覚悟しないといけない状態になってしまったのです。

それで、私は寮から離れて、アパートに一人暮らしすることにしたのです。幸いにも、バイトをがんばっていたので多少の蓄えもあったのです。それでも、やはり、家賃は安いことにこしたことは無いので、大学近くの不動産屋を数件回って、安い物件を探しまくりました。そして、見つけたんです。安い物件を……

私の探してる大学近くの相場はたいいひと月、四万から六万つてところなのですが、その安い物件は格安でして、ひと月一万五千円でした。私は嬉しくて、その物件に飛びつきましたね。

すぐに契約を不動産屋と取り交わしました。一応、なんで、こんなに安い物件なのかと、不動産屋の主人に聞いてみましたよ。主人の答えは「おんぼろアパートですから」ってだけでした。

おんぼろでも寮に比べたら、そのアパートはましでして、二階の

角部屋が私の新しい住まいになりました。

すぐに、私は退寮届けをだすと、そのアパートに引越しました。でもね、住みだして一週間ほどで、すぐに引越したくなりましてよ……

何故かと言うと、アパートに越してから気持ち悪い出来事ばかり起こるのです。

その、気持ち悪い出来事は、深夜に勉学に励んでいると、突然、玄関のドアがノックされるのです。こんな時間に誰だと思い、ドアについてる覗き窓から外を見ても誰もいない。たちの悪いイタズラだと思い、机にもどり勉強していると、また「ドン、ドン、ドン」激しくドアがノックされるのですよ！ 見にいっても、やはり誰もいないわけです。それと寝ているとき、金縛りにあいます。金縛りにあう前は、いつも天井がグルグル回ってる感じがして、ああ、来るなっつてわかるのですよ。でも、金縛りになるとわかった時にはもう体は動きません。体は動かないのですが、五感がとぎすまされるっつていいのか、音とかに敏感になるわけなのですよ。真っ暗闇の中、私の寝ている布団に向かって、「ズー、ズー、ズル」と何か引きずるっつていうのでしょうか音がするのですよね。それと同時に人の息づかいもするのですよ。私以外、誰もいるはずのない部屋です。怖いですよ、息づかい。「ハア、ハア。ハアア」って、どんな耳下まで聞こえてくるのです。

そして、私の寝ている布団に、その息づかいの主はのつかってくるのです。その時には、私は怖いので、目をつぶっていて、のってくる物の正体はわからないのです。気づくと朝になっています。気絶してしまったのでしょうか。布団の上には、大量の長い髪の毛がおちています。

それ以外にもまだあります。先日、寮仲間の友人が夕方、私のところに遊びにきたそうです。その友人は、外の道から、私のアパートを確認したのですが、私の部屋の窓に長い髪の毛の女が、べったり

と窓にひつついて外を見ていたのだそうです。友人は、彼女でも出来たと思い、邪魔しては申し訳ないと思い、私のアパートには訪問せずに帰ったそうです。勿論、私に彼女などいません。

さすがに、大学の食堂で友人の話を聞いた私は、ゾツとしました。友人に今まで起こった出来事を説明すると、友人は、やばいけど、面白そうじゃないかと興味深深でした。それで、ある提案をしました。

「おまえ、そのネタで論文、書けよ！ 霊体験ってなかなか面白いテーマじゃないか！ そうだ、お前寝ているときの金縛りを隠しカメラで撮影したらどうだ？ もし、何か写っていたら、凄いじゃないかよ」

友人は霊に悩まされている当事者の私と違って、楽しそうな感じがして癢にさわりましたが、金縛り中にどのような事が起こっているのか興味を持っていて自分が心の中にいたりします。それに、友人が思い出させてくれた論文も近々、提出期限も迫ってきていました。

「でも、俺、ビデオカメラなんて持ってないよ！」

気がつけば、私は友人にこのようなことを言っていたのです。

「なんだあ、おまえ。嫌そうな顔して結構乗る気になってるんじゃないかよ。ビデオカメラは俺が用意してやるよ！ そのかわり、何か写っていたら、心靈番組とかに投稿しようぜ。その時のギャラは折半してくれよな」

友人は冗談とも本気ともとれる口調でそう言ってきました。

そうして、私はビデオカメラで部屋を隠し撮りすることにしたのです。正確には隠し撮りとはいわないのですけどね。何しろ本人が仕掛けるのですから。

その日は結局、友人宅に泊めてもらいました。だってあのアパート怖いですから……

次の日に友人と一緒に昼前から夜の隠し撮りの準備をしました。

準備といっても、デジタルビデオカメラを設置するだけなのですね。とりあえず、私が寝ている位置が中心になるようにカメラを置くことにしました。狭い部屋なので部屋全体もカメラの視野におさまりました。あとは、深夜に起こる怪奇現象を待つばかりです。

夜までは、だいぶ時間があつたので、友人と一緒に少し遅めの昼食を食べにいった後、アパートのことを少し調べてみようと思い、友人と近くのネットカフェに行つてパソコンで検索してみることになりました。どうせ、何もでてこないだろうと思つていたのですが、アパートの名前を入力して検索してみると、未解決の殺人事件の情報が出てきました。その事件は五年前に一人暮らしの女性が全身めつた刺しにされて何者かに惨殺されたというものです。そして、その女性が惨殺されていた場所は私の住んでいる二階の角部屋なのです。

さすがに、その情報を見たときは全身、寒気というか悪寒がしました。友人は楽しそうに、「完璧じゃないかと」と喜んでいました。私は友人に、もう、あのアパートには戻りたくないし、今すぐ引越したいと言いましたが、せっかくカメラを設置したのだし、今日だけは我慢してみると言つてきます。明日になったら引越しの手伝いしてやるから今日だけはいつものようにアパートに戻れといいます。

そして、気がつけば、私は一人でアパートに戻っていました。いつものように、机に向かつて勉強をしていました。さっきからドアがガンガン叩かれています。怖いです。天井もパチイ、パチイーンと変な音がしています。テレビも勝手に電源が入ったりします。怖いのです。私は何故？ また、このアパートに戻ってきてしまったのだらうかと後悔しています。友人に「今日だけ我慢しろ」って言われたから、戻つたのでしょうか？

違うような気がします。何か得たいの知れないものの作用によってアパートに引き寄せられてしまったような気になってきました。そのような事を考えていたら、いつのまにか、私は布団に入つていま

した。天井の豆電球がチカチカ点いたり消えたりしています。怖いので布団をかぶります。布団の中の暗闇の中で頭の中がグルグル回ってる感じがしました。そして、案の定すぐに金縛りにあいます。私の布団に向かって「ズー、ズー」

と畳の上をひきずるような嫌な音が聞こえてきました。その音はドンドン近づいてきます。私は逃げ出したい衝動に駆られますが、体はびくとも動きません。そして、あの不気味な息づかいが聞こえます。

「ハア、アア、ハアア、アアアアア」

ついに声の主は布団に乗って来ました。いつもなら、私はここで意識がとんでしまうのですが、今日はまだ意識があります。かぶってる布団がめくられます。天井の豆電球がチカチカしてる中、私は恐ろしい者を見てしまいました。

それは、色白の女で、目はつり上がっていて、目からは物凄い憎悪の念を感じます、口からは血がたれてました。そして、その女は白い手で私の首に手をかけてきました。苦しいです。く……るし……い殺される。

気がつくと、朝になっていました。どうやら生きているようです。私は急いで身支度を整えると、ビデオカメラを持って友人宅に逃げ出しました。友人に昨日の夜にあったことを話すと、早速ビデオの映像を確認することにしました。ビデオの映像を見た私達は、昨日の出来事が夢でなかったことを知ることになりました。

映像には多少のノイズがあるものの、私の寝ている布団にむかって、トカゲのように畳の上をはいつくばって迫ってくる女性の姿が映っていました。女性は白い服を着ているようなのですが、ところどころ赤いしみがついていました。そして、カメラのアングルのせいで顔は映っていないのですが、私の首を絞めていました。

そこで、映像はノイズだけになってしまい終わっていました。「凄いい映像じゃないかよ！ 本物だ！」友人は興奮していました。

「あとは、俺に任せておけ、心靈番組に投稿してやるよ！　これは凄いで」

私は、友人にビデオの映像は任せることにしました。それよりも早くあのアパートから引越したい気持ちが先なので、その後には大学の寮長に事情を説明して部屋を用意してもらい、友人にその日のうちに引越しを手伝ってもらい、あのアパートから逃げることを出来ました。

大学の寮に戻った私は、疲れと安心の為か、ひさびさに安眠することができました。深夜になった一本の携帯電話にさえ気がつかずに寝ていたのです。朝になって携帯に着信があったことを知ることになったのです。

電話がかかってきた時間は深夜の二時すぎです。相手はビデオの映像と一緒に見た友人からでした。友人は留守番電話サービスに声が録音されていました。

「助けてくれえ、あの……あの女が……」友人の悲痛な声が録音されていました。

その後、友人は行方不明です。が……

それから、時々、私は友人の夢を見ます。

夢の中で友人は、背中にあの女を背負っていて苦しそうです。そして、あの女は友人の背中ごしに恐ろしい表情をしながら、私においで、おいでと手招きしています。

手招きしてる時のあの女の表情は少し笑っているように思いました。

私は友人のことが、もの凄く心配です。

おそらく、この世にはもういない友人のことが……了。



りある

僕は王子であつて、勇者でもある。でも、それは……現実世界の話では無い。

僕がリアルでない世界にどっぷりつかつてはや3年。

そのリアルでない世界とはオンラインネットゲームであつた。ゲームの世界では歳は14で、誰もがうらやむ容姿をしていて、職業は王子様。数々のモンスターやドラゴンを打ち倒してきた。城下の民衆は、僕の功績を称えて勇者様と呼んで、僕が街を通るたびに平伏する。先日の戦いにおいても、不死魔王と呼ばれていた化け物を、我が体に宿りし、剣と魔法によつて打ち倒し、隣国の姫を助けだしたばかりである。いまでは、その姫は、僕の婚約者でもある。全てが順風満帆な日々。しかし……それはリアルで無い世界でのお話。

「隆志君、今日から学校にいつてちょうだいよ」

ゲームの世界では夜中なのに、現実世界では早朝。母親が僕の部屋越して学校に行けと催促してくる。

一気に現実世界に引き戻される嫌な瞬間。

「ママ、ちよつと熱があるみたいなんだよ、それにお腹も痛いし学校休もうと思うんだ」

「何い、言つてるのよ、隆志君。ママと約束したでしょ　3学期から学校行くつてえ」

そうであつた。すっかり忘れていたが、母親と3学期になったら学校に行く約束していたのだった。

とりあえず、今日だけは学校に行くかあ、僕は勇者なんだ……約束は守らないとな。

「わかつたよ、ママ。支度して学校に行くよ」

僕の学校に行くという言葉聞いて、母親は安心したのか、すぐに下の階におりていく音が聞こえた。

学校に着いたら、すぐに先生に体調が悪いといって、保健室にこもったらしいなあ。そう思って、僕はひさびさに大嫌いな学校に行く事にした。

僕の名前は現実世界では、田中隆志といって実に平凡な名前。あつちの世界ではラインハルトというかつこいい名前なのだが……歳は17で都内の男女共学の私立高校に在籍している。僕は入学当初から、同級生に激しいイジメを受けていたので、学校が大嫌いであった。それが、原因で学校にはほとんど行っていない。

でも、今日だけ、今日だけは学校にいこう。王子たるもの、約束を守らないと民衆はついてきてはくれないのだから……

現実世界の僕は実にひ弱だと感じる。なぜなら、学校に行くまでのモンスターのない平穏な道を歩くだけで、もう肩で息をしている自分がいる。あつちの世界では、何日もかけて邪悪なモンスターのいる道なき道を歩いても全く疲れないというのに……なんとも、情けない。こんな、ひ弱な僕を見たら、軍師で友でもある、ランスロットは一体なんて思うだろうか？「ラインハルト様、ここは我慢の時ですぞ！」と涼しい顔でさりといってくれるだろうか？

そんなことばかり考えて、僕は学校目指して歩いている。

そして、ようやく学校の邪悪な門が見えたときには、朝礼開始5分前を知らずチャイムが鳴ったと同時にであった。

遅刻してなるものと、僕は急いで教室に入った。クラスメイト達の視線が僕に集中している感じがする。

「あいつ、死んだのじゃなかったのか？ 何しにきたんだあ！ 相変わらずキモイね！ 後で遊んでやろうよ」と言う、クラスメートのヒソヒソ声が聞こえてくる。特に「後で遊んでやろう」が僕の脳内に危険信号を送っているように思えた。

僕は自分の席に座った。久々に見る机には心ないクラスメートが書いたのだろう。

「死ねえ、キモイ、デブ眼鏡」って書かれている。隣の席の女子は嫌なものでも見るような顔をしていた。

やっぱり学校なんかにくるんじゃないやなかった。さっさと先生に体調不良を訴えて 早く家に帰ろう。

ほどなくして、担任の教師が教室に入ってきた。すぐに出席確認の点呼が始まる。

「田中隆志」

小さく僕は「はい」と返事をした。

その返事を聞いて担任は、

「おまえ、生きていたのか？ めずらしいなあ」

教室がドット沸いた。クラスメートの笑い声が痛い。

点呼が終わると、担任から校長先生の全校朝礼があるので、体育館にすみやかに移動するようにと指示があった。僕は、体調不良を担当に訴えるタイミングを逃してしまった。朝礼が終わってから担任に言おう。

体育館に向かう為、廊下を歩いていると、クラスメートの一人が僕の後ろ足を蹴ってきた。後方から悪意のある笑い声が聞こえてくる。

「早く歩けよお、デブ眼鏡」

くそお、早く家に帰りたい。そうしないと……

僕はクラスメート達と体育館に整列させられた。整列させられても、後ろの生徒は僕の足首をこつこつ蹴ってくる。

「くせえーよ、デブ眼鏡。フラフラしてんじゃないやねえぞお！」

それでも、僕は勇者だから、我慢した。

追い討ちをかけるように、どうでもいい校長の長い話。僕はなんだか、立ちくらみがしてきた。前で整列しているクラスメートの姿

がユラユラばやけている。ダメだあ、立つてられないと思ったとき、視界が突然暗くなった。

気がつくと、僕はベッドで寝ていた。すぐに、ここが保健室だと分かるのに、さほどの時間はかからなかった。

「田中君、大丈夫ですか？」

保健室の先生が意識が戻った僕に話しかけてきた。

「あのお、先生　僕はいつたい？」

「朝礼中に突然倒れたのよ、恐らく貧血でしょうね。校長先生の話　長かったから……」

「そうだったのですか？」

「そうゆうことです！」先生は笑顔で言った。

「もう、顔色もよくなっただし、気分がいいなら、教室に戻っていいわよ。今日は授業は昼までだし、といつても、もうお昼ね」

保健室の壁に掛かっている時計の針は11時40分をさしていた。僕は時計を見て嬉しかった。もうすぐ、帰れる。

こんなあ、嫌な学校ともまもなくオサラバ出来る。

「先生、ありがとうございます。まだ、少しフラフラするのでチャイムが鳴ったら戻ります」

「はい。ごゆっくりどうぞ」

僕は授業途中に教室に戻ることが嫌だったので先生に嘘をいってもう少し、ここにすることにした。

午前の授業の終了を意味するチャイムが鳴った。

僕は、再度保健室の先生にお礼を言って教室に戻ることにした。教室に戻ると、クラスメート達は帰宅の準備に取り掛かっていた。誰も僕が教室に戻ったことなんて、気がついていないようだ。この間にサツサト家に帰ろう。そう思ったとき、クラスメートの一人が僕に気づいた。

「おい、みんなあゝ。デブ眼鏡が戻ってきたぞお！」

教室にいた10人ほどの視線が僕に注がれる。僕の事をデブ眼鏡呼ばわりするこいつは、金子といって、入学当初から、僕の事をいじめる嫌なやつだ。顔は、あっちの世界でゴブリンと呼ばれているモンスターにそっくりで、歯並びの悪い汚い顔でニタニタ笑っているやがる。体育館で、僕の足を蹴った憎い奴。デブ眼鏡という、嫌なあだ名をつけたむかつく奴である。金子の声を聞いて、舎弟の木村が帰ろうとする僕の前に立ちふさがる。

「デブ眼鏡ちゃん、せっかく学校に来たのだから、俺達と遊ぼうよ！　そうだあ、お前え、2学期ほとんど　俺達が勉強教えてやるよ！」

木村の声を聞いて、話に聞き耳をたてたクラスメイトが僕の周りを取り囲んできた。

「面白そうね」

女性徒の一人がハシャイデいる。

「何い、教えてあげるの？」

「そうだなあ、マスターベーションでも教えてやるかあ！」

「え？　それってシコシコ？　自慰のことでしょう。面白そう、見たい、見たい！」

金子が得意の腕力で、僕を教室の端においやる。

「おい、デブ眼鏡。シコシコ教えてやるから……早くズボン下ろせよ！」

「嫌、いやあだよ、金子君」

僕は些細な抵抗を見せたが、全く無意味であった。

「そつかあ、おまえ、シコシコのやり方知らないのだなあ？　おい、木村あ、掃除用のビニ手持って来いよあ！　それで、お前がしこいてやれよ！」

「ええ？　俺がやるの、金ちゃん勘弁してよ」

「いいから、早くビニ手もってこいよ。それで　お前がしこいてやれえ、じゃないと……」

「まったく、あいよあ、あんちゃん」

金子の言うことは絶対なのだろうか？ 急いで木村がビニ手をもってきた。

「おい、吉岡あ。デブ眼鏡を押さえつけておけえ！」

金子は隅で見ていた吉岡に僕を押さえつける指示をした。僕を羽交い絞めにする吉岡。

「面白そうなことやってるよ」

噂を聞きつけてか？ 隣のクラスからも、このイジメショーを見物しに生徒が集まってきた。

「お集まりのみなさん。これから、田中君いや、デブ眼鏡がシコシコを披露してくれますよ！ 女性徒の方は目を背けないでね 滅多に見れないショーの始まり、始まり」

僕を取り囲んでいる生徒達から拍手が巻き起こる。

「さあ、木村あ、デブ眼鏡君のズボンを下ろしてあげなさい」

僕のズボンのベルトを緩めると、一気に木村はズボンを下げた。

女性徒からは歓喜とも悲鳴ともとれる声が漏れた。

「うひゃひゃひゃ、今時白のブリーフかよ」

金子は下品な笑い声を上げている。

「パンツも早くおろしてやれよ」

「あいよ、あんちゃん」

木村は僕のパンツをくるぶしまで下げた。

「キヤアア」興味深げに見ていた女性徒達から悲鳴が上がった。

「見てみるよ こいつ皮被ってやがるぜ！ ウキヤキヤキヤ」

みんなの悪意のまなざしが、僕の下半身に注がれる。もう、死んでしまいたい気分だ。

「さてと、木村あ、そいつのナニをビニ手でしごいてやれよ。こいつは、自分でしごきたくても両手をおさえられてるから自分でしごけないからなあ しっかり皮もむいてやるんだぞ！」

木村は右手にビニ手を装着すると、容赦なく僕のナニを上下にこすりだした。

「女性の方はもっと近くにきて見てやってくださいな、そのほうが

デブ眼鏡も興奮するから」

何人かの女性徒は僕が下半身を露出された時点で逃げていったが、このショーを金子が提案した時に「見たい、見たい」と金子を煽った女子は、僕の下半身の間近に顔を寄せた。

「うわあ、なんかあ、先っぽ濡れてきたよ、こいつ……」女性徒はおおげさに驚愕の表情を見せていた。

僕は頭の中の自分に自問自答する。

何でえ、王子で勇者でもある僕がこのような憂き目にあわないといけないのだろうか！ 昨日までのあっちの世界での僕は神に祝福されていたのだろう。ランスロットよ！ 僕の頭の中でランスロットが答える。

「これは、きつと悪夢でございますよ！ でないと……あまりにも……酷いでございます」

悪意に満ちたショータイムは、いよいよ僕の意味とは裏腹に終盤をむかえようとしていた。金子の思惑通りに僕のナニは女子に見られているという恥辱的状况に不肖にも敏感に反応することになり、木村の一定に繰り返される上下運動に我慢できなくなり爆発してしまった。

「キヤアアア」

女子の悲鳴が全てを物語っていた。

「汚ねえなあー、こいつ」

発射と同時に僕の周りに集まったギャラリーは、一目散に蜘蛛の子をちらすように逃げていった。

教室に残っているのは、僕と金子と木村に吉岡の4人だけだった。「楽しませてもらったよ、デブ眼鏡ちゃん。明日もちゃんと学校こいよ、もつと面白いこと考えておいてやるからさあ」そう言って、金子は僕の肩をポンと叩くと鞆を持って教室から出て行った。後を追うように取り巻き2人も教室から出ていった。

「おまえ、サイコーだな」と捨てセリフを残して。

僕は、一人教室に取り残された。一人になったとたん、涙がこぼれだした。

ちくしょう、ちくしょう。僕がいったい何をしたんだっていうんだ。ひさびさに学校にきただけだろう。

もう、死にたいよ、死にたい。僕なんか、生きていたって……一生イジメられるだけなんだ。だから、いつその事……

そんな時、ランスロットの声が頭の中で響いた。

「ラインハルト様、死ぬなんて、情けないこと、おっしゃらないで下さいませ。たかが、ゴブリンどもに一度敗北しただけでございませ。やられたら、やり返すのです。今までの戦いのように……」

ランスロットの言う通りだと思った。

今までの試練に比べたら今日の出来事など、取るに足りぬことなのだ。

ありがとう、ランスロット、いや我が友よ！

「礼にはおよびませぬぞ、ラインハルト様。来るべき日のリベンジの為、城に帰って支度をしましょうぞ！」

僕は頬を伝わる涙をふりぬぐうと、鞆を持って帰宅する、いや帰城することにした。

帰城途中、来るべき日のゴブリンとの戦いの為に量販店に立ち寄り、武器装備の支度を整える事に僕はした。量販店で鉈やハンマーなどの武器を買い揃えて、僕は帰城した。

帰城すると、母親が出迎えてくれた。

「隆志ちゃん、学校どうだった？」

「うん。みんな、いい奴ばかりで楽しかったよ、ママ」

「やっぱり、学校っていいものでしょう。ママ安心したわあ」

「ママ心配しなくていいよ、宿題あるので部屋に籠るけど心配しないでね」

僕は部屋に戻ると、早速パソコンを起動させた。見慣れた画面がすぐにモニターに写しだされる。画面内の指示に従いセーブデータ



ーをロードさせる。画面内に美男子の僕がランスロットを従い現れる。ここでは、もう誰も僕の事をデブ眼鏡とは呼ばない。会う人々が王子様とか勇者様とか言って平伏する。僕は神殿にいつて転職する事にした。なぜなら、今の勇者の職業では、さきほど量販店で買った鉈やハンマーなどが装備出来ないからだ。これが、装備出来る職業は……バーサーカー（狂戦士）のみである。レベルはマックスに近い状態なので、ものの数分で僕はバーサーカーに転職した。

バーサーカーに転職した僕は、新しい職業に早くなれる為に武器を装備して街の外に飛び出した。都合のいいことに、レベル7のゴブリン兵が現れた。僕はゴブリン兵の頭に容赦なく鉈を振り下ろす。ゴブリン兵の脳天からは緑色の液体が飛び散った。突き刺さった鉈を勢いよく脳天から引き抜くと、ゴブリン兵は脳天から緑色の血しぶきをあげて、もがき苦しみながら絶命していく。画面にはEXPの文字が躍っていた。

しかし、ゴブリンは弱っちいモンスターだと、この時、僕はつくづく思った。こんな弱い奴に今日学校でやられたと思うと情けなくて、また涙が流れた。よし、明日リベンジしてやるぞ！

僕はそれから、数時間ほどゴブリン兵をなぶり殺すと宿屋にいつて明日の決戦の為、休息をとることにした。セーブしますか？ 勿論「はい」である。

すぐに、次の朝が訪れる。バーサーカーになった僕を止める事は、もはやままならぬ。それは、パラディンのランスロットでさえ難しいことであった。無敵の力を得た僕は、鞆に武器を忍ばせて、悪の巣窟に単身乗り込むことにした。

悪の巣窟にたどりついた僕は、僕の席に取りついているゴブリン金子一団を発見した。

むこうも、僕の姿を見るなり、ニタニタ笑いながら慣れ慣れしく話しかけてくる。

「デブ眼鏡ちゃん、今日も楽しく遊びましょう」

僕は鞆から鉞を取り出すと、ゴブリン金子の首筋に鉞を振り下ろした。鈍い音がして、金子の首半分が垂れ下がっている。切り口の首下からは、大量の血が噴出している。

「キヤアアア」

昨日と同じく女子の悲鳴が教室内に木霊した。床に倒れた金子はピクピク痙攣していた。

次に倒れて痙攣している金子の横にブルブル震えて腰を抜かしている木村の脳天に鉞を振り下ろす……

続けて吉岡に　昨日、僕のことをバカにした魔女に……

僕の体は殺戮の快感にうち震える。

この瞬間、リアルの世界で……　僕は勇者になったのだった。  
了。

## 罰ゲーム

男は薄暗い廊下をゆつくりと物音をなるべくたてないように進んでいた。男が今いる場所は数年前に経営が破綻してしまった廃墟の病院である。男はむちゃくちゃ怯えていた。なぜなら、この病院は”出る”と近所で評判なのである。昼間でも薄暗い病院なのであるが、男が今いる時間は丑三つ時であった。なぜ？　このような時間に、このような場所に男がたった一人でこないといけないのか？

理由は簡単である。これは罰ゲームなのだ。昨日、男は仲間と賭け麻雀をしてひどく負けてしまった。仲間内では金銭を賭けるのはご法度なので最初から一番負けたものが、この病院に一人で徘徊しないといけないとわかつていたのだが、男は麻雀には、いささか自信があつたので、まさか自分が最下位になるなんて夢にも思っていなかったのであつた。しかし、結果はこのザマで……この薄気味悪い廃病院を一人で徘徊しないといけないのだ。

男の仲間は病院の玄関で待っている。ご丁寧に病院に男が入っていく前に、散々脅かしてくれた。

「あの病院はなあゝ婆さんが”出る”んだそうだ！　婆さんにつかまると魂を持つていかれるって話だ！　罰ゲームといっても命がけだから気を抜いたらだめだぞ。それと、婆さんは物音に敏感だから、そのへんも注意するのだぞ！」

男は仲間が忠告してくれた通りに物音をたてないように廊下を進む。しかし、仲間が言っていた婆さんの事を考えると実に怖い。男の心臓はバクバク激しく鼓動している。それでも、男はなんとか、自分を奮立たせて廊下を進む。そして、男は恐怖を抱きつつも、仲間が事前に指示していた手術室と霊安室をクリアすることが出来た。あとは来た道に戻って仲間の元に戻る、そしたら、この罰ゲ

ームは終わる。そう考えると、男はつい早足になってしまっていた。来た道の長い廊下を早足で進む男、あの廊下の角を曲がると仲間がいる玄関ホールに着くと思った時、男はついに駆け出して廊下の角を曲がった。その時、廊下の角にあった、防火用バケツに足をあててしまい、激しい音をたててしまった。男の視界には玄関ホールで心配そうに男を見ている仲間の顔が見える。男が音をたててしまったので仲間の顔が歪んだ。仲間はやってしまったという表情をしている。男は不安になってふと横を見ると、老婆が神妙そうな顔を男をみていた。そう男は老婆に見つかってしまったのだ。男がやばいと思ったとき、老婆はなにやら得たいの知れない呪文みたいな言葉を男に発する。その瞬間、男の体は金縛りにあつてしまって、身動きがとれない。更に老婆は男が身動きが取れないのを確認すると、男に水みたいな物を体のかけた。男は体が焼けるような痛みを感じた。

その時である……薄暗い玄関ホールがパツト明るくなった。いつのまにか、老婆の横にはテレビカメラと照明を持った男達とマイクを持った女性が立っていた。

もがき苦しんでいる男に老婆は声をかけてきた。

「苦しいかあ？ 苦しいだろう！ 我慢せずに楽になりなさい」

男は老婆が何をいつてるのか訳がわからない。続けて老婆は男に

……

「成仏しなさい！ 成仏を！ なぜならお前は死んでることすらわからない地縛霊なのだから」

老婆はカメラを持った男に指示をだしている。

「しつかり、撮るのですよ、私の除霊によってこの霊が成仏するところを」

マイクを持った女性が老婆に質問する。

「法師様この霊は一体？」

「恐らく、この病院で亡くなった地縛霊です。まもなく、この霊は

成仏するので、この病院での怪奇現象はおさまることでしょう」

「流石ですね。法師様」

女性が感嘆している時に、男の体は成仏した。

無論、この様子が後日、テレビの心霊番組で放送されたことは言うまでもない。

視聴者がカメラで男を確認することは出来なかったが……

## 目撃者

僕ね。凄いものをみちやたんだよ。

でも、ある事情があつて誰にも話せないんだ。  
何をみたかつて？

うんとね。

夜遅く、部屋の中でね。

男の人と女の人が、大きな声で騒いでいたの。  
そのうちにね。

女の人が、周りにある物を、男の人に投げつけてるの。  
それで、男の人の顔に、投げたものが当たったのね。

男の人、額から赤いものでてたなあ。  
それからね。

男の人、さらに大きな声で騒ぎ出してね。

男の人、グーの手で女の人顔殴ったの。

女の人、口から赤いものでてたよ。

それでね。

男の人が女の人首を絞めたしたの。

ちよつとしてから、さっきまで元気だった女の人、動かなくなつちやつた。

その後、男の人は女の人を袋につめて、部屋から出ていつちやつた。

朝になつて男の人が、一人で帰ってきたんだよ。

女の人どこいったんだらう？

でも、そんな心配すぐなくなつちやつた。

夜遅くになると、女の人も部屋に帰ってきたから……

でも、不思議なんだよなあ。

その日から、女の人、部屋の鏡には映らないんだあ。

男の人、女の人いること気づいてないみたいだしね。

で、女の人もいること気づいてほしいのか、どうかはわからないんだけどね。

男の人の背中に乗っかってみたり、男の人が寝てる時に、おおいかぶさったりしてるんだけど全然気づかないみたい。

それから、最近ではね、男の人よく一人でぶつぶついつてるんだ。俺が悪かったとか、許してくれとかね。

それでね。

昨日の事なんだけど、いつものように、夜になると女の人、家に帰ってきて、男の人におんぶしてもらっていたのね。

女の人、凄くうれしそうだったな。

口から赤いもの、いっぱいだしながら笑っていたからね。

そしたらね。

男の人、狂ったように騒ぎだしちゃって、もう止めてくれとか言ったりしてたんだよ。

それから……天井に縄かけて首つりしちゃった。

でも、女の人なぜだか、男の人助けしないでニタニタ笑っているだけなんだよね。

なんでだろう？　へんなの。

次の日の朝になって、制服を着た人がたくさん部屋に訪れたけど、部屋の中調べたり、写真とったりしただけで、すぐに帰っていったよ。

女の人、ずっと部屋にいたけど、誰も何もいわなかったなあ。

ふつうは気がつくと思うのだけどね。

それで、今は部屋に女の人がいるだけ。

女の人、ようやく人形の僕に気づいて笑ってくれたんだよ。  
そして、怖い顔して言ったんだ！

「ずっと。見てたのねえって！」



## 成仏

ある雑居ビルの中に、心霊相談所があった。

表の看板には“霊のことなら、なんでも相談、あなたのお悩み即日解決”と書かれている。

ある日、相談所に青年が訪れた。

「霊に苦しめられているんですけど、助けてもらえないでしょうか」  
青年は、かなり困ってるらしく、青白い顔からその様子が窺える  
「もちろんですとも、まあ、私に任せてください。私の霊能力をもつてすれば、どんな霊もひとたまりもありませんぞ」

霊能者は、自信満々に言つてのけた。

霊能者は、さらにつづけて、

「霊にも、いろいろありましてなあ　生霊、死霊、動物霊など、その種類によつて対処法が変わつていきますので、もう少し詳しくお話してもらえますかな」

さすがに、その筋の専門家もつともらしいことを言う。

青年は、青白い顔で言つた。

「最近、この近所のアパートに越してきました、越してきた初日から、夜、寝ようとすると、なんだか、胸騒ぎがして、寝苦しい。最初は、きっと、環境が変わつて、疲れてるだけなんだと、おもつてました」

「ふむふむ」

霊能者は興味ぶかげに、青年の話を聞いている。

「そんな日が、何日が続いたんです。それから、三日前から寝苦しいだけでなく、部屋の天井から、パシ、パシと変な音がするようになり、その音を聞くと金縛りにあつのですよ」

「その変な音はラップ音ですな」

霊能者は最もらしい専門用語を言つとお茶をすすつた。

「そして、昨日なんですけど、ついにてたんですよ！」

青年は語気を荒げて言った。

「昨日も、いつものように寝ようとする寝苦しい。でも、寝ないと次の日の仕事がつらい、だから、昨日は睡眠薬をのんで無理に寝たんですよ。すると、朝方、どうも息苦しくて、息苦しくて目をあけたんですよ。そしたら、若い女が、わたしの上に馬乗りになって、凄い形相で首を絞めてたんです。もう、私びっくりしちゃってあわててアパートから飛び出したんですよ」

青年は昨晩よほど怖かったのだろう。霊能者に説明しながら小刻みに震えていた。

「なるほど、それは、まさしく悪霊、自縛霊ですな」

霊能者は、そんな青年のことなど気にせずに興奮して言った。

「実は、あなたが怖がると思って、言わなかったんですが、さきほどから、あなたの後ろに、女の霊が憑いていて、わたしの顔をすごい顔で睨みつけてるんですよ」

それを、聞いて青年はブルブルと震えている。

震えている青年の様子をみてから、霊能者はさらに、脅かす事を言う。

「このままでは、あなたは、間違いなく、その女に、とり殺されますよ！」

さらに、霊能者は続ける。

「この女、かなり、レベルの高い悪霊です。わたしの見たところ、十年に一度、現れるかどうかの強い邪念をもっていますよ」

それを、聞いて青年は泣き出してしまった。

「嫌だあ、死にたくないよ」

青年が泣き出したのを見て、霊能者は満足そうだ。

「安心してください。最初に言ったように、私の霊能力をもってすれば、いくら、レベルの高い悪霊でも、必ず成仏させて、あなたに迷惑はかけませんよ！　しかし、少々、謝礼の方は、お高くなりま

すが……」

そういつて、霊能者は青年の返事を待った。

「本当ですか、この苦しみから、逃れられるのだったら、お金は惜しくありません。どうか、この女、成仏させてやってください」

霊能者は青年の返答に満足気である。

「では、今から、女を成仏させる御払いをしますので、しばしお待ちください。用意をしてきますので……」

霊能者は青年にそう告げると席を立て部屋から出ていった。

ほどなくして、霊能者が部屋に戻ってきた。

霊能者は神主のような格好をしていて、手には豆電球を持っていた。

「いいですか、今から除霊をおこないますよ！この豆電球が消えたら、霊が成仏したことになります」

そう言って、霊能者は部屋の明かりを消した。

そうして、霊能者の除霊が始まった。

最初に、霊能者は青年に、悪霊退散水という怪しい液体を青年にふりかけた。

悪霊退散水とは、偉いお坊さんから高値で買ったそうだ。

それから、霊能者は祈祷を始めた。青年には、霊能者が何をぶつぶつ言っているか解らなかったが、時折、聞こえてくる悪霊退散とか、悪霊よ成仏しろ！だけ聞きとれた。

それ以外は意味不明である。

霊能者が怪しげな祈祷を初めて一時間ぐらいたったころ豆電球が消えた。

霊能者は部屋の明かりをつけて自信満々に青年に語る。

「あの女、なかなかしぶとい悪霊でしたが、なんとか無事成仏させる事ができましたよ。今日からは、睡眠不足に悩まされることなく安眠できることでしょう。また、なにかあったら、いつでも相談にきてくださいよ」

青年は霊能者の説明を聞いて安堵の表情をうかべている。

「先生、どうも、ありがとうございました、これで安心してアパートに帰ることができます」

そうして、青年は高い謝礼を霊能者に払うとアパートに帰っていた。

霊能者は、青年が帰るのを確認してから、満面の笑みをうかべた。「フ、フフフ、全く馬鹿な奴だったな、俺の事を本当に霊能者だと信じてやがった。悪霊退散水もただの水道水なのに……」ご丁寧に帰りには、インチキな壺まで買っていつてくれたよ。今日は本当に儲かったな、これだから、坊主と霊能者はやめられない」

その夜、インチキ霊能者が寝ようとすると、妙な胸騒ぎがした。しばらくすると、天井からラップ音が聞こえてくる。

それを聞いたとたん金縛りになる。  
誰かの気配がする。

霊能者が横を見ると、さきほどの青年が横に座っている。

恨めしそうな、目でインチキ霊能者をみている。

「先生、わたしは、あれから、あの女にとり殺されたんですよ。あの女が言うのには、誰かを絞め殺すと成仏できるそうです。先生、僕は殺されても、苦しくて、苦しくて……先生なんとか、あなたの霊能力でわたしを成仏させてください」

青年はそれから、凄い形相になると呟いた。

「でないよね、先生を……」

## 殺人ビデオ

某オカルト雑誌編集部内で編集長は室内全体に響き渡る大声で記者に罵声をあびせていた。

ここ数週間、毎日のように繰り返される光景である。

本日の槍玉にあがってるのは、記者歴八年になる山田という男。

「おい、山田。何年記者やってんだよ！ こんな記事で読者が満足する訳ないだろう。だから、お前はいつまでたっても、ヒラなんだよ」

編集長はネチネチひつくく山田をいびる。

周りで傍観している他の記者たちも、いつ自分が編集長に呼ばれて罵倒されるかビクビクしていた。

「全くお前には才能ないなあ。うん？……なんだ、その反抗的な目つきは文句でもあるのか？」

そう編集長は言うと、山田のほつぺたを平手うちした。

ここでは、暴力も日常的にワンマンの編集長によって行われている。

「いつものように、この箱に罰金いれろ」

編集長は山田にダンボールで作った箱を机の上におくと、山田から強制的に金を徴収した。

ここでは記者の記事が編集長のお気に召さなかったら貴重な時間を浪費させたと云う理由で、一回あたり千円の罰金を罰金箱に入れないといけなかった。

そうして山田は罰金箱に金をいれると、はんべそをかきながら自分のデスクに戻っていった。

編集長は椅子にふんぞり返ると、今度は女子事務員の遠藤に声をかける。

「おい、遠藤。コーヒー早くもってこい」  
物凄く横柄な物言いである。

そして、慌ててコーヒーを持ってきた遠藤にたいしてちよつかいをかけるのだった。

「あれ、今日は遠藤ちゃん顔色悪いねえ。昨日は彼氏の家にでもお泊りしたのかな？ それともあれの日かな！」

編集長はスケベな笑みをうかべて遠藤の尻をなでた。

「やめてください」

遠藤は、か細い声でそう言うのと逃げるようにして自分の場所に戻っていった。

この職場、セクハラも日常茶飯事であるのだ。

こういった職場で作られた雑誌だけあって雑誌の発行部数は毎月減っていく、職場のあちらこちらでは返本されてきた雑誌の山が崩落しそうになりながら平積みされていた。

もはや廃刊は時間の問題である。

編集長は一時間前に宅配業者が小包と一緒に届けてきた返本の山を見ながら、雑誌が売れないのは記者達がへばい内容の記事しか書けないからだ、自分の責任は棚にあげて真剣に考えていた。

実際に雑誌に載せるかどうか判断するのは編集長の仕事にかかわらず自分の非では無いと思っている。

そうして返本の山が、さして広くない編集部内の空きスペースを埋め尽くせば埋め尽くすほど、編集長のストレスは返本の山と同じように大きくなり、それを発散させる為に部下に当り散らすのだった。

そんな時、興奮した様子で新人記者の加藤が編集長の元にやってきた。

「編集長、大変ですよ！ さきほど読者から送られてきた小包に凄いビデオが 今からその内容を見てみてください」

編集長は加藤の並々ならぬ様子からビデオに興味を示さずにはいられなかった。

早速デスクにあるビデオデッキにテープを挿入して中身を確認す

る。

そのビデオは最初に送り主からのメッセージがテロップで書かれていた。

テロップは黒い画面にくっきりと映えるように赤い字体になっている。 ” 私は貴社が製作している雑誌の熱烈な愛読者であるが、最近貴社が取り扱っている内容にいささか不満がある。それで貴社の雑誌に渴と刺激を与える為にこのビデオを進呈する。これは、私と私の勇志が撮影したやらせ無しの、殺人を収めたビデオである。どうぞ、私のコレクションを楽しんで見てくれ！ ”

その後、映像が流れ出した。

画像はいささかぶれていた。

広いコンクリートがむき出しになった四角い部屋に女性が全裸で目隠しをされて、椅子に縛りあげられている。床には透明のシートが所狭しと敷かれていて、そこに手術用のような青い服を着た男が現れた。

男は顔が分からないように、西洋の悪魔儀式につかわれるような二本の角がとびだしている牛の頭部のかぶり物をしている。

男は全裸の女性に近寄ると目隠しを外した。

女性は自分の於かれている異様な状況と男の不気味な風貌で叫び声をあげた。

男は女性の様子を見て笑っているのだろうか、かぶり物の二本の角が揺れている。

男はしばらくしてから、おもむろにポケットからアイスピックを取り出すと、女性の目を躊躇無く突き刺した。

女性の叫び声が絶叫にか変わった時だった。

そうして視神経とともに取り出された眼球が無残にもカメラによって映し出された。

映像は場面が変わって更に続く。

今度は片方の眼球を取り出された女性が無機質なパイプベッドに縛れていた。

その横に、さきほどのかぶり物をした男が立っていてナイフを取り出すと、女性の胸から腹にかけて真一文字にナイフの刃をたてた。恐らく気絶していたと思われる女性が再び絶叫の声をあげた。

絶叫の声が途絶えた時には、女性の内蔵が床に敷かれたシートに散乱していた。

最後にチエーンソーが白い煙をあげて女性の体をバラバラにしているところで映像は終わった。

そして、また赤い字体で書かれたテロップが流れた。

” 如何だっただろうか？ 恐らくこれを見た者は偽者じゃないかと思うだろう。こんなもの作ろうと思えば作れるからな！ これが真実の映像かどうか確かめたかったら、記連絡先に電話してこい。もっと凄いものを見せて上げられると思うよ。勿論ただという訳にはいかないが……”

こうして時間にして三十分にも満たない殺人ビデオは終わった。ビデオの内容を見て、編集長は見る前と違ってがっかりしていた（やはり、これは偽者だ！ 結局のところ謝礼を見込んでのものだろう）

でも、せつかくのネタだから使わない手はないだろうと編集長は考えた。

実のところ最近掲載するネタにこまっていたから渡りに船だ。

読者はリアルな物を求めたる傾向だ。もうUFOやら未知の生物、心霊写真や怪奇スポットには飽き飽きだろう。この手の殺人ビデオは業界ではスナッフ物といって確実に読者数を稼げるネタだからだ。編集長は早速送り主に連絡をとるように指示した。

二時間後、新人記者加藤がまたも興奮して編集長のところに報告に来た。

「編集長！ さきほどの送り主と連絡がとれまして」

加藤の話では送り主は、今晚編集長と会いたいということだった。会ってくれたらもっと凄い物を見せれるということだった。



編集長はもつと凄い物と送り主のいった事が気になった。都合のいいことに、ちょうど今晚は何の予定も入ってなかったのだ、加藤に今晚九時に会えるようにセツテングするよう指示をした。加藤は大きな仕事を与えられたせい、か、生き生きとしているように編集長には見えた。

午後八時五十分。約束の時間十分前に編集長と加藤は港区にある、今は廃業している工場の倉庫の前に来ていた。

ビデオの送り主がここで会いたいといったからだ。

編集長は一人で会うのはさすがに怖い、加藤が同行しているので安心だった。

そして編集長は倉庫の入り口にある扉のノブを回した。鍵は掛かって無くすぐに倉庫の中に入ることが出来た。

さすがに中は電気がついていないため真っ暗だった。

こんなこともあるかと持参した懐中電灯で照らしつつ倉庫内の奥に進んでいった。

加藤は編集長の後ろから付いてきている。

最初、編集長は加藤に先頭にたてといたが、入る前からブルブル震えていたので無理だと判断したためであった。

懐中電灯の明かりから見える倉庫内は見覚えがあるものだった。

それもそのはずで殺人ビデオで女性が無残にも解体された現場だからである。

その時であった。

後ろにいた加藤がいきなり編集長の体を羽交い絞めにした。

そして、倉庫内の電気がいきなりついた。

「おい！ 何するんだ加藤！ いいから離せ」

「……」

加藤は無言でますます編集長の体をしめあげる。若いだけあって編集長の力では引き離せない。

編集長の前方からはビデオに出ていた牛のかぶり物をした男が近

寄ってきている。

男は編集長の腹を思いつき殴った。

あまりの痛みで編集長は気絶した。

しばらくしてから、編集長は強制的に水をかけられて意識をとりもどした。

気づくと編集長はあの殺人ビデオにでていた女性と同じように全裸で椅子に縛り付けられていた。

正面には、女性を解体した牛のかぶり物をした男がたっていた。

その横には加藤の姿もある。

加藤の周りにも人が三人いた。どれも編集長が見慣れた顔ぶれである。

そう今まで編集部内で罵倒してきた記者達と事務員の遠藤だった。そして、かぶり物をした男が聞き覚えのある声でいった。

特徴的な声からして男は山田である。

「編集長さん！ あなた少々やりすぎたのですよ。ここにいるみなさんはあなたの事をひどく恨んでますよ、

いくらバカなあなたでも、もう気づいていると思いますが、あの殺人ビデオは偽者ですよ！ あなたをおびき寄せる為の罠ですよ」

山田は少し笑ってから続けた。

「でもねえ、今からは本物の殺人ビデオを作りますよ。あなたの体を使ってね……だって本物じゃないと雑誌の読者は満足しないでしよう」

しばらくしてから、チェーンソーのけたたましい音と共に編集長がバラバラになった事は言うまでも無い。

書店では本当にあった殺人ビデオというタイトルで、編集長の無残に解体される様子が雑誌のDVD付録としてつけられていた。

あの編集部は皮肉にも編集長の死によって生きながらえた。

それは、もう返本の山がないことで窺えしれることだからだ。



## スワンの翼

みなさんは、醜いアヒルの子という童話を知っておられるだろうか？

たぶん、知らない人はほとんどいないだろう。

デンマークの詩人アンデルセンの有名な童話。

アヒルの群れの中に紛れた白鳥のヒナ鳥が、アヒルのヒナと違うという理由でいじめられるお話で、最後は美しい白鳥に……

僕は、この話が大好きなのです。

何故好きかって？ それは……

僕も学校でイジメられているからにほかならないから。

僕はアヒルのヒナでも無く、白鳥のヒナでも無い、イジメている奴と同じ人間なのにイジメられるんです。

僕がイジメられる理由は、イジメてる奴が言うのには、顔が不細工なんだそうですよ。

エラがはつてるとか、顎がしゃくれているとか、タラコ唇とか言っ  
て、毎日、学校でイジメられるのです。

毎日、毎日、ことあるごとに、同級生達は僕をイジめる。もう耐えられない、いつそのこと、イジメていた奴の名前を遺書に書いて死んでやろうと思っていた時に、事件が起こったんですよ。

それは、僕が醜いアヒルの子から、白鳥になったような出来事だった……

その日の放課後、僕はいつものように、同級生達に校舎裏に連れ出されたんです。

同級生達が僕を連れ出す理由は、罵声を浴びせたり、殴ったりするためなのですよ。

同級生達は三人がかりで、僕の顔の事を馬鹿にしましたよ。本当に悔しかったです。まだ、自分の事だけだったら我慢できた

のですけど、両親のことまで同級生三人は罵ってきました。どうやったら、こんなキモイ子供が産まれるのだってね。

さすがに、弱虫の僕でも頭にきましたよ！

僕は、「うわぁ」と叫び声を上げて、同級生の一人に掴みかかりました。

でもね、元々、腕力が強くて喧嘩上手なら、イジメられるわけないですよ！

同級生達は一瞬驚いたものの、すぐに「何だこいつ」と言っ  
て、すぐに僕の体を抑えつけてしまいました。

そのあとは、酷いものですよ。ボコボコに殴られたうえに、同級生の吸っているタバコの火を手に押しつけられました。もう、熱いってもんじゃなかったです。気が遠くなるような激痛です。

それでも、同級生達の怒りはおさまらないらしく、今度はズボンをずらされて、僕の大事なところに根性焼きをしようとしてきました。

僕は泣き叫びましたよ、「それだけは、やめて」ってね。

同級生達に哀願しました。でも、奴らはニタニタ笑ってるだけで、やめてくれる感じじゃなかったですよ。

僕は、心の中で神様をお願いしました。

「助けてください」ってね。

そしたら、奇跡が起こったのです。

ちょうど、同級生達が嫌がる僕を羽交い絞めにして、僕の大事なところにタバコの火を押し付けようとした瞬間にですよ。

突然、同級生達の手が止まったのです。そして、口をポカンと空けて、空を指さしていました。

僕も空を見上げました。すると、見たこともない物体が僕達の頭上に浮遊していました。

その物体はかなり大きいもので、クルクル回転しながら、眩い光を発していました。

僕達が、その光を見ていると、なんだか眠たくなってきたのです。

気がつく、僕以外の同級生達は、殺風景な部屋とゆうか、空間といったほうがいいでしょうか、とにかくベッドのようなものに裸で縛りつけられていました。僕が空間と表現したのは、同級生達を縛っているベットのようなものに脚が無かったからと、その部屋全体が透明であって、おそらく床であるところから、下の景色がよく見えていました。どうも、ここは地上ではなく空中なのです。だって、下に広がる景色の一つに、僕達の学校が小さく見えているのですもの。

でも、何故、僕だけ縛られてなく自由なんだろう？ そんな事考えていましたね。

すぐに、答えがわかったワケなのですけど……

突然、僕達のいる空間の一部が歪んで、そこから、見たこともない生物が現れました。

そうですね、例えるなら、アニメなんかに出てくる悪魔、そう魔王ルシファーって感じです。

髪の毛とかは無く、頭からはアンテナみたいなものが出ていました。顔はエラが張っていて、顎なんかしゃくれていました。唇もタラコみたいに分厚くて、気持ち悪い顔です。そして、一番の特徴は体の背中から、大きくて立派な白い羽が生えていることでした。だから、僕はなんとなく、悪魔だと思ったのかも知れません。

それで、その悪魔みたいな生物は、縛り付けてある裸の同級生のところに行くと、長い爪で同級生の腹を引き裂きました。生きたままですよ！ すぐに同級生の内蔵が露出してまして、心臓とか丸わかりで、ピクピク鼓動しているのですよ。そして、開いた内臓から、同級生の腸を引きづり出して、喰らいました。

空間からは、血の匂いとゆうか、生臭い匂いが立ち込めて、吐き気がしました。みるみるうちに、同級生のお腹は空洞になって頭と

下半身以外は皮だけになってダランと垂れてました。

同級生の内蔵を喰らったそいつは、もう一人の同級生のところに行き、今度は頭の上を頭蓋骨ごと切断しました。一瞬、同級生は体の一部が痙攣をおこしたのですが、すぐにおさまりました。あとは地獄絵図のようなので、ご想像におまかせします。そうして、同級生三人は残酷にも、悪魔みたいな生物に喰われてしまったのです。

今度は、僕がそいつに喰われてしまうのだと思った時、頭の中で声がしました。

「さあ、同胞よ、お前も喰え！」

一体、この生物は何を言ってるのだと、最初は思ったのですが……どうやら、僕もこの生物の仲間のようです。

なぜなら、僕の背中にも、大きくて立派な白い翼が生えているからです。

僕は……白鳥だったのです。

醜いアヒルどもではなく、白鳥なのです。

僕は、嬉しくなって、仲間と一緒に、アヒル達の体に喰らいつきました。

とても、おいしかったです。

了。

## ずっと 一緒だよ

僕は小さい時から、ずっとひとりぼっち。  
でも…… やつと友達ができたんだよ。

あの日、あの時、あの公園で……

僕は、あの日何気に公園にいったんだよね。

砂場で、少年がひとりで遊んでたんだよ。

それで僕は声をかけたんだよ。

「ねえ、僕　ひとりなの？」

「うん、ママお買い物いったんだ」

「そうなんだ。じゃあ、お兄ちゃんと遊ぼうよ」

「うん、遊ぼうお兄ちゃん」

「お兄ちゃんの、家にいつてあそばない？」

「だめだよママにおこられちゃうよ」

「お兄ちゃんの家にきてくれたら、お菓子いっぱいあげるよ。だからお兄ちゃんの家にくいこうよ」

「うん」

それから、僕は少年をアパートにつれて帰ったんだよ。

「お兄ちゃん　やめてよ」

少年は泣きじゃくっていた。

僕は少年のズボンをさげて、

「大丈夫だよ、すぐに終わるから。だから泣かないで」

「いやだよ、いやだよ　ママのところにかえりたい」

僕は少年の首をしめていた。

そして、少年は人形のように動かなくなつて、僕のおもちゃにな



つてくれたんだ。

僕は今度は別の公園にきてた。

なぜかって、この前の少年がお友達がほしいうて頼むから、女の子がブランコで遊んでいる。

僕は声をかけた。

「ひとり？ お兄ちゃんと遊ばない？」

それから、僕は女の子の手をひいて家に帰ろうとした時、怖いおじさんが、僕の周りをつとりかこんでいたんだ。

おじさん達は、僕にむかってなにか叫んでいた。

聞き取れたのは、「幼児 逮捕 誘拐 殺人」だったかな。

今、僕は暗い部屋にいる。

でも、もうひとりじゃない。

少年が部屋の中を走りまわっている。

少年が僕に言う。

「お兄ちゃん、もうどこにもいかないで、一人じゃさびしいよ……」

僕は、微笑んで少年にいった。

「大丈夫だよ、もうどこにもいかないよ。もうじきそっちの世界にいけるみたいなんだあ。だから、ずっと一緒だよ……」

## ストーリー

僕は街で偶然みかけたお姉さんに恋をしちゃいました。でも、初心な僕はお姉さんにすぐに告白なんかしません。黙ってバレナイように尾行するのです。

そうしてお姉さんの住んでるところをつきとめるのです。尾行してる時は凄く快感ですよ。

見つかるんじゃないかとドキドキしますからね。

皆さんも機会があれば試すといいですよ。

ドキドキしながら見つけたお姉さんの家は、小綺麗なワンルームマンションでした。

一応生意気にもオートロックなんかも入り口についてたりします。

お姉さんは僕より少し年上でした。

その事実を最近、お姉さんの部屋から出された生ごみを漁って発見した僕は凄く興奮しました。

それと、残念な事にお姉さんには恋人もいるようです。

でも、少し前ぐらいから恋人とはうまくいっていないみたいです。捨ててあった日記帳に事細かく書かれています。

お姉さんは分別が嫌いらしくなんでも一緒にすてくれます。

お姉さんの部屋から出されたゴミは、僕にとってはお宝の山です。

お宝の山には、お姉さんの匂いがいっぱいいついています。

例えば、破れたストッキングとか使い古しの歯ブラシ。

あと化粧を落とすときに使ったと思われるコットン。

赤い口紅なんかがついていて実にいいです。

そんな中でも一番のお宝は、お姉さんの血がついた生理用品です。

それを、大事に袋につめて自宅に持ち帰ります。

えゝ？ 自宅にもって帰ってどうするのって？

きまつてるじゃないですか。

お姉さんの匂いをかぎながら、”ナニをするんですよ”

最高に気持ちいいですよ。

でも、最近では、それだけでは我慢できなくなってきた自分がいたりします。

そして、僕はいまからお姉さんの部屋に侵入することにしました。だって、もっとお姉さんの事知りたいし、

僕の存在をそれとなく知ってもらいたかったからです。

手にはお姉さんの為に買っておいた下着を持って進入開始です。どうやって進入するのかって？

簡単ですよ！

事前に僕はお姉さんの隣の部屋に越してきていますからね。

あとはベランダごしにお姉さんの部屋に侵入するだけですから……

今日は下着のおみやげと一緒に、少々高くつきましたが盗聴器と小型カメラも設置するつもりです。

僕の予定では二時間もあれば、部屋の物色と機器の設置は完了できます。

ここ三ヶ月の監視からお姉さんの行動パターンは熟知してますし、少し時間に余裕を持って行動してるので楽勝です。

そうして僕は易々とお姉さんの部屋に入ることができました。

お姉さんの部屋は女性の部屋らしくキレイに片付けられています。

少し気になったのが、部屋の中がどうも薬品臭いことです。

芳香剤もたくさん置いてあります。

早速、僕はお姉さんのアンティークベッドの上に寝転びます。

僕はとりあえず時間もあることなので、お姉さんの洋服ダンスの棚からカラフルなランジェリーを取り出すと、それを頭からかぶり、お姉さんの匂いをかぎながら一回だけ ”ナニをしました”

あまりに興奮してしまった為、精子が勢いよく飛んでしまい少し

シートを汚してしまいましたでしたが気にせず放置することにします。

その後、散らかしたランジェリーをキレイにたたんで元に戻すと、持ってきた下着のプレゼントを照明つきのベッドフレームの上におきました。

ベッドフレームの横には彼氏とお姉さんが写った写真が飾ってありましたが、何故か？ 彼氏の顔は黒くぬりつぶされていました。

彼氏の顔が拝見できないのは残念ですが、お姉さんと恋人の関係が、ぎくしゃくしてるので嬉しくなりました。

それから、僕は侵入してきた真の目的の盗聴機器とカメラの設置にとりかかり始めました。

両方ともクローゼットの上にある収納ボックスにつけます。

ここからだ、部屋全体が見渡せて、お姉さんのお顔のアングルもばっちり撮れます。

僕は機器を取り付ける為に収納ボックスを開けました。

そうすると、ボックスの中からは布で何重にもグルグル巻きにされたスーツケースがでてきました。僕はとっさに、これはお宝の匂いがプンプンすると思いグルグル巻きにされた布をほどきだしました。布をほどくと、こんどはスーツケースの周りを、紐で簡単にあかないように縛ってあります。

僕はひもを部屋にあったハサミでちょん切りました。ハサミでちょん切ると、スーツケースが勢いよく開きました。開けた途端、部屋の中は物が腐ったような異臭がたちこめました。

スーツケースの中身は、三枚の男性の写真と無残に切り取られた男性器が入っていました。

さすがの僕も度肝を抜かれてしまい、早く逃げないといけないと思いました。

しかし、あろうことが、僕はどうやら腰が抜けてしまい立ち上がることができなくなっていました。

しばらくしてから憧れのお姉さんが帰ってきた。

最初お姉さんは腰を抜かした僕を見て驚いていましたが、すぐに状況をのみこめたらしく、僕を手際よく座椅子にしばらくつけると、ポラロイドカメラで写真を撮ってから、優しくパンツをぬがしました。

そして、萎縮した僕のあれを手でしごいてくれました。

お姉さんは、ビンビンになってしまった僕のあれを満足気に見て、「僕ちゃん、こんなに立派になっていいコレクションになるわ」

と言って、さっき僕が紐を切ったハサミをあれにあてがって

お姉さんはハサミを躊躇することなく……

そして、僕は遠のいていく意識の中で後悔しましたが、もう手遅れのです。

最後にこんな悲惨な目にあった僕からのアドバイスです。

こそこそ女性の部屋に入っではいけません。

なにかあっても誰も助けくれませんから……

## パラダイス

例年よりも幾分も遅れた梅雨明け宣言がされて、三日ほどたったある日。

木下智は、額に心地よい汗を流しながら、日課である散歩を済ませて自宅に戻ってきた。何気に郵便受けを確認したら、中に封書が入ってるのを木下は発見した。

封書の送り主は厚生労働省、年金課となっている。

木下は、また年金減額の通知かと思い、少し腹だたしかったが、生活に関わることもあるので、見ないわけにもいかず、軽くシャワーで汗を流してから、封書の中身を取り出した。封書の中身はA4の便箋が三つ折にされていた。早速、木下は三つ折にされた便箋に書かれている文面に目を通した。

文面にはこう書かれていた。

【厚生労働省から木下智様への重要なお知らせ！】

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、このたびの通知は厚生労働省があなた様の年金受給者番号をランダムに抽選いたしましたところ、

見事、パラダイスに当選されたことをお知らせするものでございます。既にマスコミの報道等でご存知かとは思いますが、パラダイスとは、政府の働きかけによって、我々厚生労働省が以前保有していた保養所を、新たに整備しなおした大型娯楽温泉施設であります。

これは、我々の今までおかしてきた不祥事を反省するものであって一切の料金はかかりません！是非、この機会に御利用していただきたく通知した次第でございます。

詳しい、お問い合わせは下記連絡先までお願いいたします。

それでは、突然の通知失礼いたしました。 敬具。

読み終わった木下は、まずは大きく息をつき一安心した。年金減額の通知では無かったからだ。

その後に、木下は思った。これは、新手の詐欺か何かなのだろうか？ 文面には報道等でご存知かもと書かれていたが、最近、老眼がひどいので新聞など目を通してないのでパラダイスのことは知らない。とにかく、妻にこの事を聞こうと思った木下は、結婚して四十五年になる妻の道子を呼んだ。

「おい、道子ちょっとこっちきてくれ」

妻は耳が遠くて聞こえないのか、なかなか来てくれない。

「おい、おい」

「なんですか？ そんな大声だして！」

道子は大声で呼ばれたので、少し不機嫌そうに現れた。

「ああ、お前聞こえてたのか？ まあいい、とにかく、これを見てくれ」

木下はさきほど読んだA4の紙を道子に渡した。道子は老眼鏡をかけると、文面を読んだ。

「あなた、よかったじゃない。パラダイスにいけるのよ！」

道子はパラダイスの事を知ってるような口調で言った。

「おまえ、パラダイスって知ってるのか？」

「ええ、知ってますよ。毎日、テレビのニュースで言ってるじゃないのよ！ あなた、もうちょっと世間の動きに敏感になった方がよろしくてよ。パラダイスってのは、最近政権を取った民主党が国民投票で決めた案じゃないのよ。あなた、そういえば国民投票にもいってなかったわね、そういうことしたら、どんどん勝手な法案とか決まってしまうって取り返しのつかないことになってもしらないわよ」

木下は、どうも女房つてのは歳をとる度に小言がふえると思ってイライラした。

「それで、あなた、勿論パラダイスにはいくのでしょうか？」

「ただなら、行ってもいいかな」

「じゃ、行くのね！ それじゃ、あなたに任せたら不安なので、私がパラダイスに行く手続きしときますね」

「ああ、頼むよ！ 俺は面倒なことが嫌いだからな」

木下は、そう言うのと豪快に笑った。

道子は早速、文面に書かれていた連絡先に電話した。木下は目も悪かったが耳も少々聞こえづらくなってきたので道子が連絡先の事務員と何を話しているのか、あまり理解できなかった。

「あなた、パラダイスに行くのは、今週末でいいかしら？」

「ああ、俺はいつでもいいよ。どうせ暇だから」

そうして、二十分ほど経った頃、電話での手続きを終えた道子が木下の横に座った。

「あなた、今週の土曜日にパラダイスに行きますしね。朝九時に年金課の方が迎えにきてくれますのよ」

「へえ、ずいぶんと年金課もサービスがよくなったのだな！ 民民党さま様だな」

木下は久々に温泉に行けるのでご機嫌でそう言った。

そして、パラダイスに行く週末になった。

朝九時少し前に、呼び鈴がなって年金課の者が木下達、夫婦を迎えに訪れた。

その日は快晴で初夏の日差しを浴びて、迎えにきた高級乗用車のボンネットがキラキラ光っている。

木下の心も快晴の天気のように晴れやかで、年甲斐もなくウキウキして、旅行かばん片手に車に乗り込む。

木下達、夫婦が乗り込んだ車は、ほどなくして、パラダイスに向かって出発した。

車中で、木下は道子にパラダイスのことを聞いた。

「パラダイスってのは、遠いのか？」

「あなた、何度も同じこと聞かないでくれる。行く前に何回も話したじゃないのよ！ あなた、まさか……」



呆けてきてるのじゃないでしょうね！」

道子は冗談とも本気ともとれるいい方をしたので、木下は少しムツとした。

道子の話によると、パラダイスは全国に三十ヶ所ほどあって、今からいくところは、K県の山合いにあるのだそうだ。車でだいたい二時間といったところと言う話だった。木下は昨日、旅行に行く興奮の為、寝つきがわるかったので、道子にパラダイスに近づいたら起こしてくれと言って、少し睡眠をとることにした。

木下はどれくらい寝たかわからないが、道子に肩をゆすられて目覚めた。

車はどうやら山間部を走っているみたいで、木下が目覚めてから、ずっと、勾配のきついカーブ道を登っている。木下は酔わないように、ひたすら窓から外の景色を見ていた。

すると、道子が木下にパラダイスが見えたといって山の頂上付近を指差した。

木下は道子が指差した方向を見てみると、山の頂上付近に立派な建物が見えた。

さすが大型娯楽施設らしく、遠くからみても、大きくて立派に見える。温泉施設だけあって、建物についてる煙突からは、濛々と煙が上がってるのも確認できた。それから、三十分ほどして車はパラダイスと呼ばれる温泉施設に到着した。

年金課の役人はお疲れ様でしたと言って、深々と頭を下げると再び車を走らせて帰っていった。

木下夫婦はパラダイスの中に入って、フロントで宿泊の手続きを行った。

パラダイスの中は、流石、元厚生労働省の保養所だけあって、税金を湯水のように使った為か、贅の限りを尽くした素晴らしいものである。床は恐らく大理石であろう、中央には噴水が設置されていて実に涼しげだ。

噴水の周りには大型のソファが設置されていて、先客の御老人達がくつろいでいる。天井を見てみると、大きなシャンデリアがいくつも設置されており、まるで宝石箱をひっくり返したようである。しかし、木下が一番驚いたのは、カジノ施設であった。以前若かりし頃にラスベガスにいったことがある木下だったが、それにひけを取らぬ立派なものであった。道子の話によると、民主党が最近、強引にパラダイスにだけカジノ運営権を与えたのだそう。木下自身ギャンブルが大好きだったので、大歓迎である。木下は後でおちついたら、ゆっくり遊びにこようと思った。ちょうど、フロントでカジノで使用するコインを千枚無料くれたので、木下はご機嫌なのである。木下は施設をまだ満喫する前に、まさにこの世のパラダイスだと興奮した。

木下夫婦は一通り、パラダイスの従業員に施設内の説明をしてもらった後、客室に案内された。従業員の話によると、パラダイスには三千もの客室があるのだそう。従業員は部屋のカードキーを木下に手渡すと、

「施設内、広いので迷子にならないくださいね」と言っ  
て、愛想笑いをうかべてフロントに戻っていった。

部屋の方は、ホテル調の施設に関わらず、老人にくつろぎやすいように和室である。また部屋のつくりも、おちつけるように配慮されていて、バリアフリーは勿論のこと、いかにも高そうな調度品があちこちに飾られていて素晴らしかった。

木下夫婦は立派な木目調の檜作りのテーブルの周りに座ると、足をのばしてくつろいだ。くつろいでいると、部屋がノックされて女中が部屋に入ってきた。

「失礼いたします。間もなくお食事持ってまいりますので」

女中は、人あたりのよさそうな笑顔でそう言うとお茶を入れてくれた。

「お客様、明日の特別入浴はどちらの方で用意いたしましょうか？」  
女中はそう言っ  
て、木下夫婦の顔を見た。

木下が特別入浴ってなんだ？ と女中に聞こうとしたところ、道子が主人でお願いしますと言っていた。

「かしこまりました。御主人様でございますね！ では、そうにご用意させていただきますね。それと、

入浴時間でございますが、明日の午前十時でお願いいたします、なにぶん、混みますので申し訳ございません」

女中は手を丁寧について頭をさげた。

「それでは、失礼いたします」

女中はまた、頭を下げると部屋をあとにしていった。

「ずいぶんと丁寧じゃないか！」

木下は女中の態度に感服して道子に言った。

「そうですね」

道子はまんざらでもない表情をしていた。

女中が出ていくと木下夫婦は浴衣に着替えて食事を待った。

しばらくしてから、豪勢な食事が運ばれてきた。食事は懷石料理で味の方は申し分なかった。食事後、木下は温泉に入りにいき、そのあと、朝になるまでカジノを満喫した。

部屋に戻ると、道子は起きていて、神妙な顔をして木下に言った。  
「あなた、もうすぐ特別入浴ね。今までいろいろあつたけど、お世話になりました」

「はあ？ 道子、お前寝ぼけてるのか」

木下は道子の言ってる事がよくわからなかった。

「ところで、昨日、聞こうと思っていたのだが、特別入浴ってなんだ？」

「私も、実は……よくわからないのよ！ とにかく気持ちいい、温泉みたいなのよ」

道子は今にも泣きそうな声で言った。

「なんで、お前泣きそうになってるんだ！」

「なんでもないわあ、ただ……あなたと久々に旅行にこられて、少

し考えぶかげになつてただけよ」

「そつかあ、おかしな奴だな、ところで、今何時だ？」

「九時三十分よ」

「そつかあ、じゃ、そろそろ、その特別入浴つてのを体験してくるかなあ」

木下は、浴衣姿のまま、タオル片手に部屋をでていった。

部屋を出た木下だったが、よく考えたら特別入浴する場所つてどこだ？　と思つた。昨日から、ぶらぶら施設内を歩きまわつたが、特別入浴室つてみかけなかったからだ。道子に聞こうと思つて部屋に戻りかけた時、

食事を運んでくれた女中に出くわした。

「すいませーん。特別入浴室つてどこですか？」

「特別入浴室は本館にはございませんの。フロントからまっすぐ歩いていただければ、別館に行く通路がございますので、そちらをお通りになつてくださいませ」

「あい、わかつた。ありがとうございます」

木下は、そのとき始めて、自分のいたところが本館である事を知つた。なるほど、別館つてあるんだ！　どうりで特別入浴室つての見かけないわけだと、一人納得した。

木下は、鼻歌をくちずさみながらエレベータに乗つて、フロントまで行くと、別館目指して歩いていった。

通路には同じく、特別入浴室目指して歩いているお仲間がたくさんいたので、迷う心配なく、特別入浴室まで行く事が出来た。特別入浴室の入り口にはゲートが設けられていて係員が男女を振り分けて中に誘導していた。しかし、木下は少し気になることがあった。昨日までと違って、ゲートに吸い込まれている老人達の顔が暗いのだ。カジノとかにいた老人達はみんな笑顔だったのに、ここにいる老人達はほとんど、青い顔して神妙な表情なのだ。中には泣いている老人や何故だかわからないが、温泉に入るのに珠々を握りしめてるも

のもいた。

そして、木下もゲートを通って男風呂に係員によって誘導された。ゲート内の男風呂の着替える部屋にも係員が居て、裸になった老人達を三列に並ばせていた。木下も裸になると列に加わった。隣に並んでる老人は泣いている。木下は思い切って隣で泣いてる老人に聞いてみた。

「あの………すいません。どうして、さっきから泣いておられるのですか？」

泣いてる老人は木下の方を見ると、怖い目で睨んで言った。

「なんで、泣いてるかって？ 悲しいにきまつてるじゃないか！

今から私たちは国によって合法的に処刑されるんだぞ！」

「え！？ 処刑って？」

「あんたも、先月行われた国民投票したんだろう。そこで民主党の案が成立したじゃないか！ それに、案が決まってからマスコミでも大々的に取り上げられていただろう」

木下は老人が言ってる事の意味が全くわからなかった。

「す………すいません。私、バカなもので、おたくさんの言ってる事が理解できんですわ、それに、先月の国民投票にも行っていないですよ！ テレビとか新聞も最近見ていないものにして」

「ホントに知らないのかい？ あなた独り身なのかい？」

「いえいえ、ここに来たのは妻と一緒にきたのですけど………」

「それだったら、奥さんから説明があっただろう。それにこの部屋に来てるって事は同意書にも判子押してるだろうし、通知とかもきたでしょう」

「いえ………妻からは、ただ気持ちが悪くなる温泉だとだけ………通知はきましたけど、パラダイスってなっていたし、恥ずかしながら、同意書とかは全く知らないです」

「そっか。あんた、ほんとに何も知らないようだね！ 冥土の土産に教えてあげるよ」

老人は、木下に丁寧に説明してくれた。老人の話によると、わが国の年金は破綻をむかえてしまつて、この国の財政ではとても、老人を養えなくなつてしまつた。しかし、医療技術の発展によつて老人はなかなか死なない。若者はこの国の将来を悲観して結婚もしないし、結婚している家庭でも子供を作らない、超少子化をむかえている。世界人口は発展途上国の多産化問題を解決できず、莫大的に人口が増えてしまい、深刻な食料問題を抱えてしまつている。そこで、地球の将来を考えて、世界中の首脳が集まつて、人類抑制計画が発案された。そして、国土のわりに人口が多い、この国が槍玉にあげられたのだ。どんな手段を使つてでも、この国の人口の2割を削減しろと他国から言われた。もし、実現できない時は世界中から制裁措置をとられて、エネルギーは勿論のこと、食料の輸入もストップすると脅されたのだ。そこで、政府は考えたのが、パラダイス計画だつた。

パラダイス計画とは、七十歳以上の老齢世帯のみが対象で、夫婦の場合どちらか一方が、人口抑制の対象になるというものである。仮に協力を反対した場合、その時は夫婦そのものが対象になる。ただし、積極的に協力したときは、遺族年金が支給されるというものであつた。色々な議論が出たが、抑制措置をとるかどうかを決めるべき、先月国民投票が行われたのだつた。結果、パラダイス計画案が可決された次第であつた。

木下は、老人の話を聞いてようやく自分の現在おかれている状況を把握する事ができた。

突然、木下の目からも大粒の涙がこぼれてきた。そして、なぜだか、木下は隣の老人に親近感が沸いてきて気がつく、手を握つていた。

「それで、これから、私たちはどうなつてしまうのですか？」

「うん。政府の話では、苦しまないように安楽死させてくれるらしい。米軍が最近開発したガスを使うそうですよ。その後は、すぐに

焼却されるだろうね！ あんたも見なかったかい？ ここに来る前に、施設の煙突からモクモクと煙があがっていたのを……」

「はい、見ました。私はバカなものですから、てっきり温泉の湯気だとばかり思っていました」

「そうですね、何も知らなかったのですから、仕方ないですよ」

そう言って、老人は木下の手を強く握ってくれた。

係員がマイクを取り出して話し出した。

「え…… 大変遺憾では、ありますが…… あなたたちは、お国のために、ただいまから、名誉ある死を選ばれます。ただ犬死ではないことだけ、ご理解ください。あなたたちの名誉ある死によってこの国は救われるのですから」

それから、木下達、老人は恐らくガス室であろう大部屋の中に順番に並ばされて入れられた。

部屋の中は白い壁が一面に張ってあって、壁の隙間からは、まるで昆虫の空気入れのような無数の穴があいていた。ここから、ガスが飛び出すのは明白だった。そして、全員が部屋に入ったのを確認してから、入り口のドアが閉められた。

木下は実に怖かった。怖くて、怖くて仕方なかった。

そして…… 低いブザー音の後、天井の照明が消えた。老人達は一斉に悲鳴をあげた。悲鳴をかき消すかのように、プシューというガスの噴出音が部屋全体にこだました。

「あなた、あなたってば！ ひどい汗よ！ いったいそんなにウナサレテどうなさったの？」

木下智は妻の道子に起こされて目を覚ました。

「あなた、凄い汗よ！ どうなさったのよ」

「ああ、凄い怖い夢を見てたんだよ！」

「よかった、あまりにウナサレていたので、どこか体でも調子悪いのかと思ったわよ」

「ああ、心配かけてごめんよ！　ところで今日って何月何日？」

「えっと、今日は八月三十日の日曜日よ！」

「そっかあ、道子、悪いのだけど、今から出かける支度してくれるかい」

「え、まだ朝の七時よ、いたいこんなに朝早くどこ行くのよ？」

「うん。今日ほら、衆院選挙の日だろう。俺達も清き一票入れにしようよ！」

「あら、珍しい！　選挙にいったことなんて無いあなたがいったいどうして？」

「うん、俺達や俺達の子供の未来の為だよ！」

そして、その後、二人が投票しに行ったことはいうまでもない。  
了。



## 大凶日

今日の俺はすこぶるご機嫌であつた。

今日は12月31日、世間でいうところの大晦日。

俺がご機嫌なワケは年末に届いた左ハンドルの新車スポーツカーに乗って、街を疾走しているからだ。

そして、俺の右の助手席には可愛らしい彼女が乗っている。彼女といつても、さっき街でナンパしたところで、このメス豚の素性はほとんど知らない。まあ、所詮、俺にとって女なんてものは、一夜限りの性欲を満足させるだけの道具にしかすぎない。今現在、助手席に乗ってる女にしたって、クソ寒い晦日の夜にミニスカートを穿いて自分の好みにあつた男を物色してたに違いない。その証拠に俺様のルックスに釣られてホイホイついてきた尻軽女であつて真剣に付き合う気持ちなんてさらさら無いわけなんだが……とにかく、早く、このメスと合体でもして輝かしい新年でも迎いたいものだ。

「ねえ、あんたあ、名前なんていうの？」

「真治だよ」

「へえ、なんかあ、かつこいい名前だよね」

「どこにでもある、ありきたりな名前だよ」

俺が素っ気無く言うのと、「クール」だと言つてはしゃいでやる。

「ったく……メス豚め！」

「真治君って歳いくつなの？」

「19だよ。ところで、そっちは名前なんていうの、それと歳は？」

「え、あたしは麻紀つての、歳は16」

あんがい、この女若いなあ、こいつとハメタラ淫行になるんじゃないのかな？ でも、いいやあ。たとえこいつが14だとしても俺は間違いなくハメルだろうしな！

「でも、真治君ってなんでえ？　こんな凄い車に乗ってんの？

金持ちい！」

「これかあ、親父にキャツシュで買ってもらったんだよ！　俺の親父は整形外科医で患者からぼったくってんだよ」

「へえ、すごい。じゃあ、将来あと継いだりとかするんだあ」

「まあなあー、いちおう一人息子だし　今親父は高い金払って、私大に入れてくれてるしな」

「じゃあ、将来医者になるんだあ」

ああ、うざい女だなあ。俺が将来医者になるうが、お前には関係ないんだよ！　一発はめたら山にでも捨ててやること確定だな！　俺には性癖っていうのだろうか、必ずといっていいほどナンパして一夜を共にした女とは後腐れを無くすために人気のない峠道なんかに連れていき置き去りにしてくる。あの、バックミラーに写る女の啞然とした顔が俺のマインドを抜群にくすぐってくれるからだ。

「真治君、今からあ、どこ遊びにいくう？」

「ホテルいかない？」

「……っていきなしじゃん」

「俺あれなんだよね、下心隠して　邪魔臭いじゃん。で返事は？　……行ってももいいよ。でもホテル行ったら　彼女にしてくれる」

どうして、女って奴は……邪魔くさいなあ。

「俺でいいのだったら、彼女にしてやるよ。麻紀そこそこカワイイしい」

「そこそこって失礼ねえ」

「じゃ、ホテルに向かうよ」

しめしめ、あんがい簡単だったな。

「あ、でも、ちよつと待ってえ。ホテルに行く前に、ちよつと寄ってほしとあるんだけど……」

ああ、邪魔くせえ。

「どこ寄ってほしいんよ」

「うん、この近くに縁結びの神社あるのよ。でね、初詣かねて一緒に行こうよ。さっき日付もかわったことだし　あけましておめでとう！　今年もよろしくね！　真治くん」

「あけおめえ」

初詣つてえ、ほんと、この女うざいわぁ。もう、すっかり俺の彼女気分かぁ？　何が縁結びの神社だとお！　エッチしたらすぐにも縁きつてやるよ。それと、今年もよろしくだとお！　やることやったら、お前は山にすてられるんだよ。でも、あれだな　無下に断つて、「あたし、帰る。車からおろしてえ」なんてことになったら、また一からやり直しだし、邪魔臭いけど初詣にでもいくか。

「初詣か、いいなあ、行こう、行こう」

俺は麻紀の行きたい縁結びの神社とやらに向かう為、交差点でハンドルをきって今来た道をUターンした。

車のスピードがいささか出ていた為、「キキイ」とタイヤが少し悲鳴をあげた。

「真治君、かつこいい」隣でバカ女が騒いでいる。

ほどなくして目的の神社に到着した。境内に隣接している臨時駐車場に車を止める。俺のスポーツカーがあまりにかつこいいのか車から降りると、駐車場にいる参拝客の視線が俺と車に注がれていた。場内にいる参拝客は、さすがに縁結びの神社だけあって、若いカップルで満ち溢れている。貧乏カップル達の視線もあるので、俺は麻紀の助手席側のドアにまわり、ドアを開けてやり、麻紀の手をとって車からおろしてやった。俺にエスコートされた麻紀はまんざらでもない顔をして「ありがとう」と微笑んだ。

しかし、この女やたらに　手が冷たい。

麻紀と手をつなぎながら、人ごみの中、鳥居をくぐる。境内の本殿にむかう道の両脇には露天が立ち並び、美味しそうな匂いがたちこめていた。ゆっくりと人ごみの中、本殿目指して進む。狛犬を通りすぎると、前方に賽銭箱が見えた。俺は人ごみが大嫌いなので、

さつさと参拝でもして、早くホテルにでも行きたい心境でいっぱいである。

俺は賽銭箱の前に立つと、財布を取り出し、財布の中にはいつてる諭吉の束から一枚とりだすと、賽銭箱に諭吉を投げ入れた。隣で麻紀のことをイヤラシイ目で見ていたおっさんからため息がもれていた。

俺はおっさんに軽くメンチをきると。おっさんは目をそらした。

麻紀は信心深い女なのだろうか？　ぶつぶつと口を動かして、しばしの間、願いごとをしているようだった。俺も諭吉分ぐらい願いごとをしても罰があたらないだろう。どうかあ、神様　麻紀が名器で気持ちいいセックスが出来ますようにと……願いごとをした。

参拝を終えた俺達は来た道を引き返す。

「麻紀、さつき何い、お願いしてたの？」

まあ、俺にとってこの女がどんな願いごとをしようと知った事ではないが、いちおう恋人同士を装う為の演出といったところであろうか。そのほうがこの女も喜ぶってもんだ。

「……恥ずかしいよあ……内緒よ」

「意地悪しないで教えてくれよ！　ま・き・ちゃん」

「……うーん。真治君とずっと一緒にいれますようにってね」

何だよあ、こいつ重たい女だなあ。

「そっかあ、麻紀ってカワイイなあ」

自分で言って反吐がでそうだぜ！

「ねえねえ、真治君。せっかく来たのだから、おみくじでもしようよ！　運試し　しよう、しよう」

何が運試しだとお、俺は生まれてからずっと幸運に恵まれている。そころな庶民と一緒にするなって！

「おう、いいよ。おみくじなんかするの何年ぶりかな？　俺はひき強いから、しても、どうせ大吉だろうけど……」

俺達は境内にある御籤所にいき、二人分の金を巫女さんに払うと、角柱で筒状の御籤箱を軽く振った。中からは棒状の木の棒が飛び出してきた。木の棒の真ん中部分には数字で7番が書かれている。麻紀も続けて箱を振る。麻紀の番号は3番であった。巫女さんに出てきた番号をつけると紙の籤が渡された。

「うわぁ、やったぁ。麻紀大吉よ！ 真治君は？」

俺の籤には大凶と書かれていた。俺はすぐにその場で籤を破りすてた。くそぉ、もう一回ひいてやる。

巫女さんに金を渡すと、もう一度御籤箱を振る。またしても7番くそぉ、もう一回、もう一回。何度ひいても、出てくる数字は7番であった。

「おい、この箱壊れているぞ！」俺は巫女に文句を言った。

巫女さんは、困った顔をして　ただ、紙の籤を俺に渡すだけだった。

俺はおみくじをこれ以上ひくことを諦めて、籤に書かれている運勢説明に目を通した。

籤には、健康、金運、恋愛、生活に関することが書かれていた。

健康は大病に注意、金運は無駄な出費が増える、おとしものは見つからず、流石大凶だけあって、いいことなんか一つも書かれていない。ただ一つ、良いか悪いかは別にして、待ち人は現れると、肯定的なものが書かれていた。

「真治君、何怒ってるのよ。こんなの良いことだけ信じたらいいのよ！」

横から俺の籤の結果を覗き見たこの女。俺をなぐさめてるつもりなのか？　ったく……胸くそ悪い奴だ！

「別にいい、怒ってなんかいらないよ　ただ、ちょっとショックだったかな」

「悪い籤は木に結びましょうよ。それで厄払いになるわよ」

俺は、麻紀の目の前で籤を破り捨ててやった。

「そんなの時間の無駄だよ！　さぁ車に戻って楽しいことしようよ」

「……うん」

俺達は駐車場に戻った。車のエンジンをかける。スポーツカー特有の低い音が場内に鳴り響く。若いカップルが車を指差してうらやましそうな視線を投げかけていた。すっかり参拜で体が冷えてしまったのでエアコンの温度を最大限にあげた。ほどなくして、温風が車内に充満する。

さてと、どこのホテルでもいこうかなあ？　ちょっと遠いけど、ナニが終わったあと、麻紀を捨てやすいように県境のホテルでもいいかな。あそこは設備もけっこう充実してるし、楽しめること請け合いだからな。

俺は県境のホテルに向かって車を走らせる。時間短縮の為に一般道はやめて、バイパスを使う事にした。

車はETCの料金所ゲートを抜けて、高速道に入った。ラッキーなことに高速道は他の車は全く走っていない。まさに私用高速道路状態だった。時刻は午前2時なので他の車が走っていないのも当たり前か。このぶんでいけば。ホテルまではこの車の性能を考えると2、30分でついてしまっただろう。無論、かなりのスピードを超過することになるのだが……

俺は道路状況を見て安心したのか、ホテルにつくまでの間、麻紀の体を触りまわすことにした。まずは車を二車線ある低速レーンのほうによせた。車の速度をおさえつつ、右手で麻紀のミニスカートからでている太ももに手をやった。

「ああーん、真治くんダメだってえ」麻紀は色っぽい声をあげた。

さらに、俺の右手は太ももの上部をまさぐる。パンティーの上から麻紀の敏感な部分を愛撫する。

「感じちゃうよお」

指先が麻紀の敏感な部分を縦筋を入れるように上下にこする。少し車内に女性のフェロモンの匂いが漂い出す。

「アーンウ、ダメエ、真治クウーン。麻紀濡れてきたよ。アーン、アーン」

さらに俺の右手は麻紀の性器を直に触れたいという衝動にかられて、パンティーの間に手をいれたがる。

恐らく、もう麻紀の 薄い生地の下は、ビショビショに濡れているのだろう。早くその事を確かめたい！

そして、いよいよ麻紀の薄い生地の下に手を入れかけた、正にその時……

後方から眩しいヘッドライトの光と共に、激しいクラクションの音が耳を劈く。バックミラーで後方を確認すると、大型トラックが俺の愛車にべた付けでせまっていた。さらに、退けといわんばかりにヘッドライトで激しくパッシングしてくる。定期的にけたたましいクラクションをならしつつ、後方バンパーにぶつけるぐらいの勢いでデカイ車体をひつつけてくる。

くそあ、せつかくいいところだったのに、邪魔しやがってえ！

それに、このトラックの運ちゃん、抜きたいのだったら高速レーンに行けよ！ 単なる嫌がらせじゃないか！

「ブウブウウー」さらに激しくクラクションをならしてくるトラック。悪意を感じる。

仕方がないなあ、どいてやるよ。俺は右にウィンカーをだすと、仕方なく高速レーンに車をスライドさせた。トラックはクラクションの残響を残しつつ、隣のレーンで俺の車を抜かしていった。

やれやれ、災難だったなあと思った時、またしても、後方から眩しいヘッドライトの光が車内を包む。

そして、耳を劈くクラクションの音。クソオー、さっきのトラックの仲間かあ？ 俺はバックミラーでもう一台のトラックを確認した。

「真治くん、前、前見てえ」麻紀が隣で叫んだ。

前方にすぐさま目をやると、さきほど抜かしていったトラックの

テールランプがせまっていた。

どうやら、俺の車はトラックに前後はさまれたようだった。しかも、まぎれもない悪意をもったドライバーが運転しているトラックにはさまれたのだ！ クソオー、厄介だなあ、こいつら……

後方のトラックは相変わらずハイビームで俺の車をあおってくる。

その時、前方の車から、俺の車にむかって物がなげつけられた。

「バカアーン」もの凄い音がして、その物体は車の前部バンパーにぶつかっていた。お、俺の新車に傷がいった瞬間であった。それ以前に車の速度は100キロ以上でいて、バンパーに当たったものがフロントガラスだったらと思うとゾツとした。

またしても、前方の車から物が投げられた。今度は黄色い物体であった。ベチャットした音がして、その黄色い物体はフロントガラスにへばりついた。よく見ると、その黄色い物体はバナナの皮である。

ううう、これは、ゲームじゃないぞ、マリオカートじゃないんだぞ！ ったく……ふざけやがって！

しかし、今のが固形物だったら、フロントガラスは粉々に割れていただろう。ううう、このままだったら事故ってしまう。こうなったら、隣のレーンにもう一度戻ってみよう。俺は再び低速レーンに車を移動した。

それを見て前後のトラックも車を低速レーンに移動してきた。そして、またもや前のトラックは物をほって来た。「バカアーン、ガシャーンガシャーン」今、投げられたものはビールの空き缶なのだろうか？ 今度はタイヤが物を踏みつけたみたいだった。俺は物凄い恐怖を感じていた。

ダメだ、このままでは、本当にヤラレテしまう。

どうしよう、どうしよう、どうしたらいいのだよ？ よしこうなったら、思い切って右レーンに出てから、一気に加速して抜ききってしまおう。よし、それしかない。俺はアクセルを踏む力を強めた。タコメーターと俺の心臓が跳ね上がる。すぐさま、加速をつけた俺



の車は右レーンに飛び出す。後は直線を一気に加速して、悪意のあるトラックを抜ききるだけだ。その時だった。俺の右手に物凄い冷たい感触が走った。そして、いままで体験したことのない悪寒がする。エアコンは切れてはいない。冷たい手の感触をとっさに俺は見ただ。

そこには、麻紀の手が俺の手首を掴んでいた。しかしその手は半分腐っていて、骨がむき出しにでている。

うわああ、なんだあこの手は……俺は麻紀の顔を見た。麻紀の顔は半分、白骨化していて青白い光が包みこんでいる。

「フフウフ、フフフウ」半分、白骨化している口元が緩んで笑っている。

「真治君、私の事覚えてないでしょう。フフフウ」

「お前いつたい何者だ？ お前みたいな化け物じゃないよ！」

「酷い、酷いよお、真治君 わたしのこと。カワイイって、愛してるっていつてくれたじゃない」

「し、知らないよお」

「だったら、教えてあげるわよ！ 私は3カ月ほど前、あなたに首をしめられて、殺されて 山に捨てられた……」

そういえば、そんな事があつた気もするが……どうにも思い出せない。頭が割れるように痛い。

「悪かった、悪かったよ。だから助けてくれよ！ 頭が痛いんだよ」

「ダメよ、真治君、あなたはこのまま……」

俺の足は自分意思とは別にアクセルを踏み込む。ハンドルを持つ手はピクリとも動かなかった。ドンドン車は速度をあげる。スピードメーターを見ると180キロで針は止まったままであった。前方には急カーブありの標識が目に入った。そして、ガードレールが目前にせまってくる。

「フフフ、フフフ死ねばいいのよ、死ねばね！ 真治くん」

俺の体は物凄い衝撃をうけた。そして意識が飛んでいった。

どれくらい意識を失っていたのだろうか？ 目を覚ました俺はなぜか薄暗い部屋に立っている。

目の前のベッドには両親が泣き崩れていた。ベッドの上には、ところどころクロこげになっている肉塊が置かれている。上半身から頭部にかけてはぐちゃぐちゃに潰れていて男女の区別もつかないひどい有り様。

その肉塊に向かって両親は語りかけていた。

「真治よ、何でこんなことになったの？ あなたあ、初詣に行ったのね。しかも大吉じゃないのよ！ なのに何故、何故事故なんかあ起こしていなくなっちゃうのよ！」

ち、違うよ母さん。俺が引いた御神籤は大吉だったんだよ！

母さんが見ている御神籤は麻紀のものだって……と、言ったところで、俺の声は届くでもなく……

御神籤に書かれていた、待ち人きたるっただけが思いだされる。俺の左側には待ち人の麻紀がしっかりと手をにぎっていた。

了。

## ひき逃げ

私は深夜の国道を自宅に向かって一人車を走らせていた。

車中は八月上旬ということもあって外気の熱気が車内にこもってしまってる為、体に纏わり付く蒸し暑さで不快である。さきほどから、車のエアコンを全開にしているが車が古い為か、それともエアコンの冷却用触媒が弱っているのか、わからないが全然冷えないでいた。エアコンの外気温を見みると28度をさしていたので、どうりで暑いはずだと私は思った。

深夜の国道は、ときおり長距離トラックが行き交うぐらいで、車の往来が少なく実に物寂しい。

私はこのような物寂しい時間に帰宅しなければならぬ自分の境遇を呪ってみたが、お盆休み前に片付けないといけない仕事如山積みだったので、ある程度いたしかたないかと一人自分をなぐさめてみたりしていた。

私の仕事場と自宅までは車で一時間ほどの距離があった。自宅は今走ってる国道沿いのマンションなのだが、仕事場が隣町なので途中、山越えをしないといけない。

私は少しでも早く、自宅に帰って睡眠をとりたかったのでアクセルを踏みこむ。

車の速度が上がったためか、さきほどよりもエアコンの効きがよくなった感じがして、額の汗がひきだしてきていた。車内が快適になってきたので私はさっきまで暑さでイライラしていた気分も落ち着き、気分が高揚してきた感もあったので更にアクセルを踏み込んだ。

車窓の風景もさきほどまでは、ちらほら民家が点在していた町並みだったが、今は峠にさしかかる手前なので木々が生い茂る山道に

変わりつつあった。そして、いよいよ峠道に入ろうかという時に、前方に見える点滅信号機が赤に変わった。私は少し考え事をしていたので、信号が変わったのに気づくのが遅れて慌ててブレーキを踏んだ。タイヤが「キキイ」っとすべる音がしたが、なんとか止まることができた。

私の肝を冷やさすきつかけを作ってくれた信号機は、この先が道路舗装の工事をしていて片道通行になつてゐる為、臨時に設けられたものだった。信号機の横には大きな看板がたてかけられており、私の目に留まった。

【七月二十六日午後四時二十分頃、下校途中の自転車に乗った少年のひき逃げ死亡事故あり、事故を目撃された方は下記連絡先または、最寄警察署まで御連絡お願いします】

私はこの情報提供を呼びかける看板の”死亡ひき逃げ”という文面に過去の自分を思い出してしまった。

私には、誰にも言えない秘密があった。それは、今から六年前の出来事なのだが……

その出来事とは、今日のように蒸し暑い夜に、私は新車のスポーツカーを買った喜びのあまり、夜の街をレーサー気分でドライブしていた。若かったせいもあって、かなり無茶な運転とスピードを出して車を走らせていた。二時間ぐらいドライブを楽しんでそろそろ帰ろうかと思った時、その出来事がおこった。

私は交差点に猛スピードで進入していた。信号は赤だったが深夜なので誰も通行しないだろうと思って交差点に赤のまま突っ込んでいった。

すると、私の目の前には老婆がよろよろと横断歩道を渡つてゐる姿が目についた。

私はびっくりして思いつきブレーキを踏んだが、スピードを出しすぎていた為、間に合うわけもなく、老婆を轢いてしまったのだ。車は老婆を轢いた状態で路肩のガードレールにぶつかり止った。

私は慌てて車の外に出て老婆の様子を確認しに行った。

老婆の状態を確認した私は、あまりにも酷い老婆の状態に愕然とした。

老婆の恐らく白髪だったであろう髪は真っ赤に染まっていて、顔を強く打ったのか左目の眼球が飛び出している。老婆の左腕は肩下から無残にもちぎれていて、ちぎれたところから血が噴水のように出ていた。

両足は複雑骨折していて、左足のかかとかから骨が飛び出していた。私は老婆の酷い惨状を目の当たりにして、即死だろうと思っていたら、

老婆が、か細い声で助けを求めている。

「おにい…さん、タ・スケてください」

私はその言葉を聞いてあたりを見渡した。周りには誰もいない。

「はや…く、救急…車を…」

私は老婆の助けを無視して車に戻った。

私は震える手で、エンジンキーをまわした。

幸いなことにエンジンはスポーツカー特有の低い音をたてて私に早くこの場を立ち去れとばかりに、

「ブォーン、ブォーン」と鳴っていた。

そして私は老婆を見捨てて逃げた。

翌日の朝刊とテレビのニュースで老婆が亡くなったことを私は知った。

事故車のスポーツカーは、会社近くの道路に放置した。

もちろん、足がつかないように、車内に消火器をまいてから、ナンバープレートと車体製造番号を取り外すと、買って間もない愛車とお別れした。

過去の出来事を思い出し終わった時に信号が青に変わった。

私は嫌な事を思いださせた看板を恨めしく思いながら、再び車を走らせた。

車が舗装工事の道を出たところで、突然、大粒の雨が降り出してきた。

大粒の雨はワイパーぐらいでは処理できないぐらい激しく車に降りつけていて、前方の視界を遮る勢いだった。私は車の速度をおとさないと事故ってしまう危険を感じたのでブレーキに足をかけた。その時である、一瞬、前方に自転車に乗ってる少年の姿を見たのだ。「ガシャン」と音をたてて車に、衝撃がはしった。

私が「しまった」と思った時にはもう遅く、どうやら自転車に乗った少年を撥ねてしまったようだ。

私は傘もささずに、すぐに車外に飛び出して少年の姿を探した。少年の姿はどこにも見当たらなかった。しかし、車の下にはぐちゃぐしゃにひしゃげた自転車はある。

一体どうゆうことなんだ？ 私は大粒の雨にうたれながらその場に立ちつくし考えた。

でも、よくよく考えると、こんな深夜に少年が一人で大雨の中、自転車に乗ってる事などありえないのだ。そして、私は自分なりの結論をだした。自転車に乗った少年は、私が疲れていた為見た錯覚であって、車の下にある自転車は誰かの悪質なイタズラで元々道路に放置してあったのだろうと……

イタズラにしては全くとってして「ひどい」と私は思って車に戻った。

私は、エンジンをかけて、再び車を走らせた。

車内はついさっきまでと違ってひんやりしていた。いや、ひんやりと表現するよりは寒いのだ。

そして、得体の知れない寒気に襲われた私は、何気に助手席に目をやると、助手席には、私の顔を凝視してニヤニヤ笑ってる少年の姿があった。

私は思わず「うわあ」と声を上げていた。

私はブレーキを踏んで車を止めた。

少年は野球帽を被っていて年の頃は十二、十三歳だろう。帽子の

ひさしごしから見える顔色は青白い。

口からは血が出ていたが、気にせずに、相変わらず私の顔を見てはニヤニヤしている。

「おい、お前！ いつ？ この車に乗ったんだ、お前はさっき自転車に乗っていて、私にひかれたのか？」

少年は私の質問に答えるべくでもなく、ただひたすらに私の顔を見ている。

よく見ると少年の口には歯がなく、青白い顔にも泥のようなものがこびりついていた。

「おい、笑ってないで、俺の質問に答えろ！」

私は怖さのあまり絶叫していた。

その時、急に後ろから白い手がのびてきて、私の座ってるシートが後部座席の方にリクライニングした。

私は急いで体を起こそうとしたが、全く体は動かないで目の前には車の天井が見えるだけだ。

耳元から薄気味悪いうめき声が聞こえてきた。

その声は女性のすすり泣くような声で「アアアアアアアアアアアア」と聞こえる。

そして、突然、天井の視界の変わりに至近距離で女の顔が現れた。女は私の上に馬乗りになった形で私の首に白い手をかけて覗きこんでいた。

「ぼうやあゝこの男がぼうやを轢いて逃げたのかい？」

女は助手席にいる少年に声をかけた。

「ううん、違うよ！ ママゝ、このおじさんじゃないよ！」

私は、この親子の会話を聞いて初めて自分がおかれてる状況を理解した。

恐らく、少年は信号待ちをしていた時に看板に書かれていたひき逃げされた少年であって、この母親は少年を思っ後追い自殺かなにかでこの世に存在しない霊なのであろう。そして、夜な夜な犯人を捜しだすために、このような霊現象をひきおこしているのである

うと！

そうして、少年が母親にひき逃げした犯人が私じゃないといってくれたので、まもなくこの霊現象も終わる。

もう少しの辛抱だと私は思った。

案の定、私の予想はあたり、しばらくしてから体が動くようになった。

親子の霊もいつにまにかいなくなり、私はリクライニングシートを元に戻した。

しかし、体の寒気はまだおさまらないでいた。その時、「ピー」とエアコンの外気温が0度を示すアラーム音が鳴った。

私は一刻も早くこの場から立ち去りたかったので、車のエンジンをかけようとした時、またしても、後ろから白い手が伸びてシートが後部座席にリクライニングした。

さきほどと同じように体の自由を奪われた私。

そして、私の顔の上には間近に女の顔が二人覗きこんでいる。

一人はさきほどの少年の母親で、もう一人は……

もう一人は、そう、六年前にひき逃げした片方の眼球が飛び出した老婆が覗き込んでいた。

老婆の左肩の付け根からは、あの時と同じように血が噴水のように出ている。

母親の霊が怖い顔をして老婆の霊に話かけた。

「おばあーちゃんをひき逃げしたのはこの男なのかい？」

「ああーこいつだ！ こいつは、まだ生きてる私を見殺しにしたんだよ！」

少年の母親が再び私の上に馬乗りになってきた。白い手が私の首に伸びてくる。

私は二人の霊に命乞いの哀願をした。

「私が悪かったよー頼むから助けてください！」

「……ダメエー、私が助けを求めた時もお前は見殺しにしただろー！」



老婆ははきすてるようにそう言った。

母親の白い手が私の首を絞めつける。

「く……るしい」

私は遠のく意識の中で、ひき逃げした事に対して後悔の念にかられたがもう遅いようだった。

どうやら、人の道はずしてしまった罰を報いる時がきたのだった。

## 透明人間

ある街にとっても貧乏な青年がいた。

青年の職業はマジシャンであつたが、パットしない顔立ちと手先が不器用な事が災いして全く名が売れず、明日の食事にも困る始末である。

青年は、お金が無いので新しいマジックのネタを買うことも出来ず、手品はマンネリ化してしまい、ますます人気もでない悪循環である。

ある時青年は寝る前にベッドで神様をお願いした。

「どうかあ、僕に手品がうまくなるように力をください。そして金持ちにしてください。力をくださるなら寿命が10年縮まっても構いませんので……」

すると、青年の頭の中で声がした。

「そなたの望みしかとききとつたぞ！」

青年が空耳かと思ったとき、彼の寝ているベッドの横で白い煙がモクモクと立ち昇った。

そして、神様が現れたと思いきや、恥ずかしそうに尻尾を隠した悪魔が現れた。

悪魔は少しでも青年を怖がらせない為精一杯の笑顔を作つて青年に言つた。

「びつくりしたと思うが、俺様は見ての通り悪魔だ。悪魔といつても決して悪い悪魔ではないぞ！ どちらかと云うといい奴なんだ」

悪魔は説得力のあるようでない事を言つた。

悪魔は青年に続けて言う。

「そなたは力が欲しいと言つたな。その力を使ってマジックがうまくなりたい。そして金持ちになりたいとな。さすればそなたに特別サービスで力をやるうではないか！ そうだな、いつでもどこでも姿が消える能力、そう透明人間になれる能力をやるうではないか！」

「僕が透明人間になれるのですか？」

「そうだ。透明人間だ！ 凄い力だろう。ただし俺様も商売柄、ただという訳ではないぞ！ なに心配するな、さっき、そなたが言った10年寿命縮めるといった物は俺様は必要としない。俺様が欲しいのはそなたの魂なんだ！ でも、今すぐではないので安心してくれ。そなたが普通に寿命を全うして死んでから俺様に魂をくれたらいいだけだ。どうだ、容易いことだろう」

青年は少し考えたが寿命が縮まるわけでもないし、今すぐに命をとられるわけでもないので悪魔と契約する事にした。

悪魔は満足そうに「うんうん」とうなずくと力の使い方を説明した。

「透明人間になるのは簡単だぞ！ そなたが心の中で”消えろ”と念じるとすぐに姿が消える。ただし気をつけないといけないのが着ている服までは消えないことだ。それと、この力は手品をしている時にしか使えないからな。例えば、そなたがスケベ心を起こして女風呂を覗こうとしても力は発揮できない。姿を消して銀行強盗しようとしてもだめだぞ。わかったな！ 俺様はこう見えても一応世間の常識はわきまえているつもりなんだ。ズルは許せないたちなんだよ。しっかり手品で稼いで金持ちになるんだ」

そう言つて、悪魔は早口で説明した。

悪魔は自分の世界に帰る前に青年に言った。

「そなたの行動はいつでも見ているからな、さっき言ったルールは守るのだぞ！」

そして、悪魔は出てきたとき同じように白い煙を立ち上らせて消えていった。

早速、青年は悪魔から貰った力を試したくなり鏡の前に立つと”消えろ”と心の中で念じた。

すると、悪魔が言ったように青年の体は着ている服だけ残してきれいに消え去った。

青年は自分の幸運さに喜び飛びあがったが服だけが宙に浮いてい

た。

しかし、青年も男なので多少なりともスケベ心があるものである。悪魔の忠告に従わず、銭湯に行き真裸になると”消える”と念じて姿を消すと、女風呂に侵入した。

5分ほどは何事も起こらず神秘の女風呂で覗きを堪能したが、女性の「キヤー痴漢」と言う悲鳴と共に青年のだらしない体が姿を現した。

青年は慌てて逃げ出した為、途中で入り口の半透明のガラスにぶつかり額を縫う怪我を負う始末。それでも捕まっていたまるものかと必死に逃げて捕まると云う事は無かったが、全裸で路上を逃げ回るという失態をおかしてしまった。

それで分かった事は悪魔が言っていたズルは許さないということだった。

そういった事情で、青年はマジックの時しか力は使わなかった。

それから数ヶ月後、青年は悪魔から貰った力を手品に活かして超有名人になっていた。

青年の手品は瞬く間に有名になり、テレビの番組でも放送されている。

そのつど青年は透明人間になって世間を沸かせた。

青年の収入も飛躍的に上がり、今ではマジックのアシスタントも雇っている。

そして、青年は高いギャラと引き換えに、今から生放送で透明人間になるべくスタジオに来ていた。

青年は番組プロデューサーと、ある程度の番組の進行を確認すると控え室に入って出番を待った。

本日の進行はこうだった。

番組は二時間番組で最初の一時間は青年がトランプのマジックや空中浮遊を試みたりして、場内を沸かせる。これらは勿論、種がある。青年が大金をはたいて仕入れてきたネタだからだ。

そして、最後のクライマックスで青年の目玉”透明人間ショー”が始まる。

この透明人間ショーは青年が半透明の強化プラスチックに入って観客の見ている前で、服を着たまま姿を消すといったもの。

ただ、それでは何も面白くないので、時間が来たら青年の入ってる強化プラスチックの上部から鉄をも溶かす、強力な硫酸の雨が降ってくるというものだ。

しかし青年にとってはいとも簡単なことだった。

心の中で“消える”と念じて姿を消して、服をきताまま強化プラスチックに付いてる手すりを登って脱出するだけで観客からは拍手喝さいとテレビ局からは巨額なギャラがもらえる美味しい仕事なのだ。

豪華なセットの中で生放送の収録が始まった。

予定通り序盤から青年のマジックは大盛況だった。

さすがに青年が大金をはたいて買ったネタだけあってすべる筈はない。観客は拍手喝采、番組司会者からは「奇跡だ、凄い！」と驚嘆の声が漏れた。

そして残るは、いよいよクライマックスの透明人間ショーだけになった。

司会者が緊迫した表情で強化プラスチックの前でマジックの説明をした。

アシスタントが硫酸の威力を観客に見せるためにマネキン人形を持ってくる。

マネキンの頭に硫酸が一滴垂らされた。

見る見る解けていくマネキン人形。

観客からは悲鳴ともため息とも取れる声が漏れる。

そんな中、勢いよく正装をした青年が強化プラスチックの前に姿を現した。

場内からは割れんばかりの拍手がこだまする。

青年は黙ってカメラと観客に大きく手を広げてお辞儀するとプラスチックの容器の中に入っていた。

青年は容器の中に入るとお腹の中にいる胎児のような格好をする  
と“消える”と念じた。

だが、青年の体は“消えなかった”……

代わりに青年の頭の中で聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「フッフ、バカな奴だな。そなたはもう“消える”事はできないぞ！  
なぜなら、この俺様がそなたの力を今封印したからなあ。そなたは、もう十分夢が叶っただろう。今度は俺様がそなたの魂を貰う番だ。  
ここで、そなたは死ぬがよろう……」

青年はしまったと思い容器から逃げようとしたが　もう遅かった。

青年の頭上から大量の硫酸の雨が降る注ぐ。

青年は消えていく意識の中で悪魔の声をまた聞いた。

「フッフ、所詮悪魔は悪魔だ！　いい悪魔なんかないのだ」

そして……確かに青年の体は一瞬のうちに”消えた”

悪魔の力では無く、硫酸の力によって……

場内では肉を焼く嫌なにおいだけが残った。

次の日の新聞の一面にはマジシャン青年の悲劇”透明人間ならぬ溶解人間にと”紙面が踊っていた。

## 取調べ

俺の名前は仮谷崎純一 三十四歳 警視庁第一捜査課で殺人担当の刑事をしている。

俺達捜査課が追ってる事件は一カ月ほど前から、各種マスメディアでも連日とりあげられている都内連続バラバラ殺人事件だ。

俺には身重の妻がいるが、この事件の捜査のおかげですつと所内にかんづめ状態である。

昨日から妻に連絡もとれない忙しさだ。

そんな状況の中、事件の方は急展開を見せ容疑者を逮捕することが出来た。

都内公園を巡回中の警察官が拳動不審な少年を職務質問したところ、持っていたリュックサックの中から、恐らく女性だと思われるひどく痛んだ生首が出てきたからだ。

もし、この少年が犯人ならば事件の被害者は三人目だった。

恐らくと言ったのは過去二人の被害者がいずれも女性であったからだ。

そして、俺は早くこの痛々しい事件を解決させるべく、鑑識から渡された被害者の惨たらしい写真に目を通してながら取り調べ室に向かつて長い廊下を歩いていった。

写真に写ってるのは年齢性別がつかない。

それほどまでに写真の遺体はひどく痛んでいた。

切断されている首から上の写真……

以前は人の顔だっただろうと思われる部分は肉塊と化していてまるでのつぺらぼうのようだ。

目はくりぬかれており、鼻と耳は切り取られている。

頭頂部に長い髪の毛が申し訳程度に残っているが、皮膚ごと強く引き抜かれたのか、頭蓋骨の一部分が露出していた。

まだマスコミには漏れていないが、捜査資料によると容疑者の少

年は十七歳で都内有名進学校に通っている。

両親とも医者をしており、かなり裕福な家庭のようだ。

少年は一人っ子で兄弟はいない。

最近凶悪犯罪を犯す少年は、家庭環境がいいところの方が多いと俺は思っている。

きっと過保護に育ててこられたつけがまわっているのだろう。そのような事を考えながら、俺は取り調べ室のドアを開けた。

俺が入ってきてても、少年は全く興味を示さず、携帯電話をいじっていた。

通常は手錠をかけて取り調べをするのだが少年が十七歳というだけで免除されている。

「なんで、携帯電話をとりあげないんだ！」と、俺は中にいた筆記官に聞いた。

筆記官が言うのには、他の刑事が携帯電話をとりあげようとする、少年はかたくなに拒否反応をしめし室内で暴れて、取り上げるのなら何も話さないといったそうだった。

その様子を見かねた署長が外部と連絡を取らないという条件で、所持を認めたということだった。

署長も「甘いな」と思ったが、これぐらいの事で少年の供述が進むのならやもえないかとも思った。

俺は少年の正面の椅子に座ると少年の顔を見て尋問を進めた。

少年の顔には覇気が全くなく、目だけが異様にぎらぎらしていた。

少年は端正な顔立ちをしており、まるで美術の教科書に載っている彫刻の像のようだった。

俺は最初に少年に名乗った。

「これから、君の話を聞く仮谷崎だ。素直に質問に答えてくれたら手荒な事はしない」

そう俺が言うと、少年は、フフフと人を馬鹿にしたような笑みをこぼして、「奇遇ですね」とだけいった。



「おい、何が奇遇なんだ！」

俺は少年に聞いたがそれ以上話す気はないらしく、少年は黙っている。

「あのリュックに入っていた首は、君が殺ったのか？」

「ああ 僕が殺ったんだよ 刑事さん芸術的だったでしょう」

少年は相当いかれてるらしい。

「あの首はいったい誰なんだ？」

「さあ、誰なんでしょうね」

少年は俺に挑発的な態度でそういった。

「お前、俺をなめてるのか！」

俺は少年の反省の態度がみられないのとさつきからニヤニヤしているのが、許せなかったので、思いっきり机を叩いていた。

「刑事さん。暴力はいけませんよ！ せつかくこれから少しくらい話してあげようと思っていたのに、そんな態度なら何も僕は話しませんよ」

俺はこいつに、ご機嫌をとるつもりはなかったがとりあえず供述を早くとりたかったので、少年に謝った。

「いやあ悪かったね、昨日からあまり寝てないものでついイライラしてしまった。これから、気をつけるので話してくれるかね」

少年は私の態度に満足したのか、事件のあらましを語りだした。

「あの作品はねえ、公園で偶然見かけた女の人なんだよ！ たぶん買い物帰りじゃなかったのかなあ、荷物を重たそうにもっていたからね。それで、綺麗な人だったからこっさり後をつけたんだよ。したら近所の団地に入っていた」

それから、どうしたんだい？ と俺は少年のご機嫌に気をつけながら聞いた。

「僕は新聞の集金を装って、家のチャイムを押したんだよ。意外と簡単にかぎを開けてくれてね。そのまま家の中に無理やり入り込んで、女の人を椅子にしばりあげたんだよ。実に興奮したね」

「それですぐに殺したのか？」

「バカだねえ、刑事さんすぐには殺さないよ。すぐに殺したら、僕が楽しめないじゃないか！　まずねえ、持っていたナイフで目の玉をえぐってやったんだよ。女の人は外に聞こえるんじゃないかと思うぐらいすごい悲鳴をあげてたよ。僕はものすごく愉快だったな。そしたら、女の人気絶しちゃった。面白くなかったので、耳を切断したら痛さのあまりか、女の人目を覚ましたよ。もうやめて、とか僕に哀願してたよな」

俺は少年の話を聞いていてさすがに気分が悪くなっていた。

俺のことなど気にすることもなく少年は興奮しているのか、語気を早めて話す事に夢中になっていた。

「それでね。僕はあることに気づいたんだよ。女の人のお腹が膨らんでいるのを、僕は腹の中がどうなっているのか気になってね、持ってるナイフを今度は腹にむかって……」

俺は吐き気がしてきたので、トイレにいかうと思ったとき少年がいった。

「そうだ！　奇遇だねえ、その女の人、刑事さんと同じ苗字だったよ」

「おい……今なんていった？　その女性は俺と同じ苗字だったのか！」

俺は急に連絡をとっていなかった妻の事が心配になり、携帯電話で妻の携帯の番号をおした。

すると、あるうことか……さっきから少年がいじっていた携帯電話から聞きなれた着信音が鳴っていた。

その時、俺は全てを悟った。

あの惨たらしい遺体の写真は……

そして、抑えようのない怒りがこみ上げてきた俺は気づくと少年のこめかみに拳銃をあてていた。

少年はそれでも、ケタケタ笑っていた。

「どうせ。撃ってこないでしょう」

少年は俺をいかぶっているようだ。

俺は躊躇なく引き金を引いた。

真っ赤な血しぶきと共に少年の頭の一部が吹き飛んだ。

そして、俺は銃声を聞きつけた仲間に取り押さえられた。

しかし、後悔の念は微塵もない。

どうせ、この少年は少年法に守られて刑罰を受ける事なく世間にまた舞い戻るだろう。

そうなるぐらいなら、妻とこれから生まれてくるはずだった子供の事を考えると俺のたった行為を誰も責めることはできないだろうと……

## 肝試し

僕は、夏休みに入って三週間ばかり経った八月十五日に、学校の理科準備室に来ていた。

僕が学校に来た理由は高校の部活の為であった。

準備室の窓を開けていたので、外の樹木にへばりついてるミンミン蝉が喧しく、短い寿命を謳歌している。

僕は、心霊研究部に入学していて、去年から部長をしている。

部活に集まったメンバーは五人で、心霊研究部長の僕と、僕の彼女の朱美に、お調子者の真二と、真二の彼女の聡美、そして根暗な遠藤君であった。

「ねえねえ、アキラ君。今年もいくんでしょう？ 肝試しに」

楽しそうに朱美が、僕の名前を呼んだ。

「うん、そうだな。去年、中途半端に肝試しが、お開きになってしまったしね」

「そうだよ、そうだよ！ 去年、あの鍾乳洞の中で物凄い音がしたものだから、みんな一目散に逃げ帰ったのだったよな」

お調子者の真二が笑いながら言った。

「でも、去年の肝試し。それなりに面白くて怖かったし、今年も聡美いきたいな」

皆が肝試しの話題で盛り上がってるのに、遠藤君だけは、さつきからずっと下を向いて黙り込んでいた。そんな遠藤君に僕は声をかけた。（遠藤君ってのは、最近入学してくれた貴重なメンバーだった）

「遠藤君は、肝試しの事どう思う？」

「お…俺は…あんまり乗り気じゃないなあ……」

「なぜ、乗り気じゃないの？」

「うん。俺あんまり怖い好きじゃないし、それに……行ってみたらわかるよ」

怖い好きじゃないって、だったら心靈研究部なんかに入部するなよと僕は思ったが、ただでさえ五人しかないクラブなので、僕は遠藤君に遠慮して聞いてみた。

「僕達は、このあと肝試しに行こうと思うけど、遠藤君はやめとくかい？」

「みんなが行くのだったら、俺もついていくよ」

「じゃ、決定ね！」

朱美が嬉しそうに言った。

「場所は去年の鍾乳洞でいいかな？」

「うん、そこでいいよ。あそこ雰囲気あるし、去年は中途半端だったしね」

そう言っただけで朱美は僕の肩に手を当てた。

「俺もどこでもいいけど賛成」

「私もそこで、いいよ」

遠藤君だけは、何も言わずに黙っていた。

相変わらず、乗りの悪い奴だなと僕は思ったが、遠藤君だけ彼女がいないのでテンションが上がらないのも、仕方ないことかもしれない。

そうして、僕達五人は鍾乳洞に今年も肝試しに行く事にした。

肝試しの舞台となる鍾乳洞は、僕達の学校の裏手にある山にあつて、戦時中には防空壕にも使われていたりもした。現在は一応、立ち入り禁止になっているが、別に入り口が封鎖されてる訳でもなく誰でも自由に出入りできた。鍾乳洞の中はひたすら一本道で、長さは一キロほどであろうか、迷う心配のない洞窟だった。

ただ……三年ほど前に鍾乳洞の中で、他校の男子生徒がいじめを苦にして自殺した事件があつてからとゆうもの、その生徒の幽霊がでると噂になり、ほとんど人がよりつかなかった場所でもあつた。

僕達は肝試しの雰囲気を出す為、怪談話とか体験談などとして外が

暗くなるのを準備室で待った。

途中、守衛さんが学校内に誰が残っていないか見回りにきたが、その時は隠れていたので見つからずに暗くなるまで準備室で待つ事が出来た。

そして、僕達は肝試しのため鍾乳洞に向かつて、遠藤君を先頭に山道とまではいかないが、起伏のある道を歩いていた。今年は冷夏の為なのか去年この道を歩いた時は、汗がしたたりおちたが、今年は全く汗もかかず、暑さもあまり感じない。

遠藤君はやる気になったのであるうか、黙々と何かに憑りつかれたように一人、先頭をきつて鍾乳洞に向かって突き進んでいる。僕は遠藤君においていかれないように、必死に彼の背中を追って歩いた。

十分ほど歩いたところ、ようやく前方に鍾乳洞がぼっかり口を開いているのが見えた。

「やっと、ついたね!」と、真二がはしゃいで言う。

「私なんだか、怖くなってきちゃった」

真二の恋人の聡美が甘えた声をだした。

「大丈夫だよ!俺がついてるから、手つないでやるからさ」

真二はそう言って、やけに嬉しそうだ。

「ねえ、アキラ君……中に入る順番どうするの?」

朱美が心配そうな表情をして僕に聞いてくる。

「そうだな、あいにく懐中電灯は一つしかないし、どうしようか?」

「それを、あなたに聞いてるんじゃないのよ」

朱美は少しフクレタ表情をした。

正直可愛い。

「遠藤君、悪いのだけど……ここに来たみたいにな、また先頭で中に入ってくれないか?」

遠藤君は少し間をあけてから「ああ、いいよ」とだけ言った。

「じゃ、決まりだな」

真二は早く、聡美と手をつなぎたいみたいで、遠藤君に鍾乳洞の中に入るよう促した。

「じゃ、いくよ」とだけ言って、遠藤君は鍾乳洞の中に入っていた。

遠藤君の後に、真二と聡美カップルが仲良く手をつないで鍾乳洞に入る。

そして、しんがりに僕と朱美が続いた。

鍾乳洞の中は完全に暗がりの密閉型というわけではなく、ところどころ岩の隙間から月明かりが漏れている。月明かりが鍾乳洞の岩石や、岩石についた苔に反射して幻想的空間を創り出していて綺麗だった。

遠藤君はそんな景色に気をとられる事もなく、少し早足気味に進んでいく。

「ねえ。アキラ君、ここに自殺した学生の霊っているのかしら？」

そう言って、朱美は僕の手を強く握ってきた。

これだから、肝試しはやめられない。

僕は、少し朱美を怖がらしてやろうと思って言った。

「朱美には言ってなかったけどな。俺って……霊感あるんだよね。それで、この鍾乳洞に入ってから、並々ならぬ、嫌な霊気を感じているんだよ！」

「アキラ君、やめてよ！ 私まじで怖いんだから……」

「アハハ冗談だよ、冗談。幽霊なんかいるわけないよ」

「もう、アキラのバカ」

僕は肝試しは実に楽しいと思った。前方にいる真二達カップルもどうやら、いちゃいちゃ楽しんでいるようだ。

ただ……遠藤君だけは、楽しんでいるのか不明ではあったが……

そんな時、早足で歩いていた遠藤君の足が止まった。

「どうしたんだい？」

僕は遠藤君に聞いた。

「シイ、前方見てみるよ！」と、遠藤君は言った。

僕達四人は前方に一斉に視線を向ける。

前方には、月明かりでない明かりがもれていた。

それは、人工的な明かりで、僕らと同じ、懐中電灯の明かりだった。

どうやら、鍾乳洞の中には僕達以外の先客がいるようだった。

「どうする？」

真二が、僕に聞いてきた。

「ここまできたら、あの明かりを確かめよう」

僕は怖さより、好奇心の方が勝っていた為、みんなにそう言っていた。

その言葉を聞いて、遠藤君はゆっくりと明かりに向かって進む。明かりに近づいていくと、女性のすすり泣く声が聞こえてきた。

「怖いよ、怖いよ。アキラ君もどりましようよ」

朱美の表情は強張っていて、今にも泣き出しそうな感じた。

「大丈夫。俺がついているから、ここまで来たんだ、あの明かりだけ確かめてから戻ろう」

「うん」

朱美は小さく頷いた。

そこから二十メートルほど進んだ時、明かりの全容がわかった。

明かりは懐中電灯のものでは無かった。鍾乳洞の奥を塞ぐような大きな岩があり、その岩の周りに何本もの、ろうそくの火が点けられていたのだ。その前に女性が岩に向かって手を合わせていた。よく見ると、その手を合わせている女性は、朱美の母親だった。僕は何回も合っているので見間違いでは無い。

確かに朱美の母親がそこにいた。

「でも、何故？ 朱美の母親が……？」

朱美も母親に気づき声をかけていた。

「お母さん、お母さん！」



「……」

朱美の母親からは返事は無い。

それどころか、私たちの存在に全く気づいていないようなのだ。

その時、遠藤君が岩の横にある大きな石を見てみると言った。

岩の横には、おおよそ自然のものでは無い、綺麗に磨かれた大きな石があった。

いや、よく見ると石ではなく、石碑だった。石碑には文字が書かれていた。

【不幸にも、この場所にて落盤事故にあった四人の御霊に捧げる】  
その下に落盤事故にあった犠牲者四人の名前が石碑に彫りこまれていた。

新藤あきら、高山朱美、高橋真二、三村聡美。僕は気づいた。そう、これは慰霊碑なのだ。

そして、この慰霊碑によると、僕達は死んでいる。

突然、遠藤が笑い出した。

「アハハハ、アハハ。お前達にいい事を教えてやろうじゃないか。お前達は去年、ここに肝試しにきたのだよ。自殺した俺の幽霊が出る噂を確かめにな！　そう、俺は三年前にいじめの為に自殺した者だ。そこで、お前達は俺の姿を見てしまい、逃げ出したのだよ。その時、偶然にも落盤事故が起こり、お前達はあの岩におしつぶされて死んだのさ。アハハ、ハハ」

遠藤は続けて言った。

「お前たちは、俺と違って成仏できたみたいで、俺はやつと友達が出来たと喜んでいたら、お前達の魂は事故のあと、どこかにいってしまった。でも、なぜだかわからないが、昨日お前達は戻ってきたんだよ。」

だから、もう、どこにも俺を一人にしていかないでくれよ。俺は寂しいのだよ」

全てを理解した僕は遠藤に言った。

「ごめんよ遠藤君。僕達はきつと明日になれば、たぶん、またいな

くなっちゃうよ。今この現世にいられるのは一年に一回のお盆の時  
だけだよ。でも、来年になったら、また肝試し、しようよね」

僕の言った事に対して、朱美、真二、聡美は「うんうん」と頷い  
ていた。

こうして、僕達の怖くて、悲しい肝試しは終わった。

やらせ

「多賀、そろそろ準備いいかあ」

監督は唾をとばしながら俺にいった。

俺の名前は多賀陽一。

いちおう俳優を職業としているが、さっぱり芽がでない。

そして、俺に唾を飛ばしてるのが自称映画監督の遠藤だ。

遠藤はこれまで数々の自作映画を作ったが、全く売れずに映画監督のポリシーを捨てて、アダルトビデオの製作もしたが、それもパツトしない。

今では借金まみれで舌だけはよくまわるがクビがまわらないといった才能の無いただのおっさんになっている。それで、売れない俳優と才能のない借金まみれの監督で、あるシナリオを立てたのだ。

そのシナリオとは本物の幽霊を撮影して、それを、大手テレビ局に監督のつてを使って売り込むというもの。

もちろん本物の幽霊なんている訳がない。

それで、監督の知り合いのAV女優を幽霊役にさせて、俺を驚かす算段である。

撮影場所はつぶれた病院で、近所では幽霊がでると評判になっている。いや、出るって噂を捏造してるつてのが正解であつた。

撮影の設定は、三階にある手術室で、女の幽霊を目撃して逃げ帰るという安っぽいもので、心霊ものでよくあるといったらそれまでのものである。俺はこんなの売れるわけがないと思ったが、当面の生活が苦しいのでギャラに釣られて参加する事にした次第である。とにかく、俺達にはやるしか道は残されていないのだつた。

そして、撮影がはじまつた。

撮影といっても、カメラマンがついてくるわけじゃない。

経費節減のため、俺がデジタルビデオカメラを持って撮影するのだ。

監督はの方が臨場感があつていいと言ったが、余分なギャラを払うのが嫌なだけだろうと俺は思った。

監督は幽霊役の女が怖がるからといって、一緒に病院に入っていた。

そうして、俺は病院内に足を踏み入れた。

さすがに、夜の誰もいない病院は怖い。

俺は事前の監督の指示通り、ゆっくりと病院の一階から丁寧に撮影していった。

そんなに大きくない病院なので、一階の各部屋をすべて見て回った。

つぶれた病院だけあつて、かなり老朽化しており病院内は荒れ放題だ。

壁には、近所の不良どもの溜まり場だったのか趣味の悪い落書きがそこらじゅうに書いてあつた。

次は二階にいこうと思い、階段を上ろうとした。

その時、上のフロアーからバーンとなにかが倒れる音がした。

さすが、監督こつという事だけ抜け目がない。

俺は、監督の仕込みに感嘆しながら二階にあがった。

二階にあがると、老朽化の為、コンクリの壁が崩れているところがあつた。

床も穴があいてるところがあり、つまずいたら怪我するのは間違いない。

万が一のために、監督は俺に保険かけてるといったが、あてに出たものじゃない。

当たり前のことだが、一人で暗い病院を回っていたら気味が悪い。だんだん気分も悪くなってきたので、撮影を早く切り上げようと

思いながら問題の手術室にむかった。

手術室には大きな扉がついていた。

俺はいよいよ、クライマックス突入だと思い、扉をあけた。

開けた時、ぎいーと嫌な音がする。中には、手術用の照明とボロボロのベッドがあり、手術用具を入れるための棚が並んでいた。

その棚の間に白い服をきた女が立っていた。

なかなか女は雰囲気が出ていていい感じだ。さぞかし幽霊役の女もこんなところで突っ立っていて怖かっただろう。

俺は、お約束の悲鳴をあげて手術室から出ようとした。

すると、俺は後ろから、何者かに羽交い絞めにされてしまった。

そして、白い服を着た幽霊役の女がゆっくり俺に近づいてきて、あろうことか、俺の首を絞めたした。

こんな設定聞いてないぞ

すると、後ろで羽交い絞めになっている何者かがいった。

それは、聞き覚えのある声だった。

「悪いなあ。お前には、ここで死んで貰うよ。お前には、多額の保険金をかけてあるんだよ、その金で、女と悠々自適の暮らしをさせてもらうよ」

俺は目で女に合図を送った。

女は俺の首をしめるのをやめた。

俺は素早く、監督の背後にまわり、逆に監督を羽交い絞めにした。そして、女が監督の首を絞める。

俺は監督にいった。

「悪いなあ。監督　女と悠々自適の生活をさせてもらうよ」  
そうして俺達は、監督を殺した。

監督には、借金苦で自殺したというシナリオをあげた。

こうして、俺は名実ともに一流俳優の仲間いりだ……

## 飼育係

僕は暗くて、狭くて、汚くて……そして臭い飼育部屋に入れられている。

僕には立派な名前があるにもかかわらず、飼い主は僕の事を記号で呼ぶ。

ここでは僕は1406号と呼ばれている。

飼い主は日に三度、僕を呼んでは小窓から餌を置いていく。

そうして僕は飼い主が飼育部屋に置いていった質素な嫌な匂いのする餌を夢中で貪るんだ。

だって食べないと生きていけないから。

僕がこの飼育部屋に入れられる前に飼っていたペットの女と同じようにね……

それと、最近では餌の時間以外にも飼い主は僕を呼ぶ。なんでも僕を観察したい人がいるという事だ。その時だけ僕は飼育部屋から連れ出される。

その人は大学の偉い学者なんだそうだ。僕の仕草や言動をメモに残してそのうち発表すると言っていた。

僕は積極的に学者に協力したんだ。何故かって？ きまってるじゃないか、僕が生き物図鑑に載るんだからね。

そして、僕は学者にここに捕獲されるに至った経緯を語る事にした。

僕は小さい時から生き物を飼うのが大好きな普通の男の子だったんだ。

最初に飼った生き物はカブトムシだったかな？ でも、なぜか飼っている生き物はすぐ死んでしまうのだよね。なんでだろう？

それは、きっと僕が可愛がりすぎたからだと思う。

僕の生き物に対する愛情は凄いからね、僕の深い愛に耐えられなくなつて……

だから死んでしまうのだろう。

そして、僕は死んだ生き物は必ず食べてあげた。だって悲しかったから。

食べることで、僕の肉体の一部となつて、僕が生きている限り永遠の生命を持つ事ができるんだもの。

どうだい素晴らしいアイデアだろう。

だけど、僕の考え方を理解してくれる生き物は少ない。

唯一の理解者だったじいちゃんも僕が中学二年のときに突然死んでしまったしね。

でも、じいちゃんも僕の体の一部になっているから淋しくはないんだ。

火葬場で焼かれてしまったじいちゃんの骨をこっそり持って帰って食べたからね。

そうそう、それとね。

中学生になつてから僕は学校で飼っているウサギの飼育係になつたんだ。

クラスのみんなが生き物好きな僕にくれた係だった。

僕は一生懸命ウサギの世話をしたんだよ。

でもね、じいちゃんが死んでしまう二ヶ月ぐらい前かな。

朝、学校に行つて、一番にウサギ小屋にいくと、僕が可愛がつていたウサギ達がみんな惨殺されていた。

ウサギ達は小屋の扉に吊るされていて腹を割かれていた。

ウサギの腹からこぼれ落ちた内臓が無残にも地面に向かって垂れ下がっていたんだよ。

誰が殺つたかはわからない。

そして、僕はクラスのみんなにこの事を報告した。

みんなでウサギの冥福を祈って泣いたんだよ。



次の日いつも通りに学校の教室に行くとクラスのみんなに無視されたんだ。

僕の机の上には花瓶が置かれていて、その下には落書きがされていたんだよ。

「ウサギ殺し野朗」と……

最初は無視されるだけだったが、そのうちに暴力もみんなから受けるようになった。

学校のトイレにつれていかれパンツをずらされてカメラであそこを撮影されたんだ。

写真はすぐに黒板にはりだされていたんだ。クラスの女子にも見られて、女子からは「きもい」と会ったび言われたんだよ。

そうして僕はそれ以来学校に行くのをやめて家に引きこもることにしたんだ。

最初のうち両親は学校に行けとうるさかったが、僕が十八になるころには言わなくなったんだ。

その代わり両親は今度は仕事に行けと言うようになった。

あまりにひつこいので、両親が夜、寝てるときに金属バットで頭を殴ってやったんだよね。

何度も何度も殴ってやったんだ。初めのうちは両親は絶叫していたが布団が真っ赤に染まる頃には静かになった。

僕は静かになった両親の体をのこぎりで切断して腐らないように冷蔵庫に入れたんだ。

あの時の快感は今でも鮮明に脳裡にうかぶ、幸いにも両親はある程度の貯金はしていたので当面の生活の心配はなかった。親父の会社からは何度か連絡があったが、行方不明なんですと言うと連絡はこなくなったよ。

僕が完全なる自由を得た瞬間だった。しかし自由を得た代償は孤独だったね。

とにかく淋しいんだよ。

それで昔みたいに生き物を飼うことにしたんだ。

僕はもう立派な大人なので飼うものも虫というわけにはいかない。だから、近所の野良猫にしたんだ。

でもね、やっぱり所詮、野良は野良なんだよね。

言葉が通じないせいもあって全然なつかないんだよね。

仕方ないから縛りあげてやったんだよ。

そしたら、僕の手をひつかきやがった……野良猫のクセにね。

結局僕はこいつを生きたまま風呂場にしずめてやったんだ。

死んでから今後のために解剖してやったんだ。

でもね、あんな猫でもいなくなったらやっぱり淋しいだよね。

僕は考えた。今度は言葉の通じる生き物にしようって！

早速、僕は生き物を捕獲する準備を始めた。

今度は人間の女なので野良猫みたいにうまくは捕獲できないだろうからね。

僕はネットでクロロフェルムを二万円で買った。後はネットの出会い系で生き物を誘い出すだけだね。なるべく近所の生き物を出会い系で探したんだ。

ネットには会うだけで三万円と餌をまいたらすぐに食いついてきた女がいた。

ちょうど自宅から近所なのでうってつけだったね。

そして、僕は女と待ち合わせした場所にいった女とあったんだ。

女に自宅に来てくれたら更に一万やるといったら、変な事は絶対にしないという条件で女はホイホイと

僕の自宅兼飼育部屋についてきたんだ。

全くバカな生き物だ。

部屋に女が入ると、僕はポケットに忍ばせておいたクロロフェルムを女に嗅がせたんだ。

すぐに女は眠ったね。

僕は女を素早く近所の病院から盗んできた車椅子にのせると、手

に手錠をかけて女が目覚ますのを待ったんだ。

二時間ぐらいたったら女は目を覚ました。

女は目を覚ましたら、僕にいきなり文句を言ったが、女の車椅子を押して冷蔵庫に入れてある両親の生首を見せてやるとその場でゲロとオシッコをもらして泣きはじめたんだ。

僕は女に言う事を素直に聞いたら長生きさせてやるといったら女はうんうんとうなずいた。

そうして新たなペットを手にいれた僕は、ここの飼育部屋に捕獲されるまでのおよそ二ヶ月間この女を飼う事ができたんだ。

最初に僕はペットに助けを呼ばれては困ると思い、舌を死なない程度に引っ掻いてやったんだ。後、歯も全部抜いてやった。

歯を抜いたのは女に僕のおそこをしゃぶらせていた時に、一度噛み千切ろうとした罰だった。

これで女は喋ることができなくなつて都合がよくなったね。

女に与える餌は三日に一度にした。

そうする事によって女は僕を飼い主だと認めるからね。

僕のありがたさを実感することだろう。

しかし、この楽しい飼育生活も単純な僕のミスで終焉を迎えてしまった。

女の携帯電話を捨てるのを忘れていたのだ。

女の家族が安否を心配して警察に捜索届けを出して、携帯のGPS機能によって居場所が判明してしまったのだ。

警察が僕の飼育部屋に来たときには女は息をしなくなっていたがね。

そうして僕は警察によってあっけなく捕獲されてしまったと言う事です。

学者は僕の話の聞くと物凄く満足そうだった。

そして、話してくれた御礼だと言って情報をくれたんだ。

どうも、僕は先日受けたテストに不合格だったらしい。

それで、両親殺しと女の飼育に関して罪に問われるらしい。  
結果がでるまでしばらくかかるらしいが、学者の話では恐らく極  
刑になると言う事だった。

それから学者は僕に書類を渡した。

僕が死んでからは非、脳のサンプルを欲しいという内容だった。  
学者はどうしようかと迷ってる僕に言った。

サインしてくれたら、君のことは後世語りつがれますよ。

「私が図鑑にしてあげる」と言ってくれたんだ。

僕は迷わずサインした。

それから二年間。

僕はこの暗くて、狭くて、汚くて……そして臭い飼育部屋に飼わ  
れた。

時々、飼い主が僕が死んでないか確認にくるぐらいで、あの書類  
にサインしてから学者はこない。

でも、淋しくない。

なぜなら、夜になると両親と飼っていた女が僕の枕元に立って微  
笑んでくれるからね……

早くこつちの世界に「おいで」とも言ってくれるからね……

朝になって飼い主に飼育部屋からるように言われた。

いよいよ僕が図鑑に載る日がきたようだ。

小部屋に案内された僕に、飼い主が僕の首に縄をかけた。

僕の正面には、両親とペットの女が笑って見守ってくれていた。

そして、「おいで、おいで」と手招きしている。

低いブザー音の後、立っていた床がぬけた。

そして、僕は息苦しさの中で……

## 河童

私は美容整形外科医である。

都会とはいえないが、そこそこ大きな街で開業していて、自分で言うのもなんだが、医者としての技術は優れていると思っている。その証拠に美しくなりたいと思っておられる客、即ち患者がひっきりなしに来院してくる。

「目を二重にしたいの、鼻を高くして欲しいわ、皺をとって、ほくろを除去して」

というような顔面整形依頼や、「胸を大きくしたいの、お腹の脂肪をとって」等の体の整形など患者の来院目的は様々だ。

そうして私は、患者の美に対する欲求を解消してやるべく毎日、美容手術にあけくれる。

患者は、ほとんどが女性だが、最近では男性患者もしばしば来院してくる。

そんな、忙しい日々を送っていたある日。

奇妙な男性患者が医院に訪れた。

男性患者といっても、大人の患者ではなく、少年だった。

私は、子供に美容整形する気はさらさら無かったが、開業して以来初めての子供患者なので、どういった相談なのか？ と興味が湧いたので話だけでも聞こうと思い、少年を美容相談室に入れた。

少年は相談室に入ると軽くお辞儀をした。

少年は、年のころは十四、五歳に見えて、いがぐり頭でスポーツ刈りをしていた。

背はそれほど高くなく、ひどく痩せていた。

顔の特徴は目がくぼんでいて、ほほがこけている。

口はとがっていて、例えていったら河童に似ていた。

私は、少年に聞いてみた。

「今日はどういった事でここにきたのかな？」

「……」

少年は黙って下をむいている。

「うん？ どうしたのかな」

もう一度私が喋りかけると、少年はいきなり泣き出した。

「実は先生、僕は学校で顔の事でいじめられています。クラスみんなが僕の顔を見て、河童、河童と言っていじめるのです」

私は少年の深刻な話にもかかわらず、最近のガキ達はうまく言いやがると思って少し可笑しくなった。

少年は嗚咽しながら、更に続けた。

「ここにきたのも、もういじめられるのが御免で、先生に顔面を整形してほしいと思いきたのです」

「そうですか、そういったことなら、引き受けない訳にはいかないですね。それで、具体的にどうして欲しいのかな？ アイドルみたいな顔にしようか」

私は少年に少しでも泣き止んでもらおうと思い冗談っぽく言ってみた。

少年は私の気持ちを汲み取ってか少し笑ったように見えた。

そして、具体的にどう整形したいか言ってきた。

「僕は……僕はアイドルみたいな顔にして欲しいわけじゃないんですよ。僕は本当の河童になりたいのです。」

そして河童になって、僕をいじめた奴に復讐したいのです」

私は少年の言った事に対して耳を疑った。

今までに自分から醜い姿になりたいと言ってきた患者など、勿論一人もいないからだ。

「河童になりたいって。僕そんな事できるわけがないじゃないか、仮にできたとしても、医療免許剥奪されてしまうよ」

「先生、仮に出来るといいましたね。先生お願いします。僕を河童にしてください。この事は絶対に誰にも言いませんので。先生、どうか……どうかお願いしまーす」

少年はまた、激しく泣き出すと私に河童にしてくれと哀願してた。

「僕、そんな事言われても先生困ってしまうよ。いくら頼まれてもダメなものはダメなんだ」

「そうですか、僕がこんなにもお願いしてもダメなのですね。それなら僕にも考えがありますよ」

さっきまで泣いていた少年は、こんどはいやらしい笑みを浮かべてわたしにそう言った。

「考えてなんなんだ」

「実はね先生、僕にはお姉ちゃんがいてね。この前ここで胸の美容整形をしたんですよ」

「それが、どうしたんだ」

私は少年が何を言いたいのか推し量っていた。

「つい最近、僕はネットである物を偶然みつけたんですよ。ある物とは先生が麻酔で眠らせた僕のお姉ちゃんを犯してるビデオなんです……」

しまったと私は思った。

少年の言ってる事が事実だからだ。

私には盗撮の性癖があつて、時々、麻酔で眠らせた患者を悪戯してはビデオカメラで撮影していたからだ。

少年は私の額から流れる冷や汗を見逃さなかった。

少年はニヤニヤしながら言った。

「先生、僕を河童にしてくれますよね！ まあ、出来ないと言ったら、先生の秘密をみんなに漏らすだけですけど……」

「わかった。君の勝ちだ。ひきうけるよ」

私は気づくと少年にそう言っていた。

「でも、今日は無理だ。あいにく整形の予約がいっぱいでね。出来れば週末の金曜日の夜に手術するというのではダメかい？ 恐らく二、三時間で終わるような手術じゃないからね」

「やっていただけるなら、それで結構です」

そう言つと、少年は金曜日の夜にまた来ますと行って帰つていった。

私の良心は、例え少年に脅されたとしても、あんな約束するんじゃないかと思つたが、もう一つの心は何故かワクワクしていた。なぜなら、いつも美しいものばかり整形するのには少々飽きていた自分がいたからだつた。

それに、やらないと少年に秘密をもらされて、いままで築きあげてきた全てを失いかねないからだ。

そうして、私はやるからには完璧を求める主義なので河童についての知識と、手術に使う機材と材料を週末にむけて準備した。

週末の手術の日がおとずれた。少年は夜の十時すぎに医院にやつてきた。

私の顔を見ると、少年はお願いしますと頭をさげた。

少年はここに来る前に自宅に遺書をかいてきたそうだ。

「先生、もし手術が失敗しても安心ですね」と少年は言った。

私は少年を安心させるべく、

「私はこう見えても、名医だ。失敗などしないから安心なさい。でも、やるからにはとことんリアルに河童を再現するからね！ 覚悟はいいね」

少年は小声で「はい」とだけ言つと、手術台に裸になつて寝転んだ。

私は少年に全身麻酔をかけると整形手術にとりかかった。まずは一番難しい部分から作業に取り掛かる。それは、河童の一番の特徴の頭部の皿からだつた。

少年の頭の毛を全部剃つた私は、頭皮にメスを入れた。やかんの蓋のように頭皮を円形に切り取つたら、白い少年の頭蓋骨が現れた。慎重に頭蓋骨を脳手術用電動ノコで切れ目をいれる。少しでも脳を傷つけたら手術はそこで終わってしまう。三時間ぐらいかけてようやく頭蓋骨の切除が成功した。



頭皮と同じように円形に切り取った頭蓋骨を取り外すと、少量の脳髄液がこぼれた。私は少しあせったが、これぐらいの量では命に別状はないだろう。幸いにも少年のバイタルも安定している。

少年の頭骨の上にはピンク色した脳髄の半球が露出していた。そこに事前に用意したチタン製の皿を取り付ける。この皿は切り取った頭蓋骨の代わりになるものであった為、頑丈なチタンにしたのだった。

そうして切除した時よりも簡単に皿が出来上がった。

次は顔の手術にとりかかる。元々、少年がいくら河童に、似ているといっても、それは所詮、人間の域をでないものである。

私は、少年の顔のほとんどをいじらないといけなかった。

目元から整形を行った。目元にメスを入れて目つきが細長くなるようにした。次はほほ骨を削る。

顔の表情がもつとこけてみえるようにしないといけないからだ。

口元にシリコンをいれて口をとんがらせ、

皮膚には緑色したワニ皮を移植した。

その他もろもろを整形したら、およそ人間とは思えないおぞましい河童の顔が完成した。

次は体部分の整形に移った。少年の手足にひれをつけないといけない。

ハンマーで少年の手足の骨をくだいて、平べったくした。

ベロンベロンになった手足に砕いた骨を細工して鋭利な爪を作製した。

それから、体全体に顔と同じワニ皮を移植した。体全体が緑色になってまさに河童そのものだ。

最後に海亀の甲羅を背骨にフック代わりに取り付けて完全なる河童が完成した。

私は夢中になって手術をしたため時間を忘れていたが、手術時間はゆうに二十時間を越えるものになっていた。

後は少年がいや、河童が、麻酔から目覚めるの待つばかりだった。

手術時間と同じくらい待っただろうか、ようやく月曜日の早朝近くになって河童が目覚めた。

私のことを確認すると河童はぎこちない言葉を発した。

「だうも、あるがとうございます」

脳をいじった為に言語がうまく話せないのだろうと私は思った。

「ぜんせい、頭がずくずき痛いどす」

私は河童に全身を鏡を見えるように促した。

鏡を見る河童は見た瞬間聞いたこともないような奇声をあげた。

「グエーグエー」

奇声を上げると河童は手術室の窓をがち割って、外の世界に飛び出した。

恐らくあの河童は長くは生きれないだろう。しかし、一体どこに行くというのだ。

私は手術の疲れが出た為、今日は診療を休むことにして寝た。

気が付くと、次の日の朝になっていた。さすがに今日は診療を休むわけにはいかないので、診療の準備をしながら、朝食をとった。

私は、何気にテレビをつけた。すると、この街の事がニュースで騒がれていた。

ニュースではアナウンサーが興奮して原稿を読んでいた。

「昨日の正午すぎにかけて、少年が五人殺害されてます。犯行は残忍そのもので、被害者はいずれも鋭利な刃物のようなもので、バラバラにされてます」

私には、犯人がわかってる。

それは河童が復讐を成し遂げたのだ。

「目撃証言によりますと、人間に似た生物が少年を殺害した後、近所の池に、目下、自衛隊員によって池の水抜きが行われている模様です」

ニュース映像にはこの街の小さい池が映し出されていた。

私はすぐに河童は捕まるだろうと思ったが、私の予想とは裏腹に

河童はなかなか発見されなかった。

それから二週間後、いまだに河童は捕まっていない。  
テレビでもあれ以来、連日事件を取り上げているが新しい情報は無かった。

私は河童の消息が気になっていたが、どうすることも出来ないでいた。

そんな時、私が医院に一人で、仕事が終わってくつろいでいると、ガシャーンと窓ガラスが割れて河童が姿を現したのだった。

河童はひどく弱っていた。頭の皿は斜めに曲がってしまっていて、頭蓋骨が外からでも確認できた。甲羅もそこらじゅう割れている。

そしてたどたどしく言った。

「ぜえせい、頭がいといですよ。元の体ぬもどすてくらさいです」

「ごめんよ。もう私の力では元にもどせないんだよ」

私は正直に河童に言った。

河童は私の言葉を聞いて一瞬悲しそうな顔をしたが、すぐに憎悪むき出しの表情になって言った。

「よすもこんな体ぬしやがって！ こうなったら、お前ぬせきぬんを取ってもらうぞ！」

そうして河童は私に飛び掛って来た。

私のこめかみに河童のするどい爪が食い込む。

遠のく意識の中で私は思った。

お前が河童になりたいといったんじゃないか！

たくちゃん。

コッ コッ。

また、あの音が聞こえる。

ゆつくりと階段を登ってくる音が……

コッ コッ コッ。

私は置時計を見た。時刻は午前二時を少しまわったところ。

コッ コッ コッ コッ。

布団を頭からかぶる。心の中で助けを呼ぶ。

ガチャ ガチャ ピンポーン ガーン。

ドアノブをまわしている。

チャイムを鳴らしている。

ドアを叩いている

また、あいつが来た。

たくちゃんだ。

ガチャ ガチャ ピンポーン ガーン ガーン ガチャ ピンポ  
ーン ピンポーン。

出たくないよ。だって、たくちゃんは……

ピンポーン ガーン ピンポーン ガチャ ガチャ ピンポ  
ン ガーン。

事故で死んだから……

でも、いつまでも逃げてられない。きっと、拓ちゃんは自分が死んだ事しないんだ。

私が教えてあげないと……

私は布団から抜け出すと玄関のところまで行って、ドアについて覗き穴から外を確認した。

拓ちゃんはいない。

でも……

私と和泉拓人は小学四年の時から親友だった。

和泉のあだ名は拓ちゃん。

名前からとって拓ちゃんだ。

私達は京都の洛北ニュータウンというところに住んでいた。

拓ちゃんは小四のときから身長が高く170センチ近くあった。

体格がいいと子供のころは腕力をいかして、いじめっ子とかになりやすいが、拓ちゃんは、性格が穏やかでのんびりした雰囲気でクラスの人気者だった。

小学校のときは、近所の池や公園でみんなで釣りをしたり、ケイドロや戦争ごっこを、拓ちゃんを中心に遊んで楽しかったものだ。

そして私達の友情もいろんな遊びをしているうちに深まり、いつものまにか何でも悩み事を相談し合う仲になっていた。

しかし、私と拓ちゃんの楽しい日々は、中学を境にして一変した。高校にいくための受験戦争のおかげで……

拓ちゃんの両親は親父が高校の教師で母親が中学の教師をしていた。

そのため、両親は教育熱心で拓ちゃんになにかあるたびに、「やれ、勉強しろ。いい高校に入れ。友達を選べ」とか言っていたそう

だ。

そのストレスのために、拓ちゃんは優しい性格がかわって、私以外の同級生をいじめるようになり、どんどん不良化してしまっていた。

そのうちに、拓ちゃんは両親に暴力を振るうようになり、両親から避けられるようになっていった。

ある時、わたしは拓ちゃんの家遊びに行くと、小学校のときにキレイだった拓ちゃんの部屋は、壁中に穴がボコボコあいていて、テーブルの上には無造作にタバコとライターが投げ捨ててあった。私が何でこうなってるのと聞くと、拓ちゃんは、むしゃくしゃしたら、親父とか壁殴るんだ。

その後の一服はうまいぞと笑って言った。

そんな日々が続いていたが、時間はすぎさり高校受験も終わり、私が高校二年になったある日、家に拓ちゃんが訪ねてきた。

私は拓ちゃんに会うのはひさびさだった。

中学卒業後、私は受験に失敗して地元の公立高校に入学できず、仕方なく働きながら高校にいく道を選択した。

今では、私は親元を離れて実家の近くのアパートの二階に一人で住んでいた。

一方、不良だった拓ちゃんは頭のいい、親の血をひいているのか勉強もあまりしていなかったのに公立高校に合格していた。

そうしてお互いの進路が変わったため、以前のように遊ばなくなり二人の距離はあいていた為だ。

そんな折に拓ちゃんの突然の訪問。

拓ちゃんは私に会うなり泣きついてきた。

「どうしたんだよ？ 突然泣き出したりして、悩み事でもあるのか？」

「ああ、聞いてくれよ。 実はなあ、毎晩女の霊に悩まされてるんだよ」

「霊って？ お化けの事か？」

「そうだ、お化けのことだ。このままだとあの女にとり殺されてしまふよ」

「何かされるのか？」

「ああ。寝てたらクビ絞めてくるんだよ」

「え……マジかよ」

「ほんとだよ、俺の首みてくれよ、絞められた跡ついてるだろう」

私は拓ちゃんの首を確認した。

確かに拓ちゃんの首には絞められた様な青あざがついていた。

「でも、何でお前が首絞められるの？ なにかその女にしたのか？」

「俺は女には、なにもしてないよ。ただ叔母ちゃんに……」

拓ちゃんの話はこうだった。

拓ちゃんは中学から続いていた家庭内暴力が、高校にいつても止まず、遂には親父の歯を折ったり、骨折するぐらい強く殴ったりして警察沙汰になるぐらいエスカレートしていたそうだった。

それで、見かねた母親がどうしたものかと、親族に相談したらしい。

そしたら、母親の姉さんにあたる人がわたしが面倒みますといってくれたそうだった。

その姉さんは、大阪の高槻のマンションに一人で住んでいて、そこからだと拓ちゃんの通学も出来ると

言うことで話がまとまった。

いい加減、拓ちゃん自身も実家に嫌気がさしていたので、すぐに叔母さんの家に居候することにした。

叔母さんは、早くに夫を病気で亡くしていて、遺族年金と生命保険金で生活していた。

それから一カ月ほど一緒に生活してみて、拓ちゃんは叔母さんが、意外に金を持つてることをしった。

金に目をつけた拓ちゃんは、叔母さんに金の無心をするようにな

った。

「叔母さん、学校の教科書代まで払ってないんだ。体操着盗まれたので買わないといけないんだよ」とかいう風に……

でも、叔母さんもバカではないので、そのうち拓ちゃんに金をわたさなくなったそうだ。

そうになると今度は叔母さんに対しても暴力を振るって金を無心するようになった。

そんな、生活をしているうちに、女の霊が現れるようになった。

最初は寝ているときに金縛りに遭う程度だったが、そのうちにベッドの下から、誰かが上ってくるような感じになりだした。

叔母さんに対する暴力がエスカレートする度に、拓ちゃんの心霊体験もエスカレートしていったそうだ。

そうして、最近では女の霊が寝ていると、現れて首を絞める。

拓ちゃんは、叔母さんにそのことを言ってみた。

すると、叔母さんは女の霊のことを聞くと嬉しそうに拓ちゃんにいったそうだ。

「あの女を見たのね。私もここに、住みだしてから時々見るのよ。でも悪いことはしないわよ。だって私の肩とか揉んでくれるのよ」

「なに、言っただババア。何が肩もむだと　俺は毎晩首しめられるんだよ」

「きつと、あなたが叔母さんを苦しめるからそうなるのよ。あなたなんか、あの女にとり殺されたらいいのよ」と言っただそうだ。

それを、聞いてゾツとした拓ちゃんは、叔母さんを殴ってから、私の家に来たそうだ。

私も拓ちゃんの話聞いてゾツとしたが、バイトに行く時間がせまっていたので、拓ちゃんにアドバイスだけして帰ってもらった。

「拓ちゃん、叔母さんに暴力振るうのやめろ。それと嘘もつくな」

拓ちゃんは、うんうんと私にうなずくと、乗ってきた原付バイクに乗って帰っていた。



それから二週間ほどたったある日。

すっかり、拓ちゃんの話など忘れていた私は、そろそろ寝ようかと思いベットに就いていた。

時刻をみると午前二時を少しまわったところだった。

すると、ピンポンとチャイムが鳴り、ガンガンとドアを叩く音がした。

「誰だろうこんな時間に」と私は思い、玄関の覗き穴から相手を確認した。

そこには、悲痛な顔した拓ちゃんがドアをガンガン叩いていた。

「おい、いるんだろう。頼むから、中にいれてくれよ！ でないと、俺は今度こそ……」

私は正直ためらった。この前の拓ちゃんの話思い出したからだ。私の頭の中では、嫌な妄想がした。拓ちゃんの背中に女がへばりつき、拓ちゃんの首を絞めてるような気がする……

もう一度、恐る恐る覗き穴から外を確認した。

ドアの外には、拓ちゃんだけだった。

私はドアの鍵を開けると、拓ちゃんを家にいれた。

「どうしたんだよ、そんな青い顔して」

「また、あの女だ」

「首絞められたの？」

「うん、それで逃げてきた」

拓ちゃんは、でかい図体をしてブルブル震えていた。

「逃げる途中もなあ、俺がゲンチャリを運転していると、背中に乗っかって後ろから、ハンドルをつかんで、俺を事故らせようとしやがる」

拓ちゃんは涙目になりながら、私に訴えかけてくる。

「朝まで泊めてくれよ、朝になったら帰るからさあ」

「分かったよ、ここでいいなら、朝までいろよ」

「ありがとう、助かる」

そう言うと、拓ちゃんはタバコに火をつけた。

タバコを持つ手がブルブル震えていた。

「俺、悪いけど明日、早いから寝るなあ。拓ちゃんはそこのソファーにでも横になってくれよ」

「ああ、わかった。ありがとう」と拓ちゃんは言った。

そうして、私は床についた。

そして朝になった。

部屋には拓ちゃんはいなかった。

やっぱり、俺帰ると置手紙がしてあった。

なんだ、あんなに怖がっていたのにオカシイなと思ったが、それ以上考えずに、私はバイトにいった。

バイト後、学校に行ってアパートに帰ってきたら夜の九時になっていた。

何気に夕刊をみていたら、小さく事故の記事が載っていた。

「本日未明、国道で原付バイクにのった少年がダンプに巻き込まれて死亡。死亡したのは、公立高校に通う和泉拓人君十七歳」と書かれていた。

私はその記事を見てめまいがした。

その夜からずっと、午前二時を少しまわると、私のアパートに訪問者が現れた。

コツコツ ガチャガチャ ピンポン ガーン。

覗き穴から見ると誰もいない。

でも、私にはわかる。拓ちゃんに違いないと。そして今夜も……今、激しくドアを叩かれている。

早く拓ちゃんに事故で死んだ事を教えてやらないと……

拓ちゃんは成仏できないんだ。きっと……

私はドアについてる覗き穴から外を見た。

拓ちゃんはいない。

でも……

外には、ボロボロの白い服を着た女が、激しくドアを叩いている。顔半分は焼け爛れていて、口から血を流している。

ガーン ガーン ガーン。

白い顔をした女は、私が覗き穴を見ているのがわかるのか、私の視線に向かって、ニヤツとわらった。

そして、かすれた声で。

「おまえのお友達が、さびしがっているよ。一緒にあそびたいんだって……」

いやだ、いやだあ。死にたくないよ。

私は心の中で叫んでいた。

すると、さっきまでドアを叩く音がしていたのが、とまった。

覗き穴をもう一度見ると、女の姿は無かった。

私は少し安心して振り向くと、あの女が私の正面にたっていた。

女はケタケタ、笑っているように見えた。

そして、わたしの首を絞める。

かすれた声で「お前も死ぬんだよ」と聞こえた。

いやだ、死にたくないよ。拓ちゃん助けてよ、友達だろ。

遠ざかる意識、その時、頭の中で声がした。

聞き覚えのある声。

そう、拓ちゃんの声だ。

「わかった、助けてやるよ。そのかわり、墓参りぐらいしてくれよな」

頭の中の声をきいた後、首が急に楽になった。

女がいた場所を見ると、半透明の拓ちゃんが、女の髪の毛をつかんで、壁の中に消えていく姿が見えたような気がした。

そして、私は意識を無くして倒れた。

気がつくと、私は玄関の前で倒れていた。

時計を見ると、朝の八時になっていた。

あれは、一体なんだったんだろう。

わかつているのは、拓ちゃんが助けてくれた事。

そして、私は心の中でつぶやいた。

ありがとう。拓ちゃん

約束どおり、今度お前の好物をもって墓参りに行くからな。

## スピリチュアルカウンセリング

都内にあるテレビ局にて特番の収録が行われていた。

番組のタイトルは「オーラーの湧く泉」というもので、番組内容は霊能力があるといわれているスピリチュアルカウンセラーが、毎回、芸能人や一般視聴者の相談事を霊視して的確にアドバイスするというもの。

ここ最近の神秘・オカルトブームに乗って番組は高視聴率をたたき出していた。

スタジオ内は煌々とスモークが炊かれ神秘的な雰囲気をかもしだしている。

中央に豪華なソファーがおかれており、そこにゲストと二名のカウンセラーが対面に座り霊視が行われる。

今回は特番という事もあるが、是非カウンセリングしてほしいと応募してきた一般視聴者の計二名の霊視が行われる。

そして一人目の芸能人の霊視が始まった。

霊視される芸能人は中堅お笑いタレントで、いじめキャラと大げさなリアクションを売りにしていたが、このところ新人お笑いタレントに仕事をとられてテレビに出る機会が激減していた。

相談内容もこれからどうしたらもっと売れるかというものだった。カウンセラーはタレントの顔をしばらく観察して黙っている。

不安になったタレントはカウンセラーに質問した。

「あの立川先生 さっきから何もいってもらえないのですが……なにか私に悪いものでもみえるのでしょうか？」

立川と呼ばれた男はこの番組のメインのスピリチュアルカウンセラーで、いつも浴衣っぱい着物を着ていて、風貌は丸々と太っている。

喋り方も物腰が柔らかく深刻な話をしているときでも笑顔を絶やさず視聴者から好感をもたれていた。

立川は数多くのスピリチュアルの本を出版しているが、どれもベストセラーになっており、正にスピリチュアルブームの火付け役的な人物だった。

ようやく何かみえたのか立川は口を開いて話し出した。

「いやあ、出原さん、あなたのオーラーを今みていたのですが色が悪いんですよ。真っ黒なんですね。それとねあなたの後ろに泣いている女性の姿がみえますよ」

それを聞いていた人気もギャラも超一流の司会者が巧みな話術で出原をいじりだす。

「出原さん。ダメじゃないですか！ 女性が泣いてるって先生が言ってますよ。何か女性に悪い事でもしたんでしょう」

出原は得意のソファからのけぞってという大げさなリアクションをとって、

「え……まじっすかあ。やべえな俺」

と言っていていじられた事に対してまんざらでもない表情をしている。彼にとって不幸な事ほど芸の肥やしになるからだった。

「女性は生霊ですね、あなたに遊ばれて捨てられたと私に言ってますよ。その生霊がね、あなたの背中におおいかぶさってるんですよ。最近肩がよくこられるんじゃないですか？」

「はい、先生。確かに最近肩に張りがある感じで寒気とかするときもあるんですよ」

立川は「うんうん」とうなずくと傍らにいるもう一人のカウンセラーに声をかけた。

「四つ輪先生も出原さんのオーラー見えるんじゃないでしょうか」  
四つ輪は今までの話を聞いていなかったのか、突然立川にふられて慌てふためいた様子が見て取れた。

この四つ輪と呼ばれた人は歳は六十代だろうか？

年齢性別は不明である。おそらく男だとは思われるのだが、とにかく派手な胸元が大きく開いたドレスを身にまとい、長く伸びた頭髮は金髪に染めている。

経歴は元々シャンソン歌手だったのか、つい最近寝ているときに神のお告げを聞き、スピリチュアル能力に目覚めたのだそうだ。

そして立川と違って意味不明な言動と化け物的な風貌がいまっで、視聴者の興味をそそるキャラに仕上がっていた。

番組内では主に立川の助手的位置にあった。

「見えますわ。見えますともどす黒いオーラーが……邪悪な感じがしますわね」

四つ輪の意見を聞いて、立川は続けた。

「出原さん、最近仕事うまくいってないんじゃないですか？黒いオーラーはね、女性の恨みなんですよ。こんなのが張り付いていたんじゃない……とてもじゃないが仕事なんかうまくいく訳ないですよ。いいですか！心当たりのある女性にきつちりと謝罪しなさい。そうするときつとこれから仕事はうまくいきます」

そう立川は出原に諭すようにいった。

いつのまにか出原は何で泣いてるのか分からないが目に涙をうかべて、声をつませながら先生にお礼をいつていた。

「立川、四つ輪先生どうもありがとうございました。早速先生のおっしゃった事を実行いたします」

そうして一人目の霊視が終わった。

続いて司会者は応募で選ばれた一般視聴者の青年を呼んだ。

青年は歳は二十代だろうか端正な顔立ちをしていた。

さきほどの出原よりもよっぽどタレントらしかった。

しかし青年の顔には覇気がなかった。

ソファに座るときも緊張しているのか動きが何かきこちない。

早速立川が霊視を始めた。

立川は青年の顔をずっと見ていたが、困ったように首を傾げた。

「うーん。困りましたね。実は青年には何も感じないんですよ。こんな事は私にとって初めてです」

立川は助けを求めるように四つ輪の顔を見た。

「四つ輪先生は青年のオーラーを感じますか？」

四つ輪は待つてましたとばかりに、

「見えますわよ、青年からは真っ赤なオーラーが感じられます。立川先生どうなさったのかしら、きつとお疲れになつておられるのですね」と笑つて言つた。

四つ輪はチャンスだと思つた。立川が見れない青年のオーラーを私がしっかり霊視をすれば名前を売る絶好の機会だ。

四つ輪は青年に語りだした。

「真っ赤なオーラーはあまり良くない色よ。信号でもなんでも赤はだめでしょう！ それはね。あなたのご先祖様がたまにはお墓参りしてと訴えているのよ。だから近いうちにお墓参りなさってくださいね」

青年は四つ輪の目をじつと見つめて話を聞いていた。

そうして青年は四つ輪に悩み事をたどたどしい言葉でいった。

「先生、僕は感情がうまく表せなくて困つてるんです。みんなが悲しい映画とか見て泣いていても、僕にはなにが悲しいかわからないんですよ」

四つ輪は青年の悩みを聞いてしばらく考えてから言つた。

「そうでしょうとも、そうでしょうとも。やはりあなたに感情が無いのはご先祖様の要因がかなりあるわね。悪い事は言わないから早くお墓参りにいってさしあげなさい」

四つ輪はしてやつたりと云う表情をしていた。

青年がそのことを聞いて何か言おうとしたとき、司会者がさえぎつた。

どうやら番組の収録時間が終わつたようだった。

司会者がシメの言葉をいった。

「どうも、立川、四つ輪先生今日はありがとうございました。途中、立川先生が霊視できない事態におちいりましたが、見事四つ輪先生が力バーしてくだつて無事問題解決できましたね。視聴者のみなさんも如何でしたでしょうか？ きつと今回も心が癒されたことでは



よう。でわまたの機会にお会いしましょう」

番組の収録は終わった。

青年は不満げだったが、スタッフになだめられて帰っていった。

そして……

さきほど霊視をしてもらった青年は自宅の研究所に入っていた。  
青年の帰りを博士が心待ちにしていた。

そうして無事に帰って来た青年に博士が声をかける。

「どうだったかね」

「はい、博士すっかり網膜のカメラで録音してきましたので、どうぞご覧になってください」

博士は青年の髪の毛の中に隠れているスイッチを押した。

映し出される映像にはさきほどの霊視の様子が克明に流れた。

博士は一通り映し出された内容を確認すると

「なるほどな。立川という男は只者ではないかもしれない。四つ輪は話にならないなあ」と博士は独り言をいった。

そう博士の研究は本当に霊能力者がいるかずっと調査しているのだ。

そしてさきほどの青年は博士が作った精巧なアンドロイド。

アンドロイドだから先祖がいるわけもないし、感情の制御もままならない。

「立川という男、もしかしたら本物かもしれない。もう少し調査する必要があるな。さて今度はどんな志向をこらして調査してみようかな……」

## 嘘つき

俺の名前は森田透。元ホストだが、今は無職で日がな一日ギャンブルに明け暮れている。

自分でいうのもなんだが、俺は女によくもてて、非常にずる賢くて悪い男だと思う。今も隣で寝ている彼女の美咲の顔を見ながら悪巧みを考えている。美咲は一年ほど前に、俺が街でナンパして見つけた女で、その日のうちに肉体関係に発展してしまった。それ以降、俺は美咲のマンションに厄介になっている。いわゆる世間というところのヒモってやつである。

真面目に働く気のない俺にとっては、女神のような女なのだが、少々、俺自身、美咲に飽きてしまったのと、好きな女が出来たので正直邪魔に思えてきていた。それで、美咲と別れる前に俺はひと芝居して、美咲から金をふんどくってやるうとしている。そして、俺は猿芝居をするために深夜の二時に美咲の体をゆすって起こした。

「美咲、美咲い　ちよつと起きてくれよ」

「どうしたの？　透くん」

「うん……実は心配事があって寝れないんだよ！　このままだと俺は……死ぬしかないんだよ」

俺は、真実味を出す為に事前に目薬をさして涙を流す。そして、こめかみに手のひらをあてて、いかにも困ってますといわんばかりに頭をかかえる仕草をしてやった。

「いったい、どうしたのよ？」

突然、深夜に起こされて寝ばけまなこだった美咲だったが、俺の嘘泣きを信じて真剣な表情になっている。

（しめしめと俺は思った）

「実はさあ、俺、友人の保証人になっていて、そいつが逃げてしまつてね。それで借金が百万も出来てしまったんだよ！　それで、昨日怖いお兄さんに、責任とれって言われてしまつて……美咲、お金

貸してくれない？ でないと俺は……」

「透くん、そんな事、突然言われても私、お金そんなにもってないよ」

俺は、美咲が金を持ってないことなど、百も承知だった。なぜなら、いままで何度もいろいろな嘘については美咲から金を巻き上げていたからだ。無論、友人の保証人つても嘘であるが、借金があるのは本当である。借金の理由はパチンコで負けがこみすぎて、つい消費者ローンのカードに手を出した為である。

「うん、わかってるよ。美咲にお金が無いのは俺のせいだからな！でも、今回だけ助けてくれないか！」

俺は美咲に土下座して頼んでいた。

「でも、私、ホントにお金ないよ！」

俺は美咲に本題を切り出す。

「実はなあ、美咲にしか出来ない仕事があるんだよ！ でも少し、美咲にとっては辛い仕事かもしれないんだよ。もし、美咲が快くこの仕事してくれたら、美咲が前からいってる”俺達の将来、結婚”のこと考えようと思ってるんだ。この件が片付いたら、真面目に就職しようとも思ってる」

美咲は怪訝な表情をしていたが、”結婚”という言葉がでて一瞬、美咲の顔が輝いたのを俺は見逃さなかった。

（よし、いける）

「透くん、私にしか出来ない仕事って何よ？ 私、風俗とかで働くのは絶対嫌だからね！」

「うん、風俗とかじゃないんだけどね。グラビアの撮影して欲しいんだよ！ 知り合いにカメラマンがいてね、美咲の水着姿撮影したいんだって、短時間で済む仕事でけっこうギャラいいんだよ……ダメかな？」

「水着だけなら、やってもいいけど、ほんとにそれだけなの？」

「ほんとにほんと、水着で少しセクシーなポーズとってくれたらいいだけだし それに美咲可愛いからね」

「それだけだったたら、私やってあげるわ。そのかわり、”結婚”の話は裏切ったら許さないからね」

美咲はそういつて、優しい笑顔をうかべた。

（全くバカな女だ）

それから二日後に、俺と美咲は都内にある撮影スタジオに向かった。撮影スタジオといっても雑居ビルの一室を借り切っている粗末なものである。美咲は普段、商社で受付嬢をやっているが、今日は仕事場には、体の調子が悪いと言つて休暇をとらせている。

スタジオに行くまでの間、美咲は俺の右腕に左腕を絡ませてきて、ずいぶんとご機嫌な様子である。歩きながら美咲は、私、綺麗に撮つてもらえるかしらとか、撮影のために脱毛したとか、嬉しそうに声はずませて俺に話した。

スタジオに着くと、プロデューサー兼監督の男が俺に撮影の確認をしてきた。美咲は別室で水着に着替えにいつてこの場にはいない。「お兄いさーん、ずいぶん可愛い子じゃないか！ほんとにいいの？うちのDVDはかなり過激だよ！その分、ギャラは半日で百万払うけどね。あとで、あの子から訴えられても責任とらないからね、といつても、うちのDVDは無修正だから、それ事体違法なんだけどね！あとね、うちのは、生でいくのと、中でだすから、事前に女の子に薬飲んでもらつておいて、あんたも、妊娠されたら困るでしょ！あと男優さんね、一応HIV検査してるから、安心だけど、黒人なんで、そのところよろしく」

監督は早口で、そう言う俺にピルを渡した。俺は美咲に薬を飲ませる気など、さらさら無かったので、ジーパンのポケットに薬をねじ込んだ。

「監督ギャラの方は……いつ？ いただけますか！」

「そんなもの、撮影が終わってからだよ！途中で女の子に逃げられたら困るでしょう、そんな事この業界では常識だよ」

監督は少し馬鹿にした笑いをうかべて言った。

「撮影が終わるまで、あんたも一緒に撮影見学してたらいいよ！  
その方が女の子も嫌がっていい表情とれるからね」

俺も悪い男だが、この男も相当な悪だと俺は思った。

監督との話が終わるかいなかの時、美咲が泣きながら、水着姿で現れた。

美咲が泣いてる理由は水着姿を見てすぐに理解できた。その水着、いや水着といっているのかわからない。とにかく、その水着らしきものは透けているのだ。美咲の乳首もアンダーヘヤーもうつすらと確認できた。

監督はイヤラシイ目つきで美咲の体を舐めるように見ると、  
「いいねえ〜いいよ、実にいい」

と使いもしないメガホンを片手で叩きながら言った。

美咲は、目に涙を浮かべてイヤイヤと首を横に振っていた。

「私、こんなのだったら帰ります」

「頼むよ！ 美咲この場になって駄々をこねないでくれよ」

「だってこんな格好するって話じゃ、ないでしょう」

監督は俺達の会話を聞いて、

「どうするのよ？」

とニヤニヤ笑いながら言ってきた。恐らく監督にとっては、男女の修羅場のやりとりなど何度も目撃してることであって、最終的にどうなるってこともわかっていているのだと俺は監督の笑みを感じた。

気づけば、俺は美咲のほっぺたに平手うちをしていた。

「今更、ぐだぐだ言ってるなよ。監督こいつの事は気にせず、撮影をお願いします」

監督は、やはりこうなるのだと予見していたかのように満足そうに俺の目を見た。

美咲の方は、俺に暴力を振るわれた事がショックだったのか、おとなしく監督に手をとられて撮影部屋に入ってしまった。部屋の中には、カメラマンと黒人の男優が美咲を待っていた。部屋の中は簡易

ベットがおかれていて、照明によって明るくてらされている。

そして、監督の合図によって撮影が始まった。俺は監督の横に座って美咲と黒人のセックスを見学した。

撮影まもなくにして、美咲の嫌がる叫び声が室内に響きわたる。

「いやあ、いやあ、やめてえ！」

それは、まぎれもないレイプであつた。小柄な美咲は、大柄な黒人にいろいろな体位でもて遊ばれていた。

黒人の分身はかなり巨大であつて、もちあげられた美咲の体に突き刺さっているように見える。俺は興奮して美咲と黒人のセックスを観察していたのだが、ときおり美咲とは目が合った。

「痛、痛いよ、透くん、助けてよ！」

美咲は俺と目が合うたびに哀願して助けを求めた。

嫌がれば嫌がるほど、監督は満足そうな表情を浮かべていて、カメラマンにすっかり苦悶の表情を撮らせている。そうして、二時間ほどたつぷりもて遊ばれた美咲は、体内に大量の黒人の種を注入されると、監督の合図によって撮影は終わった。

美咲は、撮影が終わってから、監督にプライベートでセックスを強要されスタジオを後にするころには、どつぷりと日もくれてしまい、スタジオの行く前の明るかった美咲とは嘘のように美咲の心の陽も消えてしまったように俺には思えた。

美咲は、あまりのショックの為か、スタジオをでてからというものの放心状態になっており、ぶつぶつ小声で何かをつぶやいていた。俺はというと、手にした百万が嬉しくて舞いあがっていた。

それは、美咲との別れを意味する百万でもあつたのだが、俺は早く、新しく出来た彼女のマンションに行きたい気持ちでいっぱいであつた。

美咲のマンションに着くと、俺は、新しい彼女のマンションに行くための口実を考えていた。美咲はさっきからボォと、天井のしみを見ていた。

「美咲い、俺ちよつと出てくるわあ」

俺はこの陰気なマンションから出て行く口実をきりだした。俺の声を聞いて、さっきまでうわの空だった美咲が目をむいて言った。「いやあ、一人にしないで。私一人になったらオカシクなっちゃうよ　お願いだから一人にしないで」

「困ったなあ、早く借金返しに行こうと思うんだよ。すぐに帰ってくるって」

俺は、玄関に行くとき急いで革靴を履こうとしていた。

美咲は俺の後ろに立って小声で言った。

「嘘つき、嘘つき。嘘つきい」

俺は美咲の嘘つきの一言でカチンときた。

「あ？　誰が嘘つきだって。てめえーはよお、黙って待ってたらいいんだよ！」

俺が後ろを向いて、美咲の顔を見ていたら、美咲は物凄い怖い形相で今度は大声で叫んだ。

「嘘つきい」

（チエ、全く、うざい女だ）

俺は、このままだと、また暴力を振るってしまいそうなので早くでていこうと思い、玄関のドアノブに手をかけようとした時、美咲に腕をつかまれた。

「お願い……いかないで！」

美咲は興奮しているのか、爪を立てて腕をつかむ。

「おーい、やめろって！　痛いじゃないかよ！」

俺はそういつて無理に美咲の手を振りほどいて、マンションからでていった。無理に手を振りほどいた為、腕に激痛が走った。美咲が掴んでいた腕を見ると、美咲の割れた爪が腕に食い込んでいた。

（あのやろつ。痛いじゃないかよ！）

美咲のマンションから飛び出した俺は、新しい彼女に携帯電話で連絡をした。

「もしもし、香織。今からそっちについていい？」

「うん。待ってるね」

新しい彼女は香織といって、学生ではあるが、親が医者をしているため裕福である。

俺はタクシーをつかまえると、香織のマンションの場所を運転手につけて香織のマンションにむかった。

タクシーにのってる間、俺の携帯電話はうるさく何度もなっている。かけてきてるのは、もちろん美咲である。俺は五月蠅いので携帯の電源を切った。もう、俺は美咲に会うつもりは無い。あのように汚れた女には、もう興味はないからだ。

香織のマンションに着いた俺は、今日からここにお世話になりますと言って、香織の体にむしゃぶりついた。昼間、美咲と黒人の激しいセックスを目撃していただけあって、俺はずいぶん興奮して香織とハッスルした。気が付くと眠ってしまったらしく昼過ぎになっ  
ていて、香織は大学にいったのか、マンションには誰もいなかった。さて、今から何しようか？ 俺は香織とのセックスの余韻に浸りながらタバコに火をつけて一服する。

そして、携帯の電源を入れると、いきなり着信音が鳴った。

（ちえ、またあの女だ）

ひつこいので、電話にでることに俺はした。

「もしもし、透くん。今どこにいるの？ 私、あなたの事が心配で昨日寝ないですと待っていたのよ」

「ああごめん、ごめん。今、新しい彼女のところにいるんだよ。いきなりで悪いんだけどさあ、俺達もう終わりにしないか。はつきり言って、お前には、もう飽きたんだよね。それにお前、昨日黒人と楽しくやってたし、俺もう、ひいちゃってさあ。前みたいにもう愛せないよ。だから、もう電話とか、かけないでくれるかなあ はつきり言っ  
てうざいんだよね」

「……ひどい……結婚してくれるって言ったじゃないのよ！」



「え、俺そんな事いったけえ？」

「嘘つきい、嘘つきい。恨んでやる！ 呪ってやる！」

そして、電話は切れた。

それから、一ヶ月ほど俺の携帯には美咲からの恨みや呪いの言葉が入った留守電やメールがひっきりなしに入ってきていたが、三ヶ月ほど経ったところには、美咲も諦めたのか、連絡してこなくなっていた。

俺は、相変わらず香織のマンションにずっと居候していて、香織のいるときはセックス。いない時はパチンコにいそしんでいた。

そんな、ある日、見慣れない番号から携帯に着信が入った。すぐに、電話をとった俺だったが、相手は美咲だった。

「もしもし、あなたに報告したい事があって、電話したのだけど…

…」

「いつたい、なんのようなんだよ！」

俺は冷たくそう言ってやった。

「実はね、私、あなたの子供身ごもったみたいなのよ。透くん、パパになるのよ！」

「何いつてるんだ！ 子供なんか出来るわけないだろう。どうせ、お前の腹の中にいる子供は、あの時の……どっちにしても、今だったら間にあうから病院いって堕ろせて！」

すると、美咲はようやく俺の本性に気づいたのか！ 声のトーンが変わっておちついた口調で話した。

「やつぱり、あなたってひどい男ですね。わかったわ、金輪際、あなたには連絡とりません。でも、一度だけ私のマンションに来てもらえませんか？ いつでもいいので あなたの忘れ物の洋服とかあつて困ってるのよね。それに、渡したいものもあるし……」

「ああ、わかったよ、俺もお前のマンションの合鍵持ってるし、返さないと思うていたんだよ、明日でいいか？ そうだなあ、明日の二時ごろそっちにいくよ」

「じゃ、明日の二時ね。待ってるわ」

電話を切った俺は邪魔くさい用事が出来たと思ったが、渡したいものがあるという美咲の言葉も気になったし、合鍵も返さないといけないので諦めることにして、その日はパチンコに行った。

次の日になって、約束の時間に、俺は美咲のマンションを訪ねた。しかし、チャイムを鳴らしても美咲はでてこなかった。仕方が無いので、俺は合鍵を使ってドアを開けた。開けた途端に、部屋の中から、物凄い異臭がした。その臭いの源は、浴室からでているみたいで、俺は浴室のドアを開けた。

浴室のバスタブの中に美咲は居た。バスタブの中の美咲は笑顔で、首を剃刀で深く切って絶命していた。

浴室の中には無数の蠅と、うじ虫が湧いていて、美咲の腐乱した体を食い物にしている。俺は思わず、匂いと初めて見た自殺死体のために、その場で吐いてしまった。そして、俺はすぐに警察に電話した。警察がくるまでの間に、俺は居間に行って匂いと戦いながら、気持ちをおちつかせる為にタバコに火をつけた。

灰皿の置いてある居間のテーブルの上には、美咲の遺書というベキか、俺への恨み事と呪いの文面が血文字で書かれていた。

「恐らく、この手紙を読んでるあなたは、さぞかし青くなってることでしょうね。私はあなたに、おもちゃにされて、ゴミのように扱われたことは、決して許さない！ 死んであなたにつきまといてやる。呪って、呪って、呪ってやる、ウフフ。後悔しても遅いから、あなたも私と同じように、死ぬのです。死、死、死、死、死」

俺はこんな物、警察に見つかったらあらぬ疑いをかけられかねないので、くちやくちやにちぎって、便所に流してやった。それから数分後に警察がやってきて、美咲の死体を手際よく片付けていった。俺は、第一発見者ということで、警察署にいつて軽く取り調べをされたが、明らかに自殺ということなのですぐに返してもらえた。

警察の話によると、美咲の腐乱した状態から見て、死後十日ぐらいだそうだ。

しかし……昨日の電話はいったい誰？ あれは、確かに忘れもしない美咲の声だった。俺はそのことを考えると悪寒が走った。

警察署からの帰り道をとぼとぼと、そんな事を考えていたら、携帯電話が鳴った。

電話をかけてきてるのは、香織からだ。俺は急いで電話をとった。

「もしもし、香織」

「……」

返事がしない、「ツウー」という通話音だけが鳴っている。

しばらく、沈黙が続いた後、聞きなれた声が聞こえてきた。

「嘘つきい、嘘つきい、呪ってやるう死んでしまえ」

「うわぁ」

俺はあまりの恐怖の為に携帯電話を地面に落とす。

電話の声は自殺して死んだはずの美咲である。

（ありえない！ありえないよ！）

落ちた携帯電話を拾おうとしたら、地面からまた美咲の声が……

「コロシテやるう……」

俺は足で携帯電話を踏み潰すと走って香織のマンションに向かった。

（きつと疲れているんだ、そう疲れているだけなんだ！）

マンションに着いた俺は、香織のマンションのドアを勢いよく開けてリビングに飛び込んだ。

でも、リビングに居たのは香織ではなく、美咲だった。

「あなたぁ、お帰りなさい。見て見て、私のお腹、こんなに大きくなってるのよ、ウフフ。きつと透くんに似て元気な赤ちゃんが産まれるはずよ、ウフフ」

俺はキッチンに行くと包丁を手にとった。

「あらぁ、パパったら身重の私に気づかって料理してくださるのね。なんて優しいパパなんでしょうね」

美咲はそう言って大きくなったお腹をさすりながら、じりじりと

俺ににじり寄ってくる。

「うおお、やめてくれよ。近寄ってくんないよ！」

俺は、近寄ってくる美咲のお腹に向かって、恐怖のあまり包丁を突き刺した。

「なんでえ、透くん……」

そこには、ずっぷりとお腹に包丁が突き刺さった香織が立っていた。

香織の口からは、真っ赤な血がでている。

そして、どこからともなく、美咲の声が聞こえてきた。

「ざまあゝ見る！　ウッフ、嘘つきい。透くんが悪いのよ！　ウッフ」

俺はこの場所から一刻も早く逃げ出したかったので、マンションから飛び出した。

耳からは、美咲の声がずっと聞こえる。

「嘘つきい、嘘つきい」

「うわああ。俺が悪かったよ　許してくれよ」

声から逃げるように、俺は道路に走って飛び出した。

前方から、激しく、クラクションを鳴らす音が聞こえていた。

気がつくと、俺は病院のベッドで目覚めた。看護師の話によると、大型トラックにはねられて病院にかつぎこまれたのだそうだ。奇跡的に命は助かった。でも、命が助かった代償は大きく、俺の両足は綺麗になくなっていた。

そして、意識を取り戻してしばらくすると、また聞き覚えのある声が聞こえてきた。

そう、美咲の声だ。

美咲は俺にこう言った。

「簡単には、透くんは殺さないわよ！　もっと苦しんでから、ゆっくりと、私が……」

## 仕事人

私は都内にあるパチンコ店の店長をしている。

店長といっても雇われだから、決して世間が思ってるほど収入が良いわけでもない。

店の売り上げによつて給料が変わるいわゆる歩合制だ。

金持ちの在日オーナーからは「売り上げをあげる」と会うたびに言われる。

そしてもつと「頭を使え」とも言われる。

雇われだから文句も言えない。

店の方の儲けは赤字ではないが、ここ三ヶ月ほど横ばい状態で伸び悩んでいた。

原因は複数あった。

メーカーから矢継ぎ早に投入される新台、アルバイトの高騰する人件費、派手な店のネオンに使われる電気代に、客を寄せるための広告費等。数えだしたらきりがなが……

そのうちの最大の原因が半年前に導入したホルコンシステムの設備投資のためだった。

今では大型店ならどこでもいれている。

私の店のホルコンシステムとは、店にある全ての遊戯台をパソコンで管理できる優れたものである。

台の当たり回数、大当たりまでに客が要したいいわゆる“はまり”回転数、

客が使った金等が瞬時にパソコンのモニターでグラフ化されて一目瞭然である。

それと……

オーナーが導入したホルコンシステムにはもう一つの顔があった。それは、違法なのでオーナーと私しか知らない秘密であるが、大当たり数を自由にコントロールすることが出来るのである。

普通、パチンコをしたことがある人なら分かるだろうが、台に付いているスタートチャッカーに球が入ると台の内部コンピューターが当たるか外れかの抽選を行う。

これを完全確率抽選方式という。

私の店においている機種はだいたい300〜500分の1の確率である。その確率を毎回、玉がスタートチャッカーに入るたびに抽選するのである。

だから、客の方は少しでも抽選をする試行回数をあげるためスタートチャッカーに、釘の甘い入りやすい台を探して遊戯する。

私の店の釘調整は千円あたり22〜25といったところだった。例えば大当たり確率が300分の1の台で1000円当たり25回まわる台があったとしたら、300回試行するのにかかる金は12000円かかる計算になる。

そして仮に12000円使って大当たりしたとして客が換金した場合、私の店では6000円といったところである。普通ならば、12000円使って6000円しか返ってこなかったら誰も貴重な時間を使ってまでパチンコなんかしないだろうが、そこは完全確率抽選方式、1回転で大当たりすることもある。

逆に1000回転抽選しても当たらないこともままある。

パチンコ台の方は客に抽選している時、少しでも飽きさせないようにと、様々な光と映像を使って台を演出させる。

そうして客は数時間で数万円負けるリスクを背負ってるのにかかわらず、数十万儲かるんじゃないかと自分の強運と淡い夢を見て、毎日せっせと完全確立を信じて、私の店にアホ面をさげて来店してくれる。

しかし、客の方も馬鹿ではない。いつも負けてばかりだと、さすがに来なくなる。

そこで役に立つのがホルコンの闇の顔”遠隔操作”であった。

あとは、店長のいかに客を飛ばさず、客から金を巻き上げるといふ生かさず殺さずという事を”遠隔操作”によって演出してやる私

の腕にかかっていた。

そうして私は今日も朝から店のあちこちに設置されている監視カメラを見ながら、パソコンモニターの前に座りせつせと遠隔操作に励んでいた。

今日は多大な広告をはったイベントの日だった。目玉は最近躍進してきているメーカーが満を持して投入してきた時代劇をモチーフにした台である。台の名前は必殺！剣客仕事人、世の中に蔓延る悪を依頼人の金によって成敗するというもの。メーカーがテレビのCMをガンガン流してくれているので、お馴染みの方も多いことだろう。一台あたり30万円もする代物である。それを50台メーカーから買っていた。

もちろん私はこの台に関しては派手に出す気はなかった。

人気機種は最初は放っておいても客つきがいいからだ。

ある程度客には、はまってもらって膨大な設備投資にかかった金を回収しないといけない。

しかし、全台洪ちゃんにしてしまうとさすがに客が飛んでしまつては困るので、10台ほどは派手に出すよう設定してやった。操作は簡単。パソコンモニターにある大当たりと書かれているボタンを押せばいいだけだ。あとは回数を押せばその分だけ大当たりする。

私は店が出してるように見せるため目立つ場所の台を中心に大当たりを演出してやった。目立つ場所とは、店の入り口付近の台だ。入り口付近にドル箱が山積みしていたら、欲にかられた客は「出している」と錯覚する。それ以外の台は全てはまり台だ。

私が大当たりを演出している以外の台は、ほとんどが午前中だけで1000回以上はまっていた。

あまり当たりがこないと客に怪しまれてしまうので、はまってる台は頃合を見て、スイッチをいれてやるが、連荘はしない。このへの駆け引きが腕の見せ所である。

しかし、この台さすがメーカーの営業が言っただけあって、

いくら客が負けてもひっきりなしに台は埋まり空き台がない。午後五時になってあっさり和本日の売り上げがでてしまった。

パチンコの台の売り上げとは……1台あたり3万円利益がでたら御の字である。

売り上げがあがったので、私はここから自分の嗜好によって当たりを演出することにした。

この遠隔装置はじつにすばらしく面白い。

私の大当たりをさせてやる基準とは……まずは、一見の客。

最初勝たせてやって、味をしめてまた来るように常連客にしてから回収してやる。

その次が女性客。私自身の好みの女だったら勝たせてやる。

おばはんにも適度にだしてやる。おばはんは、昼間の貴重な収益元だからだ。

あとは私のその時の気分だったが、常連客にはほとんど勝たせないでいた。

私は防犯用と銘うった監視カメラの映像を見ながら客はほんと「馬鹿だな」と思っていた。

私の演出とは露知れず、台にどっぷりはまり、一喜一憂している客を見ているとほんとにおもしろい。

「あの店は女性だとよくでるぞ」と噂になれば、女装してくる変装バレバレのおっさんがいた。

その時はさすがに度肝を抜かれておもしろかったので派手に勝たせてやった。

私は腹を抱えて大笑いしたものだっただ。

そして、今も興味深い客を偶然カメラで見つけた。

それは、はまっている台が二台空きが出たときに起こった。

若い青年は台が空くのをずっと待っていたのか、台が空くと二台ともにタバコと携帯電話を置いて場所取りをしてから、どこかにい



った。

しばらくしてから、青年が、激しく腰の曲がった杖をついたよぼよぼのおばあちゃんの手をひいて戻ってきた。その青年と、おばあちゃんは始めて見る顔だった。

そうして台の1台におばあちゃんを座らせると、青年は、おばあちゃんに遊び方を説明してやってるようだった。

それから青年は自分の財布から1万円をだすとおばあちゃんの台に入れてやった。

青年も自分の台にいつて遊戯しだした。

初顔なのでスイッチ入れてやるうかと思ったとき、青年の台が当たり前した。

そうすると、青年はおばあちゃんのところに行つて台を代わつてやった。

私は感動した。「なんてえ、おばあちゃん孝行な青年なんだ！」

おばあちゃんはシワクチャな顔をくしゃくしゃさせて大喜びしていた。

私も人の子であるからして、こうゆう孝行青年には大いに勝たせてやることにした。

時間を見ると午後7時を少しまわったところ、閉店まで残りあと4時間弱、

そうして、私は二人に閉店まで続く大当たりをプレゼントしてやった。

瞬くまに積み上げられていくドル箱……

閉店10分前には二人とも20連荘していた。

恐らく換金したら二人とも10万にはなるだろう。

私は二人の喜んだ様子を間近で見たいためホール内にむかった。

時々店内に顔をだすのも店長の務めである。

アルバイトに閉店準備の指示を与えると、さすがに客がまばらになった人気看板台のしまにいった。そして、ありえない連荘に歓喜している二人のところに行つて声をかけた。

「いやあ、凄い連荘でしたね。私も長くこの仕事してますがこんなに出たのひさしぶりですよ！」

と笑みを浮かべて言った。

おばあーちゃんはシワクチャの笑顔で

「長く生きていてほんとによかった、よかった」

と、もげるのではないかと思うぐらい首をうんうん振っている。

「もうじき閉店になるので、換金してお気をつけてお帰りくださいませ」

アルバイトに玉をジェットカウンターに流すように指示すると、

私は頭を下げて二人のもとを後にした。

私は「良い事したなあ」と自己満足していた。

そうして二人は店に入ってきたときと同じように、青年が手をひいて店外にある換金所にむかっていった。

あれだけの換金、おいはぎに遭われては心配になったので、

普段では絶対にしないが、駐車場の車の陰に隠れて二人の様子を観察した。

換金を終えて駐車場に向かっている二人……

しかし、私は見ないでいいものを見てしまった！

あろうことか、さっきまで腰の曲がったヨボヨボのおばあーちゃんが一瞬にして背筋がピンと伸び、勝った喜びのあまりか、スキップしてるではないか！

そして青年がおばあーちゃんの顔に手をやると、バリバリと顔の皮膚を剥がしていた。

現れたもう一人の青年。

そう、おばあーちゃんは特殊メイクされていたのだ！

そうして聞こえてくる二人の会話

「うまくいったなあ、やっぱりあの店遠隔だったな」

「ああ、バカな店だぜ！ 噂どおり遠隔ばりばりだな」

私はすっかりやられてしまった。

正に彼等は…… 仕事人だった。

早々に二人は車に乗り込むと夜のとばりに消えていった。

それから三ヶ月後……

店に警察の捜査が入った。容疑は風俗営業法違反、違法な遠隔操作がばれた瞬間だった。

押収されたホルコンから全てが明るみに出た。店はそれから間もなくして潰れ、

私は無職になった。そして、私は生活していくためパチンコ店に客として来ている。

あきらかに、バレバレな女装をして……

## 凄腕ハンター

深い森の中を、男は黙々と歩きつづけていた。

もう、どれくらい歩き続けたらだろうか。

背中に担いだ猟銃が重く感じられ、男は、少し休憩しようと思った。

そう、男の職業はハンターである。動物を狩って、その皮を加工したり、その肉を売りさばいたりして、生計を立てている。

ハンターは、町では、かなり有名な存在だった。それは、ハンターが狩ってくる獲物が、かなり大物だからだった。また、ハンターが加工する皮細工も、質がよく美しい為に町では高値で売買されている。

ハンターの顔には、大きな古傷があった。この傷は、20年前に熊と格闘した時に出来たもので、熊の前足がかすった時に出来たものである。

前足の一撃が直撃だったら、即死だっただろうと、20年たったいまでも、時々、思い出すことがあった。

しかし、命が助かった代償は大きく、ハンターの左目の視力を完全に奪っていた。

左目を失ってからというもの、それまで、明るかったハンターの性格は一変した。

獲物の売買の時以外は、極力人目を避けるようになり、また獲物に対する情けも無くしていった。

以前なら子ずれの獲物は絶対に狩らなかったが、今は違った。親子の獲物であろうと、怪我をしている獲物でも、容赦なく、ハンターの猟銃は火をふいた。

また、自分の気分がむしゃくしゃすると、猟銃を片手に森にいき獲物を狩りまくった。

そういった訳でハンターの狩りは変わってきていた。

一撃では獲物を狩らないのだ。わざと急所をはずして、獲物が苦しんでいるのを確認してから、とどめを刺す。獲物を狩っているときはハンターは凄く興奮する。特に獲物にとどめを刺す時に快感を覚えた。

獲物にとどめを刺す時は、獲物の至近距離まで近づき、獲物の目をみる。

獲物は、早く殺してくれと、ハンターに哀願する。

その瞬間がたまらなく好きだった。この、獲物の生命をハンターが握っている。

それは自分が神になっている錯覚を覚えるからだ。

（そう、俺は神なんだ）

ハンターは切り株に、腰をかけると、タバコに火をつけ物思いにふけた。

……ハンターは、先日起こった出来事を、思い出していた。

その日は、朝から、雨が降っており、左顔の古傷が痛み、ハンターはイライラしていた。

しばらくすると、ハンターの小屋に男が訪ねてきた。

「あの、すいません、少し雨やどりさせてもらえませんか」

男は少しハンターの顔を見て驚いたが、笑顔で話しかけてきた。

「いいですよ、どうぞお入りなさい」

「いやぁ助かりました。実はわたくし、行商をしております、町にいく途中、道に迷ってしましまして、途方にくれてしまつてるところ、この小屋をみつけた次第です。ほんと、助かりました」

男はそう言うときとペコツと頭を下げた。さすが、行商だけあって、腰が低い。

「そうかい、それなら、雨が止むまで、ここで休んでいくといいよ」とハンターは無愛想に言った。

それから、男は雨が止む間、ハンターが聞いてもいないのに身の上を得意げに話し出した。

男の話によると、男には、身寄りがなく、行商で各地を転々とし

て、生計を立てているということだった。

雨がやんで、男がハンターに礼をいって小屋からでていこうとする時、ハンターにドス黒い感情が湧きあがってきた。

この男を狩りたい。ハンターの中の悪魔が囁く。

「お前は神なんだろう、やっちまいなよ！ こいつには身寄りがないんだ。ぶっ殺したところで、誰にもばれやしないよ」

ハンターは男に言った。

「50数えてやるから、ここから、走って逃げろ」

男は、ハンターが何をいつているか、最初意味がわからなかったが、ハンターが猟銃をかかえて銃口を頭に向けているのを見て、自分がおかれてる状況に気づくまで、そう時間はかからなかった。「さあ、もう時間がないぞ。あと30しか時間が残ってない 早く走れ」

男は持っていた荷物を小屋に捨てて、全速力で小屋から飛び出した。

（そう。それで、いいんだ。 遠くまで逃げろ！ 早く捕まったら、この俺様が楽しめないからな）

ハンターは残りの時間を数え終わると、ゆっくりと小屋のそばにでた。

あたりを見渡すと、男の姿はどこにも見当たらない。

しかし、さきほどの雨によって、地面がぬかるんでいたために男の足跡がくつきり残っており、男の後を追うのは、ハンターにとっては容易だった。

男はどれくらい、走っただろうか、走り疲れてくさむらに、身を隠した。

男の心臓は全速力で走ってきたのと、恐怖のためにバクバク鼓動していた。

その音がハンターに聞こえるのでは、ないかと思い心臓に手をあてたが、一向におさまらず、さらに激しく鼓動した。

男は、くさむらの隙間からハンターの気配がないか、窺う為に首をだした。

そのときである、男の頭部に激しい痛みが走った。

男は、あわてて顔を、あげると、そこには仁王立ちになったハンターの姿があった。

ハンターは冷笑を浮かべながら、男にいった。

「馬鹿な奴だな。逃げる時はな……止まったらいけないんだよ」

四つん這いになってハンターの顔を見ている男の額に銃口をつきつけた。

「待ってくれよ。いったい、おいらが、あんたに何をしたんだっていうんだ」

「ああ。あんたは何もしてないさ。たまたま、そこにいただけさ」  
そういつて、ハンターは引き金を引いた。

耳をつんざく銃声の後、男の頭部は吹き飛んだ。

「まるで、豚のようだったな」

男の死骸をみながら、ハンターは、はきすてるようにいった。ハンターが人としての一線を超え、神では無く悪魔になった瞬間だった。

気づくと、ハンターはタバコに火をつけたまま眠ってしまったようだ。タバコの灰が切り株の横に落ちている。

深い森は、すっかり暗くなってしまう、どうやら夕暮れ時になったようだ。

ハンターは今日は狩りをあきらめて小屋に帰ることにした。

ハンターは来た道を引き返すことにした。ハンターは、来たときと森の様子が違う感じがした。何が違うか、最初わからなかったが、どうも、誰かにつけられてる感じがする。

しかし、森の中に、人の気配はない。

それから、一時間ほど重い足取りで、来た道に戻ってきたが、やはり、何者かにつけられてる感じがする。しかも、さきほどより

も、強力な重圧を体じゅうに感じる。もう、深い森はすっかり暗くなってしまう、明かりなしでは前が見えにくくなってきた。ハンターは、歩きながら、自問自答してみた。

（何を、俺は恐れてるんだあ。俺は神じゃないかあ、武器だっていつでも使える。びびってんじゃないぞ）

そのときである。

さっきまでは、気づかなかったが、ハンターの周りに3つの光る玉が飛んでいる。

（なんなんだ、こいつは？）

ハンターは光る玉の一つをつかんでみる。

感触は非常に硬い。

何かの金属のようだ。ハンターは、その玉を潰そうと手のひらを握って見たが、光の玉は手の甲から、透き通って出てくる、まるでマジックのようだ。

（こいつ、虫じゃないのか？）

ハンターは、何度も、光の玉を潰そうと手を握って見たが、いずれも、光の玉は手の甲から、透き通ってでてきた。

そのときである。

空が昼間のようにぱつと、明るくなった。

まるで、カメラのフラッシュがたかれたように眩しい。皮膚も、じりじり、焼かれてるような感じだった。

ハンターが空を見上げると、巨大な球状の物体が浮かんでいるのが、眩しい光の中から、かろうじて、見てとれた。

（あれは、いったい何だ？）

見ている内に、球状部分の真ん中から、光の帯みたいな物が空中から地上に向かっておりてくる。その帯の内側を人がおりてくるのが見えた。

降りてくると、いっても、階段らしきものはなにもないのだが……ハンターはその人らしきものに向かって、銃口を向けた。

しかし、人だと思って銃口を向けた相手は、姿、形こそは人に似



ているものの、頭は卵型で異様に大きく、髪の毛がなく、また鼻もなかった。

そして、体も頭に比べて非常に細く、手足だけが、異様に長い。体中に、触覚みたいなものも、無数についていた。

（この化け物め！ ぶっ殺してやる）

ハンターは、人らしき者にむかつて、引き金をひいた。

直撃だと思った瞬間、なぜか弾は横にそれる。

もう一発、撃ってみる。

さっきと同じように、弾は横にそれた。

（どうしてなんだ。なぜ、あたらない）

そう思ったとき、ハンターの頭の中で声が聞こえてきた。

「ムダナコトハ、ヤメロ、ニンゲンヨ オマエハ カミダト オモ  
ツ テイルヨウダガ ホントウノ カミハ ワレワレダ ナゼナラ  
ニンゲンヲ ツクツタノモ ハルカ ムカシニ ワレワレノ ソセ  
ンガ カチクヨウニ ツクツタ ジッケンヨウ ドウブツダカラダ  
ダカラ

ワタシモ オマエヲ ショクリヨウト シテ オマエヲ カル デ  
モ アンシンシロ ワタシ  
ハ ワレワレノ ホシデワ 凄腕ハンター トシテ ナガ トオツ  
テイルカラ イタミガナイ  
ヨウニ コロシテヤロウ」

そう言うとき 凄腕ハンターと名乗った者は手からビームを出した。

ビームの光線はハンターの目前で蜘蛛のネットのように、広がり彼の体を包んだ。

一瞬のうちに、ハンターの体は、肉片とかして、バラバラになってしまった。

流石に凄腕ハンターと名乗っただけのことはあった。なぜなら人間のハンターに悲鳴をあげさせる事もなく、狩ってしまったのだから……

## デジャブ

僕は時々記憶がなくなる事がある。

医者にいったがどこも異常ないといわれた。

僕は今、彼女と山道を小雨が降りしきる中ドライブしている。

彼女といっても、さっき街で知り合ったばかりだ。

偶然街で彼女をみかけた僕はなんとなく、彼女に声をかけていた。

「ドライブしない？」

「うん」とだけ、彼女は頷いた。

そうして、彼女は僕の車の助手席にいる。

でも何故？僕はこんな山道をドライブしている？

思いだせない。

僕はFMラジオをかけた。

DJがニュースを読んでいる。

この近くの山で女性の腐乱死体が見つかったって内容のものだ。

僕はラジオの周波数をかえた。

ラジオからはムードのでる音楽がながれている。

僕は彼女の手をにぎった。

冷たい手だった。

「キスしていい？」

「うん」彼女は頷いた。

僕は車を山道の脇にとめた。

僕は彼女の肩に手をまわしてキスをした。

でも……

キスをしている感覚がない。

助手席に彼女はいない。

僕は時々記憶がなくなる。

医者にいったがどこも異常がないっていわれた。

僕は夢を見ていたのか？

しかし、ここは自宅のベッドの上じゃない。

助手席を見る。

彼女はいない。

ふと、僕はフロントガラスをみた。

彼女はいた。

彼女はふりしきる雨の中、フロントガラスにへばりついていて、すごい形相で睨んでいる。

これはきつと夢なんだ。

なんで彼女が、僕を睨むんだ。

フロントガラスをもう一度みた。

彼女はいない。

助手席を見る。

彼女がいた、すごい形相で僕をにらんでいる。

彼女は僕の首を絞める。

「くるしい、助けて」

僕は全てを思い出した。

二週間前のあの日、長くつきあっていた彼女を、別れ話のもつれで殺したことを……

僕は時々記憶がなくなる。でもやっと病気はなおったようだ。

## お化け屋敷

ある遊園地での出来事。

この遊園地にお化け屋敷で働いている安田という男がいた。

彼の仕事は、お化けの着ぐるみを着て、暗がりには隠れるとお客を驚かすのだ。

彼は、この仕事が入っていた。

それは、少々暑いのが難であるが、着ぐるみを着ているだけあつて時給がいいからだ。

多少の演技力はあるものの仕事も単純で簡単だし、遊園地が閉園時間になれば、決まった時間に帰れる。

それに、常に暗がりにいるので、仕事をさぼっていてもバレナイからである。

それと、安田がこの仕事が好きで最大の理由は密かな楽しみがあるからであつた。

安田の密かな楽しみとは、女性客を驚かしたときに、どさくさまぎれに、女性に抱きついたり、胸やお尻を触ることが出来ることだつた。

以前、安田は大手広告代理店に、エリート営業マンとして勤めていたが、常にトップセールスをあげないといけないと思うストレスから犯罪を犯してしまう。

それは、通勤途中の電車内で、ついつい、女子高生の体を触つてしまい痴漢容疑で現行犯逮捕された経歴があるのだ。

女子高生とは、示談とゆう形で、話はついたが、会社は解雇されてしまった。

セコイ性癖が開花した代償は大きかつた。

今日も安田は、開園と同時に、仕事、いや、お触りに励んでいた。今日の安田のコスチュームは、一つ目小僧である。

墓場に隠れて、お客がくると驚かす。

しかし、安田の出番は女性客だけである。

男性だったら、安田の登場はない。

なぜなら一度、演技をやりすぎて男性客に殴られたことがあったからだ。

アベックだったら、考える。でるべきか、でないべきか。

今日は、平日にもかかわらず、学生の団体客があったので、おおいに、安田の性癖は満たされた。

しかし、団体客が去った後はピタッと客足が途絶えてしまい、安田はもてあましていた。

すると、前方から、アベック登場。

墓場の陰から、様子を窺う。

アベックの女の方は、怖がりのようで、

「キヤー、キヤー」言って、男性にひつついている。

「クソ、いちやつきやがって」安田は、舌打ちした。

安田は、男性客の為に、少し女を驚かせてやろうとおもった。

安田は時にはサービス精神旺盛なのである。

「俺も少しは、触らせてもらうけどな」

墓場の陰から、出るタイミングを計って、いざ、安田、出陣。

「安田、いきまーす」

「デロデロ、バー」

「キヤーー やめて〜」

男性客は女性に抱きつかれて、喜んでいる。

安田すかさず、女性の尻を触る。

女性客またまた「キヤー、やめて〜」

安田は抱きつこうとしたがやめた。

男性に思いつきりにらまれたからだ。

「安田、たいきやーく」

安田は、定位置の墓場のかげに戻った。

男性客は女に、

「いまの、一つ目、マキちゃんのお尻触ってなかったか？」

「ええ……そうなの？　気づかなかった。もう、いいじゃん　いきましよう」

「ふう、危なかった」

アベックは気をつけないとな。安田はため息をついた。

それから、一時間ほど一人として、お客が来なかったので、安田は休憩を取ることとした。仕事の合間のタバコの一服は実にうまいと浸っていた時、若い女が一人でフラフラと歩いてくるのが見えた。女は、二十代そこそこといったところだろうか、真っ白なワンピースを着ており、髪は肩まであり、目、鼻立ちがはっきりした安田好みの美人だった。

「きたあ」

安田は興奮しながら、スタンバイにはいった。

「今度は後ろから、驚かせてやろう」

でも、女、一人でこんなところに、入ってくるなんて珍しいなと、安田は思ったが、女に触りたい気持ちじゃせんこうしたため、女が通りすぎるの待った。

女が、安田の横を通りすぎた。

すかさず、安田は女の背後にまわる。

「安田いきまーす」

安田は、女の肩を叩いた。

女が振り向く、

「デロデロ、バアー」

しかし、女は驚かない。

安田の顔をまじまじと見ている。そして、笑顔で、

「おにいちゃん。」

「ええ？」安田には、妹なんかいない。

「あの、私には妹なんかいないんですけど」すっかり、素に戻った安田。

「やっぱり　お兄ちゃんだよ、おにいちゃん」

何、いつてんだこの女？ 薬でもやってんのかと安田は思った。

「お兄ちゃん、昔みたいにな、いいことしましょ」

「いいこと、しましうって」

その言葉に、安田は興奮した。

何にしても、この女、おめでたい状態にかわりない、しめしめと

安田は思った。

「ちよつと、イタズラでもしてやるか」

安田の気持ちを知ってかいなか、

「おにいちゃん。こつちだよ、こつち」

女は、安田の手をひっぱって、非常用の通路に連れて行く。

「ねえ、おにいちゃん、服を脱がせて 昔<sup>モモ</sup>みたいに、百の体を見て」

予想外の展開、安田は目を輝かせて言った。

「本当にいいのかい？」

「うん 早く脱がせて、おにいちゃん」

安田チャンス到来。

「安田、服脱がし、いきまーす」

女のワンピースを肩から脱がす、真っ白な肌とブラが見える、さらに、服を下にずらす。

「うわぁ」

安田の悲鳴が響く。

女の体には無数の目がついている……

「どうしたの？ おにいちゃん、おにいちゃん、前はいいな、モモって言うてくれたじゃない、モモの体はいい、目があつて」

と言って、女はまた、安田の手をひっぱる、今度は非常口の壁に向かつて。

「もういいよ、おにいちゃん お家に帰ろっ」

女はどんどん、壁に吸いこまれていく、一つ目小僧の安田もろとも……





## 窓際の声

春になると、猫が盛ってやかましい。

ここずっと、異性を求めてなき続けている。

「フギヤーウーフギヤーフギヤーフグギヤー」

特に夜になると、ひどい。

僕の家は平屋造りだ。

それで、僕の部屋は道路沿いに面してた。

部屋の東側の隅には大きな窓があって、その横にベッドを置いて  
いる。

僕はいつも窓際のベッドに寝そべってテレビを見るのが好きだ。

でも、好きといっても窓際が好きなわけでは無い。

ゴロゴロしてテレビを見るのが好きなのだ。

どちらかと言うと、窓際は嫌いだ。

なぜかって？

せつかく、うとうと寝ていても、人の話し声や、車の通過音で起こされてしまう事が度々あるからだ。ほかに、新聞の集金の人や、宅配に近所のおばさんなんかは、部屋の電気がついてると、すぐに窓をガンガン叩いて早くでろと催促してくる。

それと、さっきから猫の鳴き声が、ひどくうるさい。

「フギヤーフギヤー」

これじゃ、テレビを見ていても、集中できない。

テレビでは、なにか大きな出来事があったみたいで報道特別番組をしていた。

面白そうなので、テレビのニュースを見ようとしたら、また、あの鳴き声だ。

猫の分際で、いちやいちゃしゃがって、家の近くからおいだして

やる。

とうとう、僕は頭にきて部屋から家の外に飛び出した。

外にでたら、猫はいなかった。

そのかわり、人がたくさんいた。

その人達はなにか、様子が変だった。

僕が、猫の鳴き声だと思っていたのは違った。

その人達が口から発していたのだ。

その人達は、フラフラしながら、僕に近づいてきた。

僕はとっさに自分の家に走り出した。

家に帰ると、全ての出入り口に鍵をかけた。

外からは、さっきの奇声と窓をガンガン叩く音が聞こえている。

つけっ放しのテレビからは、興奮したテレビのレポーターが叫んでいた。

「まさに、これは地獄絵図といっていいでしょう。なんと、人が人を喰ってます」

なんなんだようと僕も叫んだ。

突然、部屋に母親が入ってきた。

母親は土気色の顔をして、あいつらと一緒に声をあげていた。

そして、僕の腕にかみついた。

## ネクロマンテック・マザー

ある暑い夏の日、僕は時々見る悪夢にうなされて目を覚ました。

僕のパジャマは悪夢のせいで掻いてしまった寝汗がぐっしよりと肌にこびりつき不快である。ベッドのシーツも、あまりの恐怖のために失禁してしまったのだろうか濡れていた。

僕を朝から嫌な気持ちにさせる夢の内容は、数年前におこった夏の日の忌まわしい出来事……

僕にとっては忘れてしまいたい出来事なのだが、こうして時々、夢に現れては僕を苦しめる。夢の中では、両親が激しく罵り合っていて、僕は両親の喧嘩している部屋のドアの隙間から、こそっと覗き見ていた。父さんが激しく母さんを罵倒していて、どうしてこんな事するんだ！ とか子供の教育によくない！ と父さんは唾をとばしながら、わめいていた。母さんは黙って聞いていたが、突然、近くにあったスタンドライトで父さんの頭を殴ったのだ。ドスツと鈍い音がして、父さんの頭から血が噴出した。そして、ピクピク痙攣している父さんの首をネクタイで絞めだした。母さんは物凄い形相をして、ベッドのふちに足をかけて思いつきり踏ん張りながら、父さんの首を締め上げる。僕はそんな事をしたら、父さんが死んでしまうからやめてよと思ったが、怖さのあまり声も出ないし、母さんが怖かったので何も出来ず、ただ父さんが口から血の泡を吹いて死んでいくのを見ているのが精一杯だった。父さんの死体の傍らには、僕が最近飼いだした猫が無惨にも腹が裂かれて横たわっていた。

僕は汗で濡れてしまったパジャマを着替えると、仕事に行く支度をした。さっきの悪夢のせいで、僕の心臓は、まだバクバクしている。僕は気分をおちつける為に、アイスコーヒをグラスに注いだ。コーヒを飲みながらテレビをつけると、天気予報をしていて予報官のおじさんが今日も暑くなりますので十分な水分補給をして熱中

症に注意してくださいといっている。そのあとに週間天気予報で、ここ一週間は夕方にかけて大気の状態が不安定になりやすいので、昼間晴れていても、突然の夕立ちによる落雷や雷雨にお気をつけてくださいとのことである。僕は連日の暑さのためで、多少夏ばて気味なので涼しくなるなら雨ぐらいだったら降ってもかまわないと、その時は思っていた。コーヒーを飲み終わって、気分が少しおちついた僕は、母さんに朝のあいさつをしてから、仕事にいくために、自宅をあとにした。

僕の名前は根黒 技一 独身で、今は母さんと二人暮らし、仕事は定職に就かず、近くの工場で今は派遣の仕事をしている。歳はちょうど今年の夏で三十歳になったばかりである。夏生まれの僕だが、僕は夏が大嫌いだった。

僕が夏が大嫌いな理由は、一緒に住んでいる母さんがひどく暑がりな為である。

僕と母さんは京都に住んでいるのだが、京都というところは、四方が山に囲まれている盆地に街が建てられているので、熱が山によって外に逃げず、くぼ地に建てられている市街地に熱がこもるので、実に夏場は暑いのだ。暑さが苦手な母さんの為に、我が家では室内の温度は年中15度と決まっている。夏場以外なら、この温度を保つのは、さほど難しいことではないのだが、京都においては夏場に15度を保つのは至難であった。

だから、我が家では母さんのいる居間にはエアコンが三台置かれていて、一日中フル稼働している。全くもってして、電気代がバカにならないのだが、暑いと母さんの機嫌が凄く悪くなるので僕はいたし方なく思ってるわけである。僕は母さんのご機嫌を損ねてしまつて、今は冷蔵庫の中でバラバラになって眠ってる父さんのようになりたくないのだった。父さんをバラバラにして、冷蔵庫の中に入れたのは僕なのだが、それには理由があつて、父さんを絞殺してしまつた母さんは、しばらくの間、死体进行处理しないで、死んだ父さん

と性行為をしていた。父さんは、さすがに死んでから二日ほどしてから、体が腐り始めてきて、異臭を放つようになっていたが、母さんはおかいまいなしに、父さんの死体と戯れていた。さすがに、これでは近所の住人に異臭で通報されると思った僕は、母さんをなだめて風呂場で父さんの体を切断して、冷蔵庫に入れた次第である。

父さんがいなくなつてからというもの、母さんの欲求は僕にむけられた。僕は週に、三回ほど母さんの夜の相手をしなさいといけないう最初の頃は、さすがに母さんと性行為を持つことに、僕は抵抗を感じていたが、今ではまんざらでもなかった。まんざらでは無いのは、性行為をしている時は親子関係ではなく、恋人のように母さんと接することが出来る。そして、性行為が終わると母さんは、僕のふだん思つてることや悩み事を聞いて、的確なアドバイスをしてくれる。僕はそんな優しい母さんが大好きだ。

「おい、根黒さん。ボケツとしてるんじゃないぞ！ 考えごととしてる暇があつたら手を動かせ！ 根黒さんのせいでラインが停まるじゃないか！」

僕は仕事中、母さんの事を考えていたら、工場の正社員に怒鳴られてしまった。僕を怒鳴りつけてるのは、田辺といって、見た感じ二十四、五歳そこそこの若造である。なにかにつけて、僕に因縁をつけてくる嫌なやつだ。特に夏場になつてからは工場に冷房が無い為に田辺は暑さのためか、常にイライラしててなにかにつけて僕にあたりちらす。僕は母さんとの生活費と毎月多額の請求がくる電気代を稼ぐために我慢してるのだが、いい加減、田辺にはこりこりしている。

「なに、反抗的な目をしてるんだ！ 嫌ならいつでも辞める！ 根黒さんの代わりはいくらでもいるんだぞ！」

そう言つて、田辺は僕の頭を軽くこつくと、自分の作業場に戻つていった。

毎日、毎日繰り返される辛い日々だが、これも、母さんの為だと

思って我慢した。しばらくすると、田辺がまたやってきて、今度は残業してくれないかと言ってきたが、今日は母さんと性行為する日だったので、丁重に断ってやった。田辺は舌打つしたが、田辺自身忙しかったのか、文句も言わず戻っていった。そうこうしているうちに、作業終了を意味するチャイムがなって嫌な仕事が終わった。僕は早々に作業着を着替えると、一目散に工場を後にして自宅に戻った。

自宅に帰ると、すっかり汗と油で汚れてしまった体をシャワーで洗い流すと、母さんのいる居間にいった。

居間のドアを開けると、物凄い冷気を感じた。とても夏とは思えない環境だった。エアコンの稼働音がブォーンブォーンと部屋中に響きわたっている。

「ただいまあ、母さん」

「おかえり、技一。今日もお仕事ご苦労様」

母さんは優しく笑顔で迎えてくれた。そして、僕のおでこに軽くキスをしてくれた。それを、きっかけにいつものように僕と母さんは愛し合った。僕は仕事でのストレスがたまっているのが原因なのか、いつもより激しく母さんと愛し合った。

「いいわ、いいわあ、技一もつと激しくしてえ」

「はあゝはあゝ、母さん、母さん、僕もう我慢できない」

「いいのよ。技一、母さんにあなたの温かいものちょうだい」

「かあ、母さん、いくう……いつちやうよ」

そうして、僕は母さんの中で果てた。

性行為が終わったあと、僕は母さんに思い切って悩みごとを打ち明けた。

「実はね、母さん悩み事があるんだよ」

「いったい、どうしたの？」

「うん……」

「なんなんだい？ 母さんは黙ってる子は嫌いだよ」

「うん……僕、会社でいじめられてるんだよ。それで、もう仕事にいくのが辛くて、辛くて」

僕は母さんに田辺の事を細かく話した。

「お前みたいな、優しい子をいじめるなんて、ひどい奴だね。母さんがそいつを懲らしめてあげるよ」

「母さん、懲らしめるって？ 何するの？」

「全く意気地のない子だね。いいから、今度、適当な理由をつけて、そいつを家につれてきなさい。」

そしたら、全てが解決するのよ」

「うん。わかったよ母さん」

母さんは一体、田辺に何をやるのだろうか？ ただ分かってるのは、母さんが僕の悩み事を聞いてから、ニタニタ薄ら笑いを浮かべている状況から判断して、田辺はただでは済まないことは事実である。

次の日、僕は昼休みに田辺のところへ行って、自宅に来ないかと誘ってみた。普通に誘ったら、絶対に来ない田辺なのだが、彼はサーフィンが趣味なので、自宅にいらないボードがあるのでよかつたら貰ってほしいと言って誘い出す事にした。最初、僕がサーフィンのボードを持つてること自体に疑っていた田辺だが、事前に調べていたサーフボードのメーカー名をだしたところ、目を輝かせて話に喰い付いてきた。

「本当にいいんすか？ 買ったら高いんだよね」

「田辺さんが、気にいったら、持って帰ってくださいよ。僕あまりサーフィンいく時間ないですし、田辺さんに使ってもらったほうがボードも喜ぶってものですよ」

「それで、根黒さん。いつボード取りにいったいい？」

「明日の金曜日仕事終わってからってことにしませんか」

僕は田辺にそう言った。

「俺はボードがいただけるのだったら、いつでもいいですよ」

「それじゃ、明日つてことで、田辺さんお願いします」

そうして、僕は田辺をおびきよせる事に成功した。その日は作業が遅れても田辺は文句も言わず、僕の作業を手伝ってくれた。全く人つてのは、げんきんなものだと思っただ。

僕は帰宅すると早速、母さんに報告した。

「母さん。明日、僕をいじめてる奴つれてくるよ」

「そうかい。それはよかったね」

「でも、僕、あいつに嘘ついちゃった。サーフボードなんか持っていないよ。どうしよう？ 母さん」

「気にすることないよ。お前は母さんに紹介するだけで……」

母さんは、またもニタニタ笑っていた。その後、僕と母さんは、昨日に引き続き激しく愛しあったことは言うまでもない。

金曜日の朝になった。

昨日は興奮のあまり、なかなか寝付けなかったが、目覚めは最高である。いつものようにアイスコーヒーを飲みながらテレビの天気予報を見た。予報によると、今日は猛暑日になるとのことだった。

このところの京都は真夏日や猛暑日が連日繰り返され、夜になると熱帯夜という地獄のような日々である。いつもの僕なら予報官がいつてる暑さを意味する言葉を聞いただけで、うんざりと気分が滅入るのだが、今日の僕の気分は、外の天気のように雲ひとつなく快晴であった。工場にいつてからも、仕事は作業に追われることなく順調に進み、気がつくと退社時間になっていた。

僕は、田辺の車の助手席に乗り込み、自宅までの道案内をしていた。

「はい、次の信号を右に曲がってもらったら、マンションが見えますので」

「はいよ、右折するのね」

田辺はサーフボードが貰えるとあってご機嫌である。



車が右折して、しばらく走ると、僕達親子が住んでるマンションが見えた。

「今、見えてるマンションです。それから田辺さん、よかったら晚饭、母さんが用意してくれてますので一緒にどうですか？」

「いいんですかあ、ちょうど俺、腹へってるんでいただきますよ」

「それは、良かった。母さんもいつも二人で食べてるので喜びますよ。車は来客用の駐車場がありますので、そこに停めてもらえますか」

僕と田辺は車から降りてマンションのエレベーターに乗った。僕は四階のボタンを押した。エレベーターの扉が閉まり、ゆっくりと上昇していった。エレベーターから僕達は降りると、薄暗い廊下を進んだ。途中まばらにある天井に設置されてる蛍光灯には、光を求めて虫がいっぱい群がっている。

「ここですよ。田辺さん」

「へえ、結構いいところに住んでるんすね」

「いえいえ、賃貸ですけどね」

僕はそう言って玄関の扉の鍵をあけた。

「どうぞ、田辺さん、汚いところですけどお入りください」

とりあえず、僕は母さんの支度が出来てるのか心配だったので、自室に田辺を案内した。

「田辺さん、ここが僕の部屋なんです。食事の準備が出来てるか、母さんに聞いてきますので、しばらく、ここで待っていてください」

「ああ、おかまいなくね」

田辺はそう言っ、僕のベッドの脇に腰かけた。

僕は母さんの様子を見に居間にいった。ドアを開けるとエアコンの稼働音がブォーンブォーンとしていて、激しい冷気を吹き出している。

「母さん、あいつを連れてきたよ」

「そうかい、そうかい。食事の準備が出来てるので、早くこの部屋につれてきなさい」

僕は居間のテーブルを見た。テーブルの中央には、メインデッシュであるうか、美味しそうな父さんの生首が置いてあり、頭部が見事にスパツと開かれていて、父さんの脳みそが露出していた。他の料理も、父さんの内臓を料理したものであるう。父さんの長い腸が綺麗に調理されて皿に盛り付けてあった。

「母さん。凄い豪華じゃないか！」

「夏なのでスタミナつけないと思って、腕によりをかけて作ったのだよ」

僕はあまりの豪華さと、興奮のあまり恥ずかしながら勃起してしまった。僕は勃起してしまった一物を片手で押さえながら、田辺を呼びにいった。

「田辺さん。食事の用意が出来てますので、母さんのいる居間に来てください」

僕は興奮のあまり、声を裏返しながら田辺に言っていた。

田辺は腰を上げて立ち上がると、居間に向かって僕のあとをついてきた。

僕はゆっくりと居間のドアを開ける。中からは、ブォーンとエアコンの音がなっている。

「さあ、田辺さん、遠慮せずに部屋の中へどうぞ」

僕は押し出すように、田辺の背中を軽くおして、田辺を居間の中に入れた。

田辺の第一声は寒いだった。

「田辺さん。母さんですよ！」

僕は椅子に座ってる母さんを田辺に紹介した。

「うわあああ、何だよ、これは……」

田辺は、何故だか分からないが、母さんを見て絶叫して、腰を抜かし、居間の床が田辺の失禁によって汚れてしまった。

「田辺さん、どうしたのですか？ 母さんですよ」

僕は母さんの座ってる椅子の後ろに回った。

「こんばんわあ、田辺さん。いつも息子がお世話になってます」

と言って母さんは田辺にあいさつした。田辺はあわあわあしていたが、ようやく、か細い声で言った。

「母さんって……どう見たって死体じゃないかよ！ それにどうして、お前が喋っているんだよ！」

僕は田辺のいつてる意味がよくわからない。母さんが死体だった？ 今も元気に生きていて、あいさつしたじゃないかよ！

「田辺さん、一体どうなされたの？」

母さんは再び、田辺に語りかけるように聞いた。

「だから、どうして、お前が喋ってるんだよ！ お前の母さんはミイラみたいに干からびて……」

その時、僕の頭の中で母さんの声が響いた。

「こいつを、殺せ、殺せ、殺せ！」

気づくと僕は、ハンマーを田辺の頭に何度も振り落としていた。

母さんの部屋は田辺の血と脳みそが散乱していた。

僕はついに、邪魔な田辺を始末することに成功したのだった。田辺を始末した僕は、今までに無い快感を得ていて、思わずその場で射精してしまったほどである。でも、何故？ 田辺は死ぬ前に、母さんが死んでるなんて変な事をいったんだろう。こうして、母さんは元気に田辺の死体を見ながら、笑っているというのに！

僕と母さんは、田辺の死体を横目にしながら、食事を楽しんだ。

母さんとは食事中、会話がよくはずんだ。

母さんは僕に褒め言葉をたくさんくれた。

「ようやく、技一も男になったね。これで、お前も一人前だよ。母さんは技一の事を誇りに思ってますよ」

「あ、ありがとう、母さん。なんかあ、僕もふつきれたよ」

そうして、二人で大笑いした。

食事の方も、実に美味しかった。父さんは非常に美味しいのだ。二人ともむしゃぶりつくように、父さんを堪能した。父さんの頭は、僕と母さんにスプーンで吸いあげられ、空っぽになっていた。父さ

んの内臓も、プニユプニユした食感がたまらない。動物のモツなどとは比べようにならないくらい美味しさなのだ。

「ところで技一、そこで横たわってるやつはどうするんだい？」

母さんは田辺の死体を見ながら聞いてきた。

「うん。父さんのように、バラバラにして冷蔵庫に保存しようと思うんだよ！　ちょうど、父さんをいただいたので、冷蔵庫に空きができたからね」

「そうかい、そうかい。技一は、本当に頭がいい子だね」

「後で風呂場について田辺を解体するよ！」

「ねえ、技一、解体する前に、そいつと母さん、遊んでもいいかい？」

「だめだよ、母さん！　僕がいるのに浮気するってのかい、それに、こいつは汚れているから、母さんにはもったいないよ」

「じゃあ、今日は技一が母さんの火照った体を癒してくれるのだね」

「うん。わかったよ。全く母さんはスケベなんだから」

母さんは照れ臭そうに笑った。僕も母さんにつられて笑った。僕達、親子にとって幸せな夜になった。

食事が済んだ後、僕はシャワーを浴びてから、母さんの部屋にいった。母さんは布団の上で、素っ裸になって僕を待っていた。僕は母さんのおでこから順にキスをしながら、体を愛撫していく。母さんは歳のせいかな、さすがに皮膚は力サ力サしているが、愛する母さんの為に僕は一生懸命に母さんの体を撫で回した。

母さんは体が硬いので、時々、間接を曲げるとボキボキと音をたてた。そして、ほどよくしてから、母さんの大事な部分にローションを塗って、僕と母さんは一つになった。母さんはいつにもまして、僕の激しい腰使いによってヒイヒイ喘いでいた。僕は母さんの中で勢いよく発射してその日の営みは終わった。

母さんとの愛の営みが終わると、僕には一仕事が残っていた。

田辺の死体を風呂場に運ぶと、手際よく死体の解体を開始した。

僕は一度、父さんを解体した経験があるので、それほど苦勞することなく、田辺をバラバラにすることが出来た。時間にして三時間ほどで、田辺の体の部分を袋につめて、父さんの入っていた冷蔵庫に収納する事が出来た。それから僕は田辺の着ていた服を持って、田辺の車に乗り込むと、自宅マンションから遠く離れた河原に放置した。車を放置してから、最寄の国道まで徒歩ででてから、タクシーを拾って、自宅マンションに戻った時には、すっかり夜が明けていて、スズメと蝉が喧しく鳴いていた。

僕は自室に戻ってから、すっかり疲れてしまい、すぐに睡魔が襲ってきた。

そして、僕はいつもと違う悪夢を見た。

夢の中では、深夜に見慣れた自宅マンションの外に僕がいて、僕はエレベーターに乗って四階までいくと、

自宅の玄関のベルを押している。中から、父さんが玄関のドアを開けた。父さんはひどく怒った様子で、僕を確認すると、意味不明なことを言ってきた。

「なんのようだこんな時間に！ もう妻につきまとわなくてくれ」

僕は何故だかわからないが、いきなり持っていたハンマーで父さんの頭を殴っていた。卒倒してしまった父さんを尻目に僕は、母さんを探して居間に向かっていく。居間の中には母さんがいて、僕の姿を確認すると叫び声をあげている。そして、僕は母さんの首を絞めていた。そこで夢は覚めた。

一体なんで、こんな夢を見るのだろうか？ 僕は考えたが、頭が痛くなるだけで答えは見つからなかった。

きつと昨日の出来事で疲れているだけだと僕は思った。その証拠に次の日の日曜日になってから、僕は夏風邪をひいてしまったのか、高熱がでてしまって、一日中寝込んでしまった。流石にあわただしい週末だったので致し方ないことであるのだが、明日仕事にいかないと田辺のことで仕事場の者に怪しまれては困るので、じつと熱が下がるのを待った。幸いな事に、月曜の朝になってすっかり熱は下

がり、すっかり僕は元気になっていた。さすがに週末、精のつく父さんを食べたおかげだと、密かに父さんに感謝した。

いつものように、出勤前にテレビの天気予報を見ながらアイスコーヒー飲んだ。天気予報は今日も快晴で猛暑日になる恐れがあると見慣れた予報官がいつている。相変わらず大気の状態も不安定なので、落雷や雷雨に、ご注意くださいとの内容だった。僕は母さんに朝のあいさつを済ませると工場に出勤した。

工場につくと、いつものように朝礼があつて仕事の段取りの説明が作業リーダーからあつた。

「あれえ、今日は田辺君はきてないのか？ めずらしいな、誰か休むとか連絡ないか？」

僕以外は田辺の状態を知ってるわけがないので、みんな黙って聞いているだけだった。

リーダーは田辺には、後で連絡を取るといっただけで、田辺のことは軽く流して朝礼は終わった。

僕は可笑しくてたまらなかった。だって田辺が僕の冷蔵庫の中で眠ってることなんて、誰も知る由がないからだ。そして、午前中の仕事は何事もなく終わった。

昼休みになつて、僕が休憩場で休んでいると、リーダーが僕の横に座り話しかけてきた。

「根黒さん、田辺君と連絡取れないのだけど、何か知らない？ 他のものに聞いたところ、金曜日に根黒さんの自宅にサーフボード取りにいくと、はしゃいでいたって皆言ってるのだよ」

「はあ。確かに田辺さんは、僕の家に来ましたけど、ボードを受け取るとすぐに帰られましたよ」

「そうですか、田辺君、寮に住んでいるのだけど、寮長さんの話によると、金曜日の夜から行方不明みたいなんだよ」

「え、そうなんですか？ 僕の家に来てからすぐに帰られましたから、それ以降の事はわかりません」

「そうだよね。ごめんごめん」

僕はリーダーから田辺のことを聞かれて、ドキドキしたが、うまくかわせてホットした。

しかし、ホットしたのも、つかの間の事であって、午後に入ってから、とんでもない出来事が僕に振りかかったのだった。

昼の作業が始まって一時間ほど経った時に、突然ラインが全停止した。停止した原因は突然の雷雨によって近くの変電所に落雷が落ちて電気が供給されないとの事だった。リーダーの話によると、復旧の見通しが立たないとの事である。被害状況は京都市内全域にわたっているのだそうだ。外では信号機も止まってしまい市内はパニックになってるとの事だった。僕はそのことを聞いて汗が吹き出した。もちろん冷や汗である。

電気が止まると云う事は、自宅のエアコンも冷蔵庫も止まってしまふのだ。冷蔵庫の中には、田辺が眠ってるじゃないか！ 数時間もしたら、田辺が腐ってしまったって異臭が近所にもれてしまう恐れがある。それに、母さんだって、暑さに耐えられなくなって、何をするかわかったものじゃない。

僕はリーダーに突然の腹痛を訴えた。リーダーは僕の尋常じゃない冷や汗をみて、すぐに帰らせてくれた。

急いで作業着を着替えて外に飛び出したら、物凄い雷雨だった。バス停に向かいバスを待ったが、市内は物凄い渋滞であって、バスが来る気配が全くない。仕方が無いので、僕は自宅マンションまで15キロはある道のりを歩いて帰ることにした。僕は急いで帰ったつもりだったが、雨に邪魔されて思うように進むことが出来ず、マンションに着いた時には、数時間が経過していた。

僕は玄関のドアを勢いよく開けると、母さんを確認しにいった。部屋に入ると、案の定、異臭がしていた。

匂いの元を早くつきとめたがったが、今は母さんの事が心配だった。居間のドアをあけると、いつもの冷氣と違って生暖かい空気が流れている。母さんを確認した。幸いなことに母さんはどす黒く皮膚は

変色しているが、元気だった。少し匂いはしているものの、僕は安堵した。その時、ブォーンと音がなって、エアコンが動き出した。電気が復旧したのだった。僕は助かったと思った。そして田辺の入ってる冷蔵庫を確認しにいった。

田辺の方は全く持つて安心できる状態で匂いもしていない。触ると田辺の生首はまだヒンヤリと冷たかった。でも、一体この物の腐ったような匂いはどこからしているのだろうか？ 匂いの元は風呂場からしていた。

僕はしまったと思った。田辺を切断した道具を洗わずにそのままに放置していたのだ。きつと、停電する前から匂いはしていたのだろう。風呂場はむちゃくちゃに臭かった。もちろん、その腐った血の匂いは近所にも、もれていたのだろう。それから、数時間後に警察の人がたくさん、僕の自宅に押し寄せてきて、僕は逮捕されてしまった。警察の人は、あまりのひどい有り様に吐いている者もいた。

僕は今、地元警察の留置所に入れられている。朝、目が覚めると取調べ室に閉じ込められて、偉そうな刑事に何度も同じことを聞かれて困っている。

「それで、君の名前は？」

「僕の名前は根黒 技一っています」

「嘘をつくのじゃない！ 根黒つてのは被害者の名前なんだ！」

「だから、僕は根黒の一人息子なんですよ！」

「バカヤロウ！ 被害者には子供はいないのだよ。まあいい、質問をかせよう」

刑事はテレビドラマで見えるようにしつこく、僕を攻め立てる。ときおり、僕の答えが気にいらないと激しく机を殴る。

「お前のいつてる父さんとやらはどうしたんだ？」

「母さんと一緒に、田辺を殺した日に一緒に食べました」

「はああ？ お前の母さんと言ってる女はミイラ化していて死後一年は経過してると鑑識結果がでてるのだよ。どうして、死体が食べ



ること出来るのだ！」

「だから、何度もいつてるじゃないですか！　母さんは生きているですよ」

僕と刑事のやり取りは一向に進展しなかった。このようなやり取りが一週間ぐらい続いた頃、今度は刑事の代わりに大学の教授が僕の話の聞きにきた。

「それで、根黒さんは時々、母親とセックスをしたのですね」

「はい、週に三回は母さんと愛し合っていました」

教授は僕の話の信じてくれて、とても優しくかった。なんでもかんでも僕のいつてることを紙に書いている。

僕は教授が何を書いているのか興味があつたので、こそつと覗き見た。紙にはネクロフェリア（死姦）の疑い濃厚と書いてあつた。それと、多重人格とか妄想壁とか意味のわからない言葉が書かれていた。

そんな日々が数ヶ月続いたある日、僕は医療刑務所というところに入れられた。

刑務所といつても、テレビで見ているような過酷な労働が待ってるわけでもなく、ただ独房に入って暇な一日過ごしてるだけでよかった。時々、更正具合を見るとか言つて、先生の質問に答えるだけでいい。

そうして、僕は五年ほどここにいてから、仮釈放された。僕は寂しがりやなので、新しい母さんを探しに、東京に移動した。

しばらくすると……すぐに新しい母さんが見つかった。今度は女子大生の母さんだった。

京都ほどではないが、東京でも暑い夏がやってきた。今度の新しい母さんも非常に暑がりであつて、暑いと機嫌が悪くなる。

そして……母さんのいる居間からはエアコンの稼動音が今日も響いている。

ブォーン、ブォーン、ブォーン……ブォーン。　　了。

## エピソード

男の脳裡に鮮烈な映像を見せ付けた万華鏡は、彼の瞼にぐいぐいと食い込んでいた。

万華鏡を瞼から引き離そうとしても、右手の自由は奪われていて、男の意思とは裏腹に益々、瞼に食い込んでいくのだった。

その状態に比例するかのようになり、男は瞼に激痛を覚え、顔を苦しそうにいがめる。

「誰か、助けて……」

男は、痛さで意識が朦朧とする中、心の中で声を上げる。

声を出して助けを呼ぼうにも、喉からは発声できず、外に出ようとしても体は金縛りの為に動いてくれない。ただ、動くのは自分の意思ではない右手のみであった。

その時、頭の中で老婆の声が聞こえてきた。

「苦しめ、もっと苦しめ……あたしは、お前に殺された時はもっと……」

「許してください。盗んだものも返しますし、あなたの事は自首します。だから助けて　許して……」

男は、激痛から逃れる為に老婆に心の中で嘘をつく、哀願した。「分かった。お前の気持ちが真実なら助けてやるよ。さあ、目を見開いて万華鏡の中を見なさい」

そう、老婆の声が頭の中で響いた。

男は、また万華鏡の中を覗いた。

覗いた先には、昼間の男がした行為が早送りのように、映像になって浮かびあがっていた。

そして、苦しんでる自身の姿のところまで映像が進むと、玄関のチャイムが鳴った。

万華鏡の中でも、玄関のチャイムが鳴っている。

その瞬間に男の自由を奪っていた金縛りが解け、男は助かったと

思った。

男は動けるようになった体で玄関に行き、ドアノブを開けた。玄関の外に立っていたのは、見覚えのある青年がいた。

その見覚えのある青年は、男を見るなり、薄ら笑いを浮かべて室内に入ってきた。

青年は、さきほど男が最後に見た殺人鬼の根黒 技一であった。青年の手には、鋭利な刃物が握られている。

男は、それを見るなり自身の置かれてる状況を瞬時に把握するこ  
とが出来た。

「婆さん、助けてくれるって言ったじゃないか」

男は声を荒げて叫んで言った。

すると、また、頭の中で声が響いた。

「おやおや、訪問者は彼でしたか。お前は、嘘を言っていたようだね！ もう助からないよ……」

その老婆の声が消えると、男はわき腹に痛みを覚えた。

万華鏡の中では、男の腹に刃物が突き刺さってる映像が映し出されているのだった。

了。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5349g/>

---

人間万華鏡

2010年10月8日13時53分発行